



# フォー・アンド・ア・ハーフ・アワーズ

前橋梨乃

公開版

*for Smart Phone*

## Contents

- Friday 7:30pm 「デスティニー」
- Friday 8:00pm 「ターニングポイント」
- Friday 8:30pm 「ターニングポイント」
- Friday 9:00pm 「スイングハート」
- Friday 9:30pm 「アルターエゴ」
- Friday 10:00pm 「アプローズ」
- Friday 10:30pm 「ロマンシングパス」
- Friday 11:00pm 「プレシャスタイム」
- Friday 11:30pm 「プレシャスタイム」
- Saturday 0:30am 「ターニングポイント」

★タップすれば各章へジャンプします

Friday

7:30pm

シ  
ョ  
ツ  
ト  
バ  
ー  
「  
デ  
ス  
テ  
ィ  
ニ  
ー  
」

グラスを揺ると、中の氷が乾いた音を立てた。

すでに二杯目がほぼ空になっている。この店に入つてまだ十五分しかたっていないのだから、いつもより

ペースは速い。

やっぱりちよつと自棄やけになつてゐるな、と、浅見清孝は一方でそんな自分を冷静に観察していた。

新たな販路開拓のために費やしたこの三カ月間が、すべて無駄になつた。

来週からは、この間、根回しに根回しを重ねて口説いた代理店や販売店に、ひたすら詫びてまわることになるのだろう。

それも気が重いが、まあ、そんなことは、これまでもなかつたわけじゃない。実力主義の組織体質などと言つてみたところで、しよせんはワンマン経営企業。社長の「鶴の一声」で方針が変わり、社員たちの努力が一瞬にして水泡に帰すことなど珍しくはない。そんなことは、入社して十一年目になる清孝にはよくわかつていた。

しかし、今回のことは、そんな「あきらめの免疫」

ではおさまりのつかないやりきれなさを清孝の心に残した。どうしても許す気になれないのは、さっきの、部長の「手のひら返し」だ。

あのプロジェクトは、もともと部長の発案で始めたものだ。当初、清孝は反対したのだ。それを、「もう業界の慣例を云々する時代じゃないだろう」などと言い、強引に推し進めたのは部長自身ではないか。

それが今日、社長の一喝で、何の反論もなく計画を

取り下げた。しかもだ。その場で、なんと「部下の暴走」を詫び、同席していた清孝の方を向いてこうのたまったのだ。

「だから、いくらなんでも時期尚早だと言っただろう」  
課長代理である清孝に、その場で、部長の欺瞞を言い立てることなどできるはずもなく、けっきょく、無言で下を向き、唇を噛みしめるしかなかつた。

社長にああ言った手前、きつと部長は、次の査定で、

清孝にいいポイントはつけないだろう。サラリーは据え置きか、悪くすれば減給ということになる。まあ、当面、会社にリストラ計画がないだけましということだ。

しかし、これで、仕事へのモチベーションを維持しろと言う方が無理な話である。

清孝は、いったん、この二杯目でやめて帰ろうかと思っただが、カウンターに置いたグラスをバーテンに向

かつて押し出し「もう一杯」と言った。

：：もし独り身なら、あんな会社なんかすぐにでも辞めてやるのに。

帰ろうと思ったことで、一瞬、妻と息子の顔を思い出し、清孝はそう思った。

いや、結婚してからでも、四年前までなら……。

あの頃までなら、こんなことがあつて帰宅したとき、妻は、清孝の表情からすぐに「なにかあつたの？」と

察してくれた。

退職に同意したかどうかはともかく、少なくとも、清孝が会社での出来事を話せば、いっしょになって腹を立ててくれたはずだ。

でも、今は、それも期待できない。

妻の心は、もう清孝には向いていない。

息子を有名私立小学校に入学させること。それだけが、今の妻の関心事なのだ。

今から帰ると、まだ、息子に「お受験」のための勉強を強いている姿を見ることになる。こちらが帰ったかどうかにも気がつかないほど、声を荒らげているにちがいない。

そして息子が寝たあと、今度は、「パパが見てくれないから、私がやらなきやいけないのよ」という小言が延々とつづくのだ。

たとえば会社でこんなことがあった日でなくとも、そ

んな妻を抱く気にはならない。

清孝が、三杯目をほぼ飲み終わっても、まだこの力ウンターバーを立とうとしないのは、酒の力で会社での出来事を忘れたいというより、むしろ、家に帰りたくないからなのかもしれない。かもしれなかった。

今夜も、どうやら不作だな。

三軒目のバーのドアを開けながら、垣内保臣は思っ

ていた。

この夏以降、どうも胸の震えるような出会いというのがない。

こんなことを永年つづけて、自分の審美眼が上がったせいか、それとも、五十の坂を超えた年齢から精力が衰え、勘が鈍っているのか、そのどちらかだろう。

むろん、後者だとは思いたくない。

「いらっしやいませ」

バーテンの声にうなずきながら、さっとカウンターの客たちの横顔を一瞥する。

いちばん手前側には、二十代半ばのサラリーマンが三人。年齢はともかく、どうやらグループのようだから無理だろう。それに、三人が三人とも、いかにもデリカシーのなさそうな顔で馬鹿笑いしている。そのせいで洒落た店の雰囲気台無しだ。これは、自分の守備範囲外だ。

カウンターのの中ほどに、男が一人。年齢は三十代中盤か。ちよつととうが立ちすぎているし、仕事に疲れ、しかも警戒心が強そうな小役人タイプだ。好みではない。

いちばん奥の席にいるのは、男女のカップル。男の方は、それなりに細面の美男だが、もちろん、これは問題外である。女の方をうまく帰せるなら別だが、あの親密さかげんでは、それはない。この店を出れば、

二人でホテルへ直行というところだろう。

ここもだめか。

垣内はそう思いながら、とりあえず、手前のグルー  
プと一人で飲んでいる男の間のカウンタ―チェアに腰  
をのせた。

「ロツク」

これだけ飲んだら、さっさと退散しよう。

そう考え、バーテンがグラスの準備をするのをなん

となくながめていた。

手際よく酒が出され、受け取った垣内は、それを口に運びながら、一人で飲んでいる男の方に目をやった。

：：いや、待てよ。

そこで、そう思った。

先刻、三十代中盤と思ったのは、おそらく間違いではないだろう。ワイシャツの襟からのぞく首筋あたりを見れば、それがわかる。

しかし、カウンターのピンライトに照らされたその憂いを秘めた表情には、どこか惹かれるところがあった。

垣内は、もう一度、それとなく男を観察した。

確かに顔の肌は二十代前半とは違うが、それでも意外と張りがある。剃って半日以上はたっているはずなのに、髭もほとんど目立たない。体毛全体が薄いたちだろう。目鼻立ちもすっきりとして悪くはない。つく

りが小さいにもかかわらず、それなりにポリウムある唇も、うまく手を入れれば大きなポイントとなる。

体つきはどうか？

筋肉質ではなく、かといって、余分な贅肉もついていない。座っているので身長は今ひとつわからないが、これも合格点だろう。けっして小柄ではないが、世代のわりに長身の自分と比べ、頭半分は低いはずだ。それになにより、背広の下の肩が薄そうなのがいい。

これは、ひよつとすると、掘り出し物かもしれないぞ。

垣内は、一瞬にしてそう評価を変えていた。

さらに有望なのは、やはり、その表情だった。

この手の男は警戒心が強く、ふだん簡単に誘いに乗るようなタイプではない。しかし、今なら……。まさ  
に、「触れなば落ちん」と言ったところだ。

Just four hours . . . 四時間か？ いや、Four and

a half : : 余裕を持って、四時間半としておこう。

垣内は、今夜のターゲットをとりあえずこの男と定め、いつものように、心の中で予想所要時間のタイマ―をセットした。

「たしかに、人生には一人でいたい時ってありますよね」

突然の声に、清孝がそちらを見ると、ひとつ空けて

となりの席の男が顔を向けていた。やはり、こちらに話しかけたらしい。

「でも、そんな時に限って、ほんとは誰かと話したくてしかたなかったりする」

清孝がいぶかしげな顔を見ると、男は、すかさず「ご迷惑ですか？」ときいてきた。

「い、いえ」

とっさに笑い返しながらかう答えたあと、清孝は、

なぜ自分がそう言ったのかを、自分ながら不思議に思った。初めて入った酒場で見ず知らずの男に突然声をかけられたのだ。ふつうは、もう少し警戒するものだろう。

「初対面の方のプライベートに首をつっこんで、ご相談に乗ってあげられると思うほど、僕は不遜ではありませんが……」

笑顔で返してきた男の言葉に、清孝も、また笑って

いた。その笑顔が、今度はちよつと照れたものになった。初めて会った人間にも簡単に見抜かれてしまうほど、今の自分が落ち込んだ顔をしているらしいことが、恥ずかしかつたのだ。

「しかし、まあ、いつとき楽しい時間を共有すること、お互い、憂さを忘れるくらいはできるんじゃないかと、そう思ったものですから」

男はそう言って椅子をひとつ移動し、間をつめた。

その間、清孝はずっと男の顔を見ていた。

男の年齢は五十歳前後だろうか。しかし、身長は清孝より高そうだ。肩幅が広く、胸板も厚いが、けつして太ってはいない。日頃から、鍛えているのだろう。

もちろん、だからといって、マツチヨマンというタ  
イプでもない。それはたぶん、インテリジェンスを感じ  
じるからだ。鬢びんのあたりに白いものが混じるその顔は、  
ロマンスグレイと言うにはちよつと早いかもしれない

が、老成した教養のようなものが漂っている。

こんな中年男は、いそいで、じつはなかなかいない。できれば、十数年後には、自分もこんなふうになつていたいものだ。

清孝はそう感じ、そして、こちらに警戒心を抱かせないのは、おそらく、男の穏やかな眼差しと、落ち着いた口振りのせいなのだと思った。

と、男は、手に持ったグラスに目を戻し、唐突に言

った。

「ふふ、日本の男というのは、どこか貧しいな」

清孝もいったん視線をはずしかけたのだが、その言葉に、いきなり自分が非難されたのかとちよつとむつとして、ふたたび男の顔に目を向けた。

「いえね、こんなふうに男同士の初対面だと、思わず、『それで、お仕事は？』なんて聞きそうになってしまつて。そんな話でしか、会話のきっかけがつかめない

んですから、自分ながらいやになります」

それが男の自嘲だとわかり、その感慨にも納得が  
いって、清孝も、それにつけ加えた。

「アイデンティティが、そこにしかないから」

「ええ、そのとおりです。仕事を離れたら、何者でも  
なくなってしまう。かといって、ビジネスの中で、思  
う存分自己実現できてるわけでもないんですけどね」

男の言葉に、今度は清孝が、今日の会社での出来事

を思い出し、ちよつと自嘲気味に笑った。

「それなら、割り切つてプライベートを充実させればいいと言う人もいる。けれど、それほど器用でもなかつたりするんですよね。何かの趣味を持ったとしても、そんな時間にまで、つい仕事の人間関係を持ち込んだりして。楽しみだつたはずのゴルフが、いつのまにか接待の道具になつていたり」

その言葉にも思い当たるところがあり、清孝は、ま

たちよつと笑った。

と、男が独り言のようにつづけた。

「僕はこの頃、ときどぎ思うんですよね。不安がないという状態は、人間にとって、けっして幸福なことじゃないなって」

「不安？」

清孝が聞き返すと、男は、うなずいてつづけた。

「ええ。たとえば学生の頃、いや、子供の頃なんて、

じつは不安でいっぱいだったでしょう。自分が将来なにになるのか、自分の未来になにが待ち受けているのか、まるでわからなかった。それどころか、今自分が暮らしている世の中の仕組みすらよくわかっていなかった。だから、なにをするにも、どこか恐る恐るだった。大人になったらきつと、こんな不安からは逃れられるんだらうなと思っていた。そして、事実、いろいろな経験を積んで大人になるに従って、そんな不安はな

くなつていった」

「そうですか？　僕なんて、今でも、毎日不安でいっぱいですけどね」

清孝は、男の言葉に初めて反論した。

「だいいち、こんなに不況が長引いて、会社だっていつまでもつか、わかったもんじやないですから」

「ええ、それはそうですね。ただね。少なくとも、その不安の正体は見えているわけでしょう。不況の中で業

績が上がっていない。だから会社は経営難だ。それに  
よって、自分はリストラされるかもしれない。でも、  
半年くらいは失業保険でなんとか食っていけるだろう  
から、その間に次の職を探して……とか。そんな仕組  
みは見えているわけです。でも、子供の頃の不安って、  
そういうことすらわからない、得体の知れない不安で  
す。知識も経験も、なにもないですから」

「そうですかねえ。僕は、子供の頃、そんなに毎日不

安を感じてたつて気がしないんですけど」

「それは、あなたが忘れていているだけだと思いますよ。

たとえば、こんなことはなかったですか？ 突然、家

の人間が何かの用事で出払って、ひとりで留守番することになってしまった。そのうちに外が暗くなる。それでも母親も父親も戻ってこないなんて経験。そんな時、とてつもない不安が襲ってきた覚えはあるでしょ

う」

「ああ、それは、たしかに」

清孝は、自分の子供の頃というより、五歳になる息子のことを思い出しながら言った。

「あの頃の不安というのは、大人になってからの不安とはくらべものにならないものだった気がするんですよ。なにもわからない世界にたったひとり取り残された不安：：とか、自分が何者であるかさえわからなくなるような不安：：。そんな感じでしたでしょう」

「ええ、おっしゃることはわかります。でも、そんな得体の知れない不安がある方が、むしろ幸せだとおっしゃりたいわけですよね」

たしか男は、そんな言い方で、この話題を始めたはずだ。

「ええ、そう思うんですよ。けつきよく人間は、そんな不安から逃れたくて、あれこれ経験したり勉強したりして大人になっていくわけだけれど、その結果、子

供の頃に感じた世界に対する心がおののくような不安とか怖れ、言葉を変えて言えば、みずみずしい驚きとか感動というものを感じられなくなってしまうんじゃないかって」

清孝は、男の言葉をまるでハイティーンの若者が言うような感想だなと思った。いわば「青い」と言っただけなのか。

自分のまわりの中年男——たとえば、あの部長とか

——は、ぜったいにこんなセリフは口にしないだろう。  
「それも、おっしやりたいことはわかる気がします。  
でも、もし、大人になっても日常生活にそんな得体の  
知れない不安を抱え込んでいたら、それはもう、病氣  
でしょう」

「そうかも知れません。いろんな精神病というのは、  
たぶんそういうことなんでしようね。人間、不安を感  
じず安心していられる方がいいに決まっている。でも、

そういうのって、一見幸せなようだけれど、じつは、つまらない毎日がつづいているに過ぎないんじゃないかって気が、どうしてもしてしまってます」

「いったい、この男は、ふだん何をしている人間なんだろう？」

服装は高級そうだが、ノーネクタイで、いわゆる背広姿ではない。ウールのスラックスとスポーティなブレザージャケット、それにシルク素材らしいシャツ。

すべてグレー系で濃淡をつけている。

建築家とか、あるいは出版や広告関係の自由業で、しかも何人か人を使っているといったところだろうか。

清孝がそんなことを思っていると、男はいきなり話題を変えた。

「あなたは、テレビゲームとかはおやりになりますか？」

「えっ、……ええ。いちおうファミコン世代ですから」  
「そうですか。僕もいい歳して、けっこう好きだった  
りします。未だに、RPGとかで夜明かししてしまう  
こともあるくらいです。子供が、不安におののきな  
らも気が狂うこともなく、けっこうそれに耐えていら  
れるのは、たぶん、子供にとって、人生はまだゲーム  
みたいなものだからなんでしょうね」

「……ゲーム？」

「ええ。まだ、いつでもリセット可能というか」

「ああ、そういうことですか。先の見えてる大人と違って、やり直しがきく不安だからだと」

「ええ。そういう意味では、たしかに大人の不安の方が本当の不安なのかもしれない。もうやり直しがきかないことでの不安ですからね。でも、ある程度先が見えるからこそその不安でしかない。驚きや心のふるえない、つまらない不安です」

男の言いたいことはわかったが、清孝は、そんな男の「青さ」に反駁したくなって言った。

「だけど、ゲームというのも、じつは先の決まってるものでしょ。人生以上にそうなんじゃないですか。

ああして、こうして、こうなればクリアというシナリオはあるわけですし」

「ええ、そうなんですけどね。でも、それこそ、先が見えてる大人の見方でね。たとえシナリオがあつたと

しても、その中で遊んでいる当人にとっては、驚きと不安に満ちた未知の世界です。しかも、リセット可能  
なね」

男の言葉に、清孝は、さらにちよつとむきになった  
ような口調で答えていた。

「でも、さつき言ってたことを言葉を換えて言えば、  
その驚きも不安も、しよせん遊びでしかないから、耐  
えられるってことでしょ」

清孝の言葉に一拍おいたあと、男はまた、ちよつと自嘲気味に言った。

「……ふふ、そのとおりですね。ゲームもそうですし、子供にとっても、人生はまだ遊びと区別のつかないものだ。だから、いくら不安でも、平気でいられるのかもしれません。生活のかかっている現実の大人の世界では、それは望んじやいけないのかも……」

そして、手に持ったグラスを見つめながら、しばらく

く口をつぐんだ。

べつに清孝の言い分に論破されたとか、傷ついたとか、そんな深刻な様子ではないのだが、男が黙ってしまつたことで、清孝はその沈黙が耐えられないような、それこそ多少の「不安」のようなものを感じていた。せつかくの男の感慨を、自分がぶちこわしてしまつたような気がしたのだ。

それにじつは、先刻からの男の言い分に少なからず

惹かれるところもあつたので、これで話が終わってしまうのが、なんだか惜しいような気もした。

で、自分が話を継がなければいけないという気になつた。

「たしかに……」

清孝は、グラスに少しだけ残つた水つぽいウイスキーを口に含んだあと、言った。

「目の前の現実なんて、やりきれないことばかりです。」

どうしてやりきれないのか、その理由さえわかってい  
るのに、自分ではどうすることもできない。だから、  
なおさらやりきれない。時々、すべてを……」

「リセットしたくなる？」

男が、そう言いながら、また穏やかな笑顔を向けて  
きた。

それで清孝も、笑いながら答えた。

「……ええ。なんのしがらみもなかった子供時代に戻

りたいとかは、よく思いますよね」

「しがらみ、ねえ。たしかに。：：でも、いつときだ  
けなら、そんなしがらみを忘れることはできるんじゃない  
ですか？」

男の言葉に、清孝は、グラスを捧げながら答えた。

「酒の力、ってやつですか？」

「ふふ。もちろん、それもありますね。でも、いくら  
酔っても、そのしがらみとやらが追いかけてきて、酔

いきれなかつたり：：ね。あなただつて、さつきからずいぶん進んでいるようですし」

からになった、その三杯目のグラスの氷を鳴らしつつ、今度は清孝が自嘲する番だつた。

「ええ、もう無駄な酒は、やめた方がいいかもしれませんね。これ以上つづけても、二日酔いしか残らない」

と、男は、あらためて清孝の方に体全体で向き直るようにし、「なににも、うまくもない酒に頼らなくても」

と言葉を継いだ。

「いつときだけなら、自分をリセットする方法がないわけじゃない」

「……？」

「しよせん遊びかもしれないけれど、それこそ、ゲームのように、子供の頃のように、心がおののく……そう、先の見えない本物の不安を味わえる世界がね」

清孝を見ている男の目に、いたずらっぽいか、

なにかを試すともいうような、秘密めかした色が浮かんだ。

「……ど、どういう……ことでしよう？」

「お時間は、まだ、よろしいですか？」

突然男にそうきかれ、清孝は思わずうなずいていた。

「……え、ええ」

男がどこかに誘いたがっていることはわかり、家のことが多少気にはなつたが、遅くなつたとしても、「接

待」とかなんとか、妻への言い訳はできる。だいいち、妻は、かつてのようによく起きて待っていることもないのだ。

「もしよろしかったら、そんな世界をちよつとのぞいてみませんか？　私がご案内しますよ」

そう言いながら、男はすでにカウンターチェアを立っていた。

なんだか、唐突に強引になった感じの男の態度に多

少の迷いを感じつつも、その間のよさにのせられる形で、清孝もそれに従っていた。

それこそ、男の言う「先の見えない心おののく不安」に向かつて。

表通りに出て垣内がタクシーを停めている間、その男は、所在なげに立っていた。どこか落ち着きのない目の動きからは、のこのこついてきてしまったことへ

の多少の後悔も感じられる。

もつと、気を楽しにしてやった方がいいな。

前の車道に停車したタクシーに先に乗り込みながら、垣内はそう思った。

それで、地下鉄でもひと駅ほど先の、さほど遠くはない行き先を運転手に告げた後、すぐさま、シートに並んで座った男に声をかけた。

「三十代とお見受けしますが、若く見られることも多

いでしょう」

「……え？　ええ。取引先と渡り合う営業的な仕事を中心ですから、けっしていいことではないんでしょうけどね。けっこう、相手になめられる」

「ははは、そういうこともあるでしょうね。体型もスリムでらっしやるし、カジュアルな服装なら、学生と言ったって通るくらいです」

「それは言い過ぎかもしれませんが……。でも、結

婚した当初は、そういうこと、よくありましたね。家にいて、誰か来たので出てみると、化粧品のセールスのおばさんとかが『お母さんはいらっしやいます？』なんて」

さっきの言葉とは裏腹に、男は、自分が若く見えることをけっしていやがってはいない。少なくとも、厳めしさこそ男らしさだなどと思う種類の人間ではないようだ。

これは、意外に早く「その気」にさせることができ  
るかもしれないぞと、垣内は思った。

「とすると、奥様とも、いわゆる『友達のような夫婦』  
というやつですね。私の世代あたりから、そういうの  
はいますが、今どきの夫婦は、もつと、なんというか、  
古い結婚観に縛られずに楽しくやっているようですか  
ら」

「いええ、そうでもないですよ。そういうのも二人の

うちだけで、子供ができると、やっぱり男は働き蜂にならざるを得ない」

男は、そう反駁してきた。その言葉に、また、どこか吐き捨てるような声音が混じった。不幸とは言わな  
いまでも、家庭生活にも満たされていないことは確か  
だった。

これはますます有望だ。

垣内はそう思いながらも、郊外の賃貸マンションか

なにかで、この男の帰りを待っているだろう妻子のことを考え、多少後ろめたい思いに駆られた。ただし、その後ろめたさは、やがて「背徳の喜び」にも転化しうるものなのだ。

「それにしても、かわいいお子さんまでいらっして、私なんかから見れば、うらやましい限りですよ」

垣内が言うと、男は、無言のうちにも、もの問いたげな視線を向けてきた。

それで垣内は、自分の身元を一部だけ明かすことにした。

「いえね、バツイチの独り身なんですよ。十何年前に離婚しまして。子供もいなかったの、ある意味、後腐れはなにもないんですけどね。でも、時に、家族のぬくもりとかいうものがうらやましくなることも確かです」

「……そうなんですか。僕なんかから見れば、むしろ、

あなたの……」

男はそこで、ちよつと戸惑った表情をして、「あの、お名前はなんとおっしゃるんですか？」ときいてきた。それで、垣内は短く「垣内です」と答えた。

「垣内さん……ですか。いや、むしろ、垣内さんみたいな生活の方がよっぽどうらやましいですよ。お金も時間も自由に使えて」

「いや、そんなこともないですよ」

垣内はそんなふうにならんとおざなりな答えをしな  
がら、自分もこの男の名前をきいておこうかと考えた。  
しかし、すぐに思いとどまった。

自分にとって、この“男”の名前など、何の意味も  
持たないのだ。

もつとも、垣内の答えがおざなりになったのは、そ  
んなことを考えていたからばかりでもない。目的地に  
近づいているのだ。

垣内は、窓の外に目を走らせ、先刻通り過ぎた信号からの路地の数を数えていた。繁華街で歩道は明るいのだが、人が行き交う分、細い路地を見落とすことがよくある。小道に入ると一方通行が多いエリアだから、へたな道を選べば、迷路に迷い込んだようになってしまふのだ。

「運転手さん、次の道を左に折れて、四つ目のビルの前でとめてください」

目標の角を見つげ指示したあとも、車が曲がりきるまで、垣内は、その指示がまちがっていなかっただか確認するため、フロントウインドウ越しに外を見ていた。

そして、角から四軒目の雑居ビルの入口あたりに置かれたなじみの店の電飾看板を見つけてから、男に向かつて言った。

「どうやら今夜は、そんなにまわり道せずにとどり着

け  
ま  
し  
た  
」

Friday

8:00pm

メンバーズクラブ「ターニングポイント」

タクシーを先に降りた清孝は、垣内という男が代金を払っている間に、そのビルのエントランス——といつても、繁華街の裏道にありがちないわゆる「えんぴ

つビル」だから、非常階段脇の通路という感じなのだ  
が――に入り、壁につけられた案内パネルを眺めた。

　　どうやらこのビルは、事務所用にも飲食店用にも使  
えるようになっていいるらしい。六階建ての各階にひと  
つずつはめ込まれたプラスチックプレートには、ゴシ  
ック体の会社名が三つと、あと三階分に店舗らしい口  
ゴが記されていた。一階と二階、それに六階にあるピ  
ンクや紫のその店名は、どれもバーの類のようだ。お

そらく垣内は、このうちのどれかに行くつもりだろう。

ちよつと不思議に思ったのは、二階と六階が同じ「メ  
ンバーズクラブ ターニングポイント」となっている  
ことだった。ビル前の路上に置かれた電飾看板にも書  
かれていた店名だが、それにしても、連続したフロア  
ならともかく、二階と六階に離れているのはなぜだろ  
う？ どちらかの階は、店ではなく事務所ということ  
だろうか。

清孝がそんなことを考えていると、タクシーを降りてきた垣内が「お待ちをせしました」と声を掛け、奥のエレベーターへと向かった。

それで清孝も——多少の不安を感じながらも——、そのあとに従った。

エレベーターは一階に停まっていたらしく、垣内がボタンを押すとすぐにドアが開いた。二人でもいっばいという感じの狭い箱の中に乗り込むと、垣内が押し

たのは二階のボタンだった。

どうやら、行き先は、その「ターニングポイント」という店のようだ。

一階から二階まででは会話するいとまもなく、すぐにまたドアが開き、清孝は垣内につづいてエレベーターを降りた。

出たすぐ正面には踊り場という感じの狭いスペースがあり、横の壁に木製の――あるいは木製に擬した樹

脂製の——店のドアがあった。このビルの造りから考えて、本来は集合住宅ふうの鉄扉だったのだろうが、改装時につけ替えたのだらう。ドアの中央には、下で見たのと同じロゴのプレートがつけられていた。

垣内はなんの躊躇もなくドアの取っ手を引き開け中に入ったので、清孝もまた、それにつづいた。

「……あら、いらっしやい。ご無沙汰だったわね」

カウンターの中にいる二人の女のうち一人が垣内に

声をかけてきた。

「ああ。このところ、なかなか来るチャンスがなくてね」

垣内がそう答えると、女はいったん、なにか、いたずらを見とがめるとでもいった含みのある笑顔で垣内を見返し、そのあと、今度は清孝の方を向き、ちよつと小首を傾げるようにしながら、にっこりと笑った。

「いらっしやいませ」

けっして若くはないが、和服姿の、すつきりした顔立ちの美人だ。たぶん、この店のママなのだろう。

「……」

なにか言おうかとも思ったが、この店がどういう店なのかまだよく飲み込めないこともあって、清孝はただ会釈した。すると垣内は、「静佳ママ。この店に集まるみんなのあこがれの的ですよ」と紹介した。

「あらまあ、じゃあ、垣内さんもあたしにあこがれて

くださってるってこと？ はじめて知ったわ」

ママ——静佳が、またからかうように言うのと、垣内は「もちろん。ママは僕にとって、女神みたいなものだから」と言い、そのまま、カウンターの手前から三つ目の席にかけた。

「なんの女神だか」

静佳が軽くいなすように言うのを聞きながら、清孝も、カウンターチェアに並んだ。そして、あらためて、

それとなく店内に目を走らせた。

最前のバーでの垣内の秘密めかした様子から、さらに「メンバーズクラブ」などという店名から、なにかもつと暗い：：要するに、よからぬ場所を想像していたのだが、店の中は思いのほか明るかった。七・八席あるカウンターチェアの他に、カウンターと対面する壁側にベンチのように造りつけた椅子席があり、その前に四脚ほどの小さなテーブルがある。言ってみれば、

どこの町にもある、気軽なスナックという感じの造りなのだ。カウンターの中にカラオケ用らしいテレビがあるのも、スナックふうだ。「メンバーズクラブ」という言葉から、一方では気取った場所をも想像していた清孝は、そういう意味でも、なんだか拍子抜けする感じだった。

「なんにしまししょう？」

静佳が、おしぼりや口取りを並べながら、店の造り

に似つかわしい気さくな感じできいてきた。

「うん、とりあえず……ビール？」

きかれた垣内が、その言葉をパスするようにこちらを向いたので、清孝はうなずきながら、さらに店内を観察した。

清孝たち以外に、先客は三人。

ひとりは、一番奥のカウンター席で、カウンター内のもう一人の女——こちらはどうかやらチーママらしい

——と顔を寄せ合い、なにか話をしている。さつき、入ってきた時、垣内の顔を見て会釈したようだから、たぶんこの客も、垣内となじみなのだろう。

あと二人の客は、カウンターではなくテーブル席の方に座り、やはり何か話し込んでいた。

その客たちを見て、清孝は、ちよつとした違和感を覚えた。

違和感のわけは、まずなにより、三人の客がすべて

女だったことだ。もちろん、こんな感じの飲み屋に女性客がいても、今どきなんの不思議もないのだが、男性客が一人もいず、すべて女だけというのは、やはりちよつと妙だ。

さらに、その女性たちの容姿も、どこかしらふつうでない感じがした。

年齢はそれなりにいっているように見える——カウンターのはひとりは二十代後半だが、テーブル席の二人

は三十代：：もしかするとそれ以上かもしれない——  
のに、服装に、なんというか：：落ち着きがない気がする。  
する。三人が三人とも、大柄には似つかわしくないミニ  
ニスカートだし、ブラウスやワンピースの色づかいも  
派手目の色が多い。特にテーブルブル席のうちひとり、  
ブラウスにやたらフリルなどがついていて、その顔立  
ちとちぐはぐな感じだ。

しかし、じゃあ水商売ふうなのかといえ、そうい

うのともちよつとちがう気がした。

カウンターチェアの間隔が狭く、垣内と肘があたつていたこともあり、椅子の位置をずらすようにしながらさらに女たちを観察した清孝は、その違和感の最大の原因が、彼女たちの髪型なのかもしれないと気づいた。

カウンター席の若い方は首筋くらいまでのブラウンのショートヘアで、まあ不自然ではないのだが、テー

ブル席の二人は、二人とも黒のストレートロングだ。こんなヘアスタイルは、今どきの女性としては珍しいし、明るい色の服装にくらべ「重い」のだ。

清孝がそんなふうに残りのテーブル席をちらちらうかがっていると、さらにその違和感を決定的なものにすることが起こった。女たちが声を立てて笑ったのである。その声のトーンが妙だ。

えっ……ここって、ひよつとして……。

清孝がそう思った時、静佳が垣内に、またからかうような調子で話しかけた。

「垣内さんったら、こちらの方になにも説明せずにお連れしたのね」

清孝のようすに気づき言ったのだろうが、その顔を見ると、困ったような、それでいて含み笑いとでもいうような表情を浮かべていた。

「なんだか、すごくとまどってらっしやるわよ」

「ふふ、先入観を持たない方が、ママの美しさのインパクトも増すと思つてさ」

「またあ、よく言うわ」

垣内の軽口にそう返したあと、静佳は、清孝の方にビール瓶を差し出しながら言った。

「ほんとにひどい人でしょ。いきなりこんなところに引つ張りこまれりや、そりや、誰だつて驚くわよねえ」

カウンターのコップを取り、ビールを注いでもらい

ながら、清孝はちよつと目を泳がせた。

「つまり：：、ここは：：ゲイバー？」

「ふふ、そういうのとも、ちよつとちがうのよ」

清孝のコップにビールを満たすと、今度は垣内の方のを注ぎながら、静佳が答えた。

それで清孝は、きよとんとした表情のまま、垣内を見やった。しかし垣内は、すぐにはその疑念を解決してくれず、ビールの泡が盛り上がるコップを向けてき

た。

「じゃあ、まずは、乾杯といきましようか」

「……え、ええ」

「そうだな……、あなたの、新たな世界への冒険に：  
……ってことで」

垣内がコップを捧げるようにしたので、しかたなく  
清孝も——さらに不可解な表情を向けながら——それ  
に合わせた。

垣内は、それでもなかなか答えず、例の穏やかな笑顔のまま、ビールを口に運んだ。

「……あ、あの……」

がまんできずに清孝が言ったところで、垣内は中身が半分以下になったコップをカウンターに置き、ふたび清孝に顔を向けた。

「ふふ、つまりですね……」

そこでまた、一拍置く。

どこか気持ちに動揺があるぶん、清孝には、その笑顔が、こちらの反応を楽しんでいるとでもいう人の悪いものに見えてきた。

「今、この店の中には、戸籍上の……というか、肉体上の女性はひとりもないと、そういうことなんですよ」

「……えっ」

垣内の言葉に、清孝は、思わず静佳の方を見てしま

った。

カウンターのの中の静佳は、そんな清孝の視線に、ちよつと恥ずかしそうにうつむいたが、それでも、さらにのぞき込むように見ると、その表情は苦笑していた。

「この静佳ママにしても、今は店の客が増えたんで専業になつてますが、三年ちよつと前までは役所勤めの公務員でもあつた。もちろん、男性として……そうだよね？」

垣内は、清孝の視線に合わせるようにそう言って、言葉の最後を静佳に投げかけた。

「……ええ。趣味が高じて、ついに、共済年金を棒に振りました」

静佳は、まだ多少の照れを残しながらも、顔を上げ、清孝に向かって小首を傾げるようにした。その姿は、どう見ても男には見えない。

「……あの、ということは、やっぱり……」

明かされた真相に驚きはしたが、それならさっきの推測は正しかったのだと思い、清孝が言いかけると、垣内が、今度はそれを遮るように言葉を重ねた。

「いや、いわゆるゲイバーとかではなくて、ここは、趣味の人たちが集まる店なんですよ」

「趣味って、つまり……女装……とか？」

「ええ、そういうことです。お客はみんな、ここに女になりに来るわけです」

そういう趣味の男たちがいることは知っていたし、そんな店があることもきいたことはある。しかし、自分がそういう世界と関わるなどと思ったこともなかった。清孝は、つい落ちつきなく目を泳がせ、そして、その視線は自然に、店内にいる他の人物たちをなぞっていた。

先刻感じた違和感はそういうことだったのかと納得がいった。

しかし、そうわかった上で見ると、逆に、目の前にいる「彼女」たちの姿に、新たな驚きも感じた。テーブル席の二人については、多少不自然さが目立つものの、カウンターにいるひとりと、そして、カウンターの中の静佳やチーママらしき人物は、たとえ街ですれ違ったとしても、まず何の疑いもなく女だと思っただろう。

「ふふふ。……驚きましたか？」

垣内がそう言ったのをきっかけに、清孝はやつと視線を落ち着かせることができ、垣内を見た。

でも、どうして、僕をこんなところに……？

その視線がそう語っていたのだろう。今度は言葉にする前に、垣内が答えた。

「ですから、さつきも言ったでしょ。いつときだけなら、自分をリセットして、現実のしがらみから解き放たれる方法があるって」

「……し、しかし……」

こんなのは、いくらなんでも突飛すぎるだろう。

清孝は、そう思っていた。

清孝とて、もう三十代半ばの男。性的嗜好というものが人それぞれなのはよくわかっている。そういう趣味があること自体を認めないほど、自分は狭量ではないつもりだ。だが、これは、あまりにも世間一般とはかけ離れた……そう、「マニアの世界」だろう。

少なくとも、自分とは関わりない場所だ。

清孝はそう思い、こんな店からは、早く退散したいと感じた。

こんなところに長くいると、自分までおかしくなりそうだ。だいいち、この垣内という男は、こんなところに僕を連れてきて、いったいどうしたいというのだ？

清孝が、動揺から立ち直るため、考えを客観的に整

理し、ふたたびその疑問に立ち至った時、垣内が言った。

「どうですか？　あなたも、してみませんか？」

「……えっ!？」

さほど酔っているふうでもないのにぽっと赤くなつた男の顔色の変化を見逃さず、垣内はほくそ笑んだ。

ちよつと唐突すぎるかとも思ったが、さっきの男の

動揺を見て、垣内はいきなり核心に触れることを言うてみたのだ。

こんな店に連れ込まれ、それでも平然としているよ  
うな男では、逆に望みは薄い。こんなふうにおたおた  
する方が、むしろ、目はあるというものだ。

それに……。

最初に見た時こそ、面白味のない小役人タイプだと  
思ったが、どうやらこの男、イメージネーションは豊か

なようだ。今のひとことで、すでに、あれこれ想像を巡らせたらしい。

たぶん、この男は今、自分の頭の中に浮かんだそんなイメージを必死で否定しようとしているはずだ。そして次には、こう言うにちがいない。「冗談は……」。

「……じよ、冗談はやめてくださいよ」

まるで垣内の思考とシンクロするように、男が言った。

「ふふ……失礼しました」

このまま押そうかとも思ったが、垣内はいったん退却した。

最初の一撃で、大きなインパクトを与えることはできたが、男は、これまでそんなことは考えたこともないタイプだ。矢継ぎ早の攻撃で逃げられてしまっただけは、元も子もなくなる。

「こんな世界もあることを知っていたただきたくて、そ

れで、お連れしたようなわけです。なかなか面白いで  
しよ」

「……え、ええ、まあ……でも……」

先刻のショットバーでの会話のつづきのような垣内  
の口調に、男はひとまず落ち着きを取り戻したようだ。  
でも、なんとなくこの場にいずらそうな様子は変わら  
ない。

「……でも、あなたには理解できない……と？」

「ええ」

「ふふ、まあ、突然でしたからね。でも、この静佳ママは除いて、今ここにいる子たちはみんな、昼間は、ちやんとしたふつうの仕事をやってる人たちです。あなたと同じようにね。たとえば……」

その気にさせるためには、まず越えるべきハードルを低くすることが必要だろう。

そう考えた垣内は、そんな言葉につづけ、毎晩ここ

に来てチーママの役割を買って出ているまどかに声を掛けた。

「まどかちゃん」

「……えっ、なんですか？」

先客だった由香と話し込んでいたまどかは、垣内に呼ばれて振り向いた。垣内が来たことは、入ってきた時点から気づいていたはずだが、こちらが男連れだったことからその意図を見て取り、話に割り込んでこな

かったのだ。それだけでなく、由香が茶々を入れないようにと、会話をつないでいてくれたにちがいない。こんなところは、静佳の教育が行き届いている証拠だった。

「まどかちゃんは、昼間は、プログラマーかなにかをやってるんじゃないか」

「えっ？　もう、垣内さんたら、なーに、突然」

まどかは、肩口あたりまでの髪をかき上げながらそ

う言った。静佳のお気に入りだけあって、単に女に見えるというだけでなく、その仕草は、はっとするほどキュートだ。

「いや、ここにいる子たちが、ふだん、いかに普通の人間かって話さ」

隣の男に目配せするようにして垣内が言うと、まどかは、やはりその意図をすぐ理解したようだ。こくんとひとつうなずき、「うーん、似たようなもんだけど

：：：」と言葉を継いだ。

「システムそのもののプログラムつくってるわけじゃなくて、：：：マッピングっていう：：：簡単に言うと、地図の画像データベースつくってるの。道路の下にある地中線：：：電気とか電話とか、あるでしょ。それを地図上にプロットして、たとえば工事とかある時、いつでも検索できるようにしておくて：：：そういうよ  
うな、色気もなんもない仕事」

「ふーん。じゃ、まどかちゃんの場合は、電力会社とか電話局とかから、それを請け負ってるわけだ」

「ううん、クライアントは、市町村とかよ」

たしかに色気もない話だが、こういう、まるで日常会話のようなディテールひとつひとつが、隣の男の警戒心をなくさせてくれるはずだ。

垣内はそう思い、今度は、カウンター席の由香に目を向けた。

「……えっ、あたし？」

由香は驚いたような顔になり、そのくせ、垣内に話題を向けられたことがどこかうれしかったらしく、弾んだ声で言った。静佳やまどかが巧みに女声をつくっているのにくらべると、無理してトーンだけを上げている感じなのは否めないが。

「言ってなかったっけ？」

「ああ、リアルの仕事のことは聞いた覚えがないなあ」

「そうだっけ。あたしは、事務機器の営業。コピー機とか……。丸の内あたりの会社にそんなのを売り歩いてるの」

「なるほど」

それだけ聞くと、垣内が会話を打ち切ろうとしたので、由香はちよつと不服そうな顔をした。と、それを察したまどかが、すかさず、また自分たちの会話に由香を引き戻してくれた。

それで、垣内は、男の方に向き直った。

「つまり、彼女は、あなたの仕事に近いわけですね」  
その言葉に、男はちよつと意外そうな顔をした。

「……えっ？ どうして……？」

なぜ知っているのかと思ったのだ。

「だって、あなたがさつき、営業的な仕事だって」

「……あ、ああ」

由香が自分と話したがっているのはわかっていた

が、あまり他の連中との会話に深入りしすぎると、逆に、男の疎外感を募らせることにもなる。特に由香は、場がよく見え、なんでもべらべらしやべるところがあるから、気をつけた方がよい。それで、一度、話題を男の方に戻したのだった。

そのあと垣内は、後ろのテーブル席にちらりと目をやり、つづけて、その視線を静佳に移した。

と、静佳もまどか同様、すぐにその意図を汲んでく

れたようで、会話を引きとった。

「あちらのルリちゃんと圭子さんは、たしか、病院の薬剤師さんと証券会社の営業かなにかのはずよ」

「ほらね、みんな、ある意味、ふつうの人たちなんです。おそらく昼間は、男としての生活を支障なく送っている。まどかちゃんはまだ独身だと思っただけ、あとはたぶん、一家の主として、ちゃんと家族を養ったりもするんです。ね、ママ」

「ほら来た。言わせられるんじゃないかと思ったわ」  
静佳はそう言つて肩をすくめて見せたあと、男に向  
い「これでも、中学生の息子と小学生の娘がいるオヤ  
ジだったりもするのね」と言つた。

静佳の言葉に、男は、ちよつと興味をそそられたよ  
うな顔をした。女装し、公務員を辞めてまでしてこん  
な店をやっている父親と、その子供たちの関係がいつ  
たいどうなっているのか、不思議に思つたにちがいな

い。その点に関しては、垣内も知りたいところだったが、そこまでは踏み込まないのが、静佳との間にできた長年のルールだった。

で、垣内は、男との会話をつづけた。

「要するに、ここにいるのは、あなたとなにも変わらなない人たちなわけです。そして、おそらくは、あなたと同じように、仕事にも家庭生活にもどこか満たされないものを感じている。それで、ここへやってきて、

そんな自分の現実をいったんリセットするということ  
です」

垣内が、今のこの店の全状況をひとことでまとめる  
という感じで話すと、男は「……でも、それが……」  
と口にした。

「どうして、女装ということになるのか、と？」

「……え、ええ、なににも、そこまでしなくてもという  
気が……」

男の言葉の語尾があいまいなものになるのは、それこそ、この状況に気圧されているからだろう。

垣内は、そう感じながらつづけた。

「それはつまり、自分をリセットするには、性を変えてしまふのがいちばん根本的で、かつ手っ取り早いからでしょう。女になるなら、子供の頃からの男としての経験が、いわばすべて無になるわけですからね」

「でも、そんなことのためだけに、なにも……」

「ええ、もちろん。そんな理屈以前に、ここに来てい  
る人たちは、女になるのが好きなんだと思います。ど  
こかで、自分の中にあるそんな欲求に目覚めてしまっ  
たということでしょう。きっかけはいろいろでしょう  
が」

垣内は、そこでいったん言葉を切り、静佳が新たに  
注いでくれたビールを一口飲んだ。そして、こう言っ  
た。

「もしかすると、あなたの中にも、そんな欲求が眠っているかもしれませんよ」

「い、いや、まさか僕は……」

垣内の言い分に、男はあわてて否定の言葉を発した。

だが、やはり、語尾までは言い切らなかつた。

「ふふ。世の中には、やってみなければわからないということも多いですからね」

垣内は、多少冗談めかした語調も交えながら、また、

そんなふうと言った。

と、男は、ちよつと不機嫌そうなまなざしを向けてきた。

「……もう、いいかげんにしてくれませんか。さつきから、いろいろと……。垣内さん、あなたいったい、僕になにをさせたいんです？」

男の口調に神経質にとがったものが混じった。それで、垣内はまた、手綱を少し緩めることにした。

「いや、申し訳ない。あなたがそうムキになるから、よけいにからかつてみたくなるんですよ。許してください」

「もう、悪い冗談ですよ。：：いえ、もちろん、ここにいらっしやる方たちの個人的な趣味を云々するつもりはないですけど」

自分がちよつと声を荒げたせいで店内の人たちの視線が集まったのを気にしたのだらう。男は言い訳をは

さんだ。

「……けど、少なくとも僕は、そんなケのまるでない人間なんですから」

「そうですか、それは……、ちよつと残念だったり……」

「だから……」

「まあまあ、これも、僕の酔狂だと思つて……」

垣内は、ふたたび、男を鎮めるようにそう言ったあ

と、コップに残ったビールを一息にあおり、つづけた。

「僕はね、じつは、こういう世界がけっこう好きだったりするんです。あなたと最初に話したことに戻して言えば、ここに来る人たちは、ある意味で安定した過不足ない日常に飽きたらず、わざわざ不安な世界に身を投じてるんです。だって、そうでしょう。男にとつて、女としての体験というのは、まったく未知の世界ですからね。それこそ、子供時代に感じた、自分が何

者であるのかさえわからなくなるような、そんな不安な世界のはずです。そんな不安な世界に、わざわざ入り込もうとする人間の精神のありようが、僕には面白くてしかたがないんです」

そこでいったん言葉を切ったあと、垣内は、男の顔をうかがった。

こちらを向いてはいなかったが、聞いてはいるようだ。

「しかし、どうです。ここに来て、みんなの顔を見てください。そりゃあ、多少の照れはあるにしても、みんな、どこか解放された顔をしてるでしょう。少なくとも、ふだんの男としての生活の中では、こんな顔はしていないはずですよ。あのバーであなたが言った言葉借りれば、仕事にしか……というか仕事上の地位とか役割にしかアイデンティティを持ってなくなっている男たちが、ここへ来て再生するわけです。いわば、

面白くもない、そんな自分のアイデンティティを裏切  
つて、べつの存在になる。僕がさつき、人間は、ある  
程度不安な方が幸せなんではないかと言ったのは、こ  
の人たちを見ているからです」

「……いや、おっしやることはわからなくはないです。  
でも、やっぱり、女装なんて、僕には異常な気がしま  
すよ」

垣内の「演説」に対し、男はそう答えた。垣内の戦

法が「論理」になつたぶん、落ち着いたのだらう。少なくとも、話を頭から拒否しようとする態度ではなくなっている。

「ええ、常識的にはたしかに異常と見なされる行為でしょうね。でも、そもそも、その常識とやらを、一度リセットしてみようというわけですから」

「うーん。その理屈も、まあ、理解はできます。人間、時には、常識をくつがえす思考や行動が必要だという

こともね。でも、僕が思うのは、それがなにも、女装ということにならなくてもいいということです。そんなことは、誰もが望んでいることではないんですから」

どうやら男は、今度は自分の方から予防線を張ってきたようだ。垣内の論理展開が、また自分におよぶ前に、守りを固めておこうというわけだ。ただ、垣内の攻撃に先回りしてそんな戦略を立てること自体が、戦況としては、垣内の方が押し気味だということに他な

らない。

「そうですね。でも、さつきも言ったように、人間と  
いうのは、それが形として示されるまで、自分の持つ  
ている欲求にはなかなか気づかないものです」

「また、そういうことを。こっちもさつきから言っ  
るように、『女装したい』なんて欲求はないですよ」

男はすでに、垣内が女装を勧めているということ  
前提に反論してきている。先刻のように、そのこと自

体に腹を立てているわけではない。やはり、こちらの土俵に登ったことはまちがいない。

しかし、このままでは話が堂々巡りしているだけで、水掛け論にしかならないだろう。ここはまた、目先を変えてみる必要がある。

そう考えた垣内は、「ママはどうなの？」と、会話を静佳に振った。

「……えっ、なにがですか？」

垣内のきき方があまりに唐突だったせいで、静佳は、なにをどう答えたらよいかわからなかったようだ。

「だから、自分の中に女装したいという欲求があるのに気づいたのは、どんなきっかけだった？」

垣内のききたいことは納得したようだが、だからなおさらだろう。静佳は——男には気がつかれない程度に——あきれた顔を返してきた。「なにを今さらきくのよ」と言いたいのだ。しかし、さらに垣内が救いを

求めるように目配せを送ると、小さく首を振ってから  
「そうねえ……」と話しはじめた。

「この世界に入ってくる人には、子供の頃から『女の子になりたい』って自覚を持っている場合が多いけど、あたしはそうでもなかったわね。大人になってから、ある人に誘われて女装して、はじめてそれに気がついたっていう感じ。で、今にして思うと、あたしって、子供の頃から、まわりの男の子たちの世界に、どこか

なじめないところがあつたなつて気もするのね。小学校の頃から、なにかにつけ、やることが粗野で乱暴なのが『いやだな』つて感じあつたし。それに、高校くらいからは、目をぎらつかせてエツちな話したりするのにも、どこかで嫌悪感を感じてたわ。ま、仲間はずれにはなりたくないから、実際の行動としては、あたし自身もおんなじようにしてたんですけどね」

垣内は、その言葉に「さすがは静佳だな」と、少な

からず感心した。垣内が論理で押しかねていたところを、うまく感覚的な言葉で補足してくれたという感じだった。

そう思いながら男を見やると、男も、口をとがらすような顔をしながらも、静佳の話に小さくうなずいていた。多少なりとも思い当たるところがあつたにちがいない。

そういえば、これまで誘つてきた男で、この手の話

を全面的に否定できた人間はいなかったなと、垣内は思った。

そもそも垣内にそういう人間を見分ける嗅覚が備わっていて、最初の時点でフィルターにかけているからなのか、あるいは、世の中の男の子の大部分が、じつはどこかで、自分の属する「男の子の世界」に違和感を感じているからなのか、そのどちらかだろう。

「女装してみてはじめて、あたしは、自分の中のそん

な部分を無理にねじ曲げて、男になろうとしてきたんだなってことに気づいたのね。その時の感じって、なんだか、忘れてきたものを取り返したって、そんな感じ：：だったかな？」

「つまり、幸せを感じた：：？」

垣内の言葉に、静佳はこちらに向き直り、また、あきれたような顔をした。

それで垣内は、さらに調子にのって言った。

「じゃ、きつと、その誘ってくれた人とやらに、感謝してるわけだ」

と、静佳は、声には出さず、口の形だけで次のようなことを言った。

「(∴∴∴へえ、そこまでしゃべっていいの?)」

別のターゲットを狙いながら、なおかつ、そんなふういきわどい冗談を言ってくる垣内に、少なからず腹が立ったということだが、それでも、そのターゲット

である男には気づかれないうちに気を使ってくれている。こんなところが、垣内が未だに、静佳といい関係でいられる理由だった。

まったく、「いい女」だ。

垣内はそう思い、ちよつと首をすくめるようにして静佳に感謝と詫びの気持ちを伝えると、そのあと、男の方を向いた。

男はビールのグラスを弄びながらなにかを考えてい

るらしく、今の垣内と静佳の無言のやりとりには、気づいていないようだった。

「まあ、実際にママほどの美人になれるなら、そういう話も、納得がいくつてもんです」

垣内がそう声をかけると、男がうなずいた。

「そうですね。ママほど自然ならね。……僕には、まあ無理だな」

——リーチ！

垣内は、心の中で、そう叫んでいた。

いつの間にやら、男の防衛線は、「僕にはそのケがない」から「僕には無理」というところまで後退している。

ここまで来れば、あともう一押しだ。

清孝は、コップの底からかすかに上がってくるビールの泡を見ながら、さっきの静佳ママの言葉を反芻し

ていた。

言われてみれば、自分も、子供の頃、静佳が言ったような感覚を持ったことがある。

けっしてガキ大将ではなかったものの、けっこうやんちやもする子供だったし、高校時代には、友人とエロ雑誌をまわし読みして喜んでいたりもした。そういう意味では、少年らしい少年だったと思う。でも、それは、本当に自発的にしていたことなのだろうか？

まわりの友達や、あるいは上級生たちに馬鹿にされないために、必死に彼らのまねをしていたような気もする。そんなことを先頭を切ってやる友達に、いつも、ある種の恐れを持ち、それに合わせていたような気がするのだ。

垣内の持論を引き合いに出して言うなら、自分が何者でもないという不安から逃れるために、一生懸命「男の子」になろうとしていたということだ。

そこにはいつも、違和感のようなものがあつた気がする。いや、違和感とまでは言えないかもしれないが、無理をして、がんばっていたことはたしかだ。

そして、そんなふうに「男の子」になろうとしていた自分は、やがて、一人前の「男」になろうとし、仕事のできる「ビジネスマン」になろうとし、頼りがいある「夫」や「父」になろうとしてきたわけだ。

けつきよく、やっていることは、ずっといっしょだ

な。

清孝は、そんなふうにした。

少年の頃、いかにも男の子っぽい友人や上級生に対し、どこかで強迫観念のようなものを持っていたのと同様に、今、いかにもやり手の管理職然とした、たとえばあの部長とかの前では、どんなにひどいことをされても頭が上がらないのだ。その正体が、いかに俗物かをよく知っているにもかかわらずだ。

これは、いったいなんなんだろう？

たしかに自分は、多少の違和感を持ちながらも、いつも「男」という強迫観念にとらわれてきたようだ。

垣内が言うように、いつときでもそんな自分をリセットできるなら、したいものだ。

ただし、もちろん、女装などという馬鹿げた話ではなく……。

清孝がそんなふうにいる時、隣からまた、垣

内が声をかけた。

「無理ですかね？」

「……えっ？」

自分の想念にとらわれていた清孝は、とっさになにを言われたのかがわからず、きき返していた。

「いや、今、『僕には無理だ』とおっしゃったから」

「……あ、ああ」

「そりゃあ、ママは、趣味に殉じて仕事まで捨ててし

まったというところでもない人ですから、ママのようになるのは無理かもしれないけれど……」

垣内が静佳の方を見やりながらそうつぶけたので、清孝は、それではなんだか、自分が静佳に対して失礼なことを言ったことになる気がして、あわてて「いや、そういう意味では……」と弁解しようとした。

と、垣内はそれに重ねるように「あつ、もしかして……」と言った。

「あなたは、ママのようになることを恐れてらっしゃるってことですか？ 一度でも女装なんかしてしまつたら、自分が変わってしまうんじゃないか：：深みにはまって、人生を踏み外してしまふんじゃないかという気がして、それがこわい？」

垣内は、語尾の疑問形とともに、試すようなまなざしを向けてきた。

じつは自分の中に、垣内が言うような「恐れ」の心

情がまったくないわけではないだけに、清孝は、それを認めるのはしやくな気がした。それに、そんなことを認めてしまったら、さらに静佳を馬鹿にしたことになるではないか。

そう思い、「いや、そういうことでも……」と否定しようとしたのだが、また垣内は、それを無視するよるに話を進めた。

「まあ、ママは特殊な例ですから別として、女装のい

いところは、今の自分をリセットして全くの別人になれるのに、ふたたび着替えて、顔の化粧さえ落とせば、すぐまた、もとの自分に戻れるってことです。ふつうは、一生を台無しにするようなことにはならないわけです。ドラッグのように犯罪というわけではないし、精神に異常を来す危険もない。それに、仮想の世界と割り切ってやるわけですから、新興宗教に入信するよ  
うな危うささえない」

垣内の言葉に、清孝は、「そうか、他に『自分をリセットする』というような手段があるとすれば、そういうものになるのか」と、おかしな感心をした。

「要するに、ほんの数時間のゲームのようなものです。どうです、思い切って、やってみませんか？」

ついには、単刀直入にそう言ってきた垣内に対して、清孝はやっと我に返り、あわてて否定した。

「いや、だからですね、僕が言いたかったのは、僕な

んかが女装しても、ただ気持ち悪いだけだということ  
です。そんなの無理に決まってるじゃないですか」

「そうでしょうか？」

清孝の言葉に、垣内はそう言ったあと、いつの間に  
かこちらの会話を聞いていた、カウンターの中のまど  
かを見やった。

「まどかちゃん、どう思う？」

きかれたまどかは、清孝のことを、あらためて眺め

るようにしたあと、こう言った。

「うーん。彼女なら、塗れば、まちがいなくきれいになると思うな」

えっ？ ……！

まどかの言った、その「彼女」という言葉に、清孝は不意打ちを食らったような気がした。

今の…「彼女」というのは……僕のことなんだ：

…！

こういう店では、客に対してそんな言い方をするのがふつうなのだろうし、もしかすると「きれいになる」という言葉も含めて、それが、サービスだったり社交辞令だったりするのかもしれない。

そうは思ったが、自分が「彼女」という定義で見られているということそのものに、わけのわからない動揺があった。

「で、でも……」

そんな自分の動揺を他の人に気取られまいとでもいうように、清孝は、また、あわてて反論の言葉を探した。

「僕は：：化粧なんて、したことはないし」

「それはだいじよぶです。ママがちゃんと面倒見てくれますから」

垣内がそう言って、今度は静佳の方に目をやった。

先刻から、苦笑のような笑顔を浮かべてやりとりを

見やっていた静佳は、そんな垣内にうなずいて見せた。

「そ、そんな……、だから……」

清孝が必死になって、次の反論の材料を探していたその時、店の入口が開き、新たな客が入ってきた。

「……あ、いらつしやい」

静佳は、その客の方に目を向けそう言ったあと、きいた。

「弥生ちゃん、今、上、空いてる？」

上：：：？

静佳の言ったことの意味が、清孝には何のことだかわからなかったが、弥生と呼ばれた——やはり女装した男らしい——客は、すぐにこう答えた。

「うん。あたしのあとに真由ちゃんが来たけど、彼女も、あとちよつとで終わりそうだったから」

：：：そうか、例の六階か？　そこが、この店の客たちの着替えや化粧用の部屋になっているんだ。

ここに来た時から清孝が抱いていた疑問に答えが出た時、静佳が、カウンターを出てきた。

「じゃ、ちようどいいわね。行きましたようか。……女の子になり」

その、あまりにも当然という感じの言い方とタイミングのよさに、清孝は、思わず、カウンターチェアを降りていた。

そして、その自分自身の行為に驚いて、焦って店内

を見まわしたところで、静佳がまた言った。

「だいじょうぶ、こわいもんじやないんだから」

気がつくのと、いつの間にか、店にいる全員の目が自分  
分に集中していた。

「……あ、あの……じゃあ、まあ、ものは試しに……  
一度だけ……」

そう言わざるを得ないような雰囲気になっていたの  
だ。

Friday

8:30pm

メンバーズクラブ「ターニングポイント」

「いってらっしゃい。かわいくなつて戻ってきてね」  
カウンターの中からまどかがからかった。

静佳につづいてドアから出て行くところだった男

は、その言葉に、どこかおびえたような表情で振り向いた。

垣内は、その横顔を記憶にとどめるとでもいうように注視した。

今度、あのドアを入ってくる時、あの顔がどう変わっているか？

そのギャップを楽しみたいと思ったからだ。

入口のドアが閉まり、男の姿が消えると、店内全体

にふっとため息をつくような空気が流れた。テーブル席の二人を含め、じつは全員が、先刻から男の動向に注目していたにちがいない。つまり、垣内が男をどう「落とす」のかに。

さつき、静佳が「ルリちゃん」と呼んだテーブル席のひとりは一・二度しか会ったことがないが、他の連中は——今入って来た弥生を含め——、垣内とは顔なじみだ。だから、垣内がどんな男なのか、そして、こ

の店と静佳ママをどう「使つて」いるのかをよく知つている。みんな、じつは内心、興味津々で垣内と男とのやりとりを気にしていたにちがいない。

「……さすが、垣内さんね。あの子、ちよつと年はいつてるけど、あの顔立ちと体つきなら、ぜつたいかわいくなるわ」

まだ立ったまままだたつた弥生が、先刻まで男が座つていたカウンターチェアに腰掛けながら言った。

と、奥にいた由香が立って、垣内の隣まで席をずれた。それで垣内は、弥生と由香に左右を囲まれる形になった。

「あの子、やっぱりノンケ？」

由香がきいたので、垣内は、ただ「ふふ」と笑った。

「決まってるじゃない。垣内さんはノンケの男しか相手にしないの、知ってるでしょ。……あつ、ママはべつにして……ってことかな？」

「いや、ママとも、今はそんな関係じゃないよ」

垣内がそう答えると、弥生は意外そうな顔をして「ほんとにいい？」と言い、さらに、自分の前におしぼりを置いたまどかに向かつてきいた。

「まどかちゃん、ほんと？」

「ふふ、あたしもよくは知らないんだけど……。でも、ママの言うこと聞いてても、どうも、嘘じゃないみたいよ」

「ふうん、あたしはてつきり……」

「ママは、垣内さんの情婦かと思った？」

弥生の言葉を引き取って、由香が言った。興味津々というふうには、垣内の顔をのぞき込みながら。

「情婦ってねえ……」

垣内は、また苦笑するしかなかった。

「だって、このお店も、じつは垣内さんが陰のオーナーなんじゃないかって、噂もあるのよ」

「それは、光栄だね」

しかたなく垣内がそう答えると、由香は、さらに話をエスカレートさせた。

「そもそもこのお店は、垣内さんが、かわいい男の子見つけてきて自分好みの女の子に変身させるためにママにやらせてるんだって、言ってる人もいるくらいだし」

人が言っているというより、由香自身があらぬ噂を

広めているにちがいないと思つたが、いずれにしても、そんな噂が立つのは、この店のためにも、それに静佳の名誉のためにもいいことではないだろう。そう考えた垣内は、「僕をそれほどの男だとかいかぶつてくれるのはありがたいけれど」とつづけた。

「僕とママとの関係は、金を出したり、言うことをきかせたり、そんなものじゃないよ。ママは経営者で、僕は単なる客。いや、僕は、この店にこれだけ貢献し

てるんだ。逆にママからバイト料をもらったっていいくらいさ」

「そうよね、ここのおなじみさんの四分の一くらいは、最初は垣内さんが連れてきてるんだもんね」

「そう、うちの店の腕利き新規開拓営業マン」  
「おいおい」

茶化す弥生とまどかに笑って答えたあと、垣内は、あらためて由香の疑念を否定した。

「僕とママは、まあ、気心の知れた古くからの親友と  
いうのがいちばん近いだろうね。その言い方がきれい  
すぎると言うのなら、共犯者と言ってもいいけれど」

「共犯者？　ふーん。ママにとってはお店のお客が増  
えるわけだし、垣内さんの方は、うまくいけば、自分  
が女の子にした子をいただけるって？」

ちよつと酔っているらしい由香は、今度はあからさ  
まにからんできているようだ。

垣内が、これは困ったなと思つてゐると、また、弥生が助け船を出してくれた。

「あのさあ、由香ちゃん。あたしもじつはそうだったりするわけだけど、垣内さんにここに連れて来られた子で、垣内さんのこと恨んでる子って、たぶん、ひとりもないよ。そりゃ、垣内さんが新しい子連れてくるたびにやきもちやく子はいるし、垣内さんと関係なくここに出入りするようになった子の中には、悪く言

う人もいるけどさ。あたしなんて、むしろ、感謝して  
るくらいだもん。垣内さんのおかげで、こんな面白い  
世界が開けたことに」

そんな由香の言葉に、まどかもうなずいてくれた。  
どうやら形勢が不利だと見て取ったのか、由香は、  
「そりゃ、あたしだって、垣内さんのこと大好きよ」  
と言って、垣内の肩にしなだれかかってきた。

垣内は、そんな由香の行為を笑顔のまま受けとめ

ながら、こういう後腐れのありそうな粘着気質の子は、自分は、そもそも最初から誘ったりしないだろうなと思った。

と、その時、また入口のドアが開き、新たな客が入ってきた。

「あつ、真由ちゃんだあ。いらつしやうい」  
まどかがそう応じた。

やはり一年ほど前に垣内がここへ連れてきた、女装

名「真由美」という子だった。

「おひさく」

真由美はそう言いながらカウンターに近づくと、垣内の方を見て、「ああ、あの子やつぱり、垣内さんが拾ってきた子かあ。そうじゃないかと思ったんだ」と言った。

六階の「ドレッシングルーム」で、静佳に連れられた男と出会ったのだらう。

「おいおい、拾ってきたなんて、まるで犬の子みたい  
に言うなよ」

垣内がそう言うと、腕にまとわりついた由香が「あ  
たしも、垣内さんに拾われたかったなあ、犬の子みた  
いに」と甘えた。

そんな由香をあきれたように見ながら、真由美は由  
香の向こう側の席にかけると、今度は垣内の方に目を  
やり、「ふふ、『僕はけっして無理強いはしてないで

すよ』とか言いたそう」と、口まねをしてからかっ  
きた。

それに、弥生が同調した。

「たしかにね。無理にさせられてる感じじゃなくて、  
いつの間にかその気になっちゃうのよね。垣内さん  
にかかったら、たいていの子は、蛇ににらまれた蛙」

「そっか。犬の子じゃなくて、蛙の子なわけね」

「じゃ、おたまじゃくし？」

「そつ。垣内さんのおかげで、おたまじやくしは蛙に変身するの」

「さなぎが蝶になるっていうんじやないのが、女装者らしくていいわあ」

「ふふ。でも、さっきの子なら、けっこうきれいな蝶々になるかもよ」

真由美に弥生、それにカウンターの中のまどかも加わったそんなおしゃべりを、垣内は、ただ苦笑して聞

いていた。

と、まどかが、「ねえねえ、ママ、どんな服選んであげてた？」と真由美にきいた。

「えっ？ ああ。なんか、あの子があんまりびくついでる感じだったんで、『おとなしめの方がいいわね』って。白のブラウスとチャコールグレイのミデイのスカート出してたみたい」

「あっ、じゃあ、上もそろいのスーツになってるやつ

ね。あの子だったら、たしかに、最初はそういうちゃんとしたOLふうとかのがいいかもね」

今ここにいる子はみんな、すでに自分用の女物の服を持っているのだろうが、店には初心者向けのレンタル衣裳も用意されている。まどかは、そのリストの中から、静佳がコーディネートした服を想像したようだ。

OLふうか……。もう少しコケテイツシユな感じのものでもいいのだが……。

垣内自身も、さっきの男の姿にいくつかの服を当てはめて、想像していた。

「ちよつときつい？」

「……え、ええ」

静佳にきかれ、いまだ緊張が解けないままの清孝は、うわずった声で答えた。

「でも、六十四センチが入るんだもん。スタイルいい

わね」

スカートのアスナーを、今とめたホツクのところまで上げてくれながら、静佳が感心したように言った。今度はそれにうなづくこともできず、清孝は、ただ呆然と姿見を見つめた。

まるでどこかの会社の更衣室のようにスチール製のロッカーが林立するこの部屋に入ってきて以来、静佳に言われるままに服を脱ぎ、渡された下着を着けた。

その時点では先客がいたので、清孝は、ロッカーの陰につくられた——おそらくはそのためのものであるらしい——スペースに隠れるようにして、その作業をしたのだが、背中を反らしてブラジャーのホックをとめ、トランクスをショーツにはきかえている自分の姿は、どうしようもなくグロテスクで情けないものに思えた。

これは、とても大の男がやることじゃない。

そう感じ、「やってられない」と尻をまくって、このまま帰ってしまおうかとも思った。

しかし、「これがいいかな？」などと先客と話しながら服を選んでいる静佳の大まじめな口調に、今さらここでごねるのも、なんだか逆に男らしくない気がし、つづけて、やはり渡されていたパンストをはいた。

そこで、「じゃ、お先」と先客の女装男が部屋を去り、「こっちへ来て」と静佳に呼ばれた。

脱いだ男物の服で前を隠すようにして、清孝がおずとおずとロッカーの陰から出ると、静佳は、ブラのストラップを調整したあと、カップにシリコーン樹脂らしいパッドを入れた。

女にしか見えない静佳にそんな姿を見られているだけでも穏やかでいられないのに、さらにそんなことをされ、清孝はすっかり狼狽した。

そのせいで、その上から服を着せられている時も、

反抗はおろか、あれこれ話しかけてくる静佳に反応することさえできなかつたというわけである。

そして気がつくのと、今、清孝は、白のブラウスにグレイのスカートという姿で、姿見の前に立っていた。

ブラウスは、襟から伸びたボータイが、ふくらんだ胸のところでもリボン結びされていた。いつものベルトの位置よりも少し高い胃の下あたりを締め付けてくるスカートは、膝のあたりで中途半端に裾を揺らして

いた。そこから伸びた脚には、今しがたはいたパンテ  
イストツキングが貼りついていた。

下着だけの時より多少はいいにしても、その姿は、  
やはりグロテスクなもののように、清孝には思えた。

「うん。オーケーね。すね毛も薄いから、よっぽど近  
くで見ないかぎりわからないわ」

清孝の肩越しにやはり鏡を見ていた静佳は、清孝の  
思いに反し、そう言った。

「じゃ、お化粧始めましょうか。ここに座って」

多少落ち着きを取り戻したというものの、いまだ自分自身を制御できない状態の清孝は、静佳の言葉に従わざるを得ない。

それどころか、部屋のコーナーにしつらえた化粧台らしいテーブルに座ろうとした時には、ブラウスの下で「胸」が揺れる重みを感じ、清孝はさらに自分を見失った。

化粧水らしい瓶を取り、小さなコットンに浸みさせていた静佳は、それを清孝に渡してよこした。

「まず、これで顔全体を拭いてね」

まるで当たり前のことのように、どちらかと言えば事務的とも言える口調でてきぱきとことを進める静佳に、やはり清孝は逆らえない。

清孝がおずおずとそのコットンで顔を拭い終わると、静佳は、スポンジに白濁した乳液状のものをとり、

手早く清孝の顔に塗った。そしてすぐさま、べつのスポンジに——ファンデーションというのだろうか——肌色の液体をつけ、同じように、清孝の顔全体に広げていった。

その手つきは早く、かつ強く——目の縁などはきわめて正確に動いている感じなのだが——、ちよつと乱暴なものにさえ思えた。顔の表面の肌を軽く殴りつけるようなその刺激のおかげで、またいくぶん自分を取

り戻した清孝は、先刻から静佳にきいてみようと思っ  
ていたことをやっと思い出した。

「あの……」

「ん？　なあに？」

「……あの人……垣内さんっていう……、  
どういう人  
なんですか？」

「……どういうって？」

静佳は、次にやはり肌色のステイック状のファンデ

ーションを取り出し、清孝の眉のあたりに塗りながら  
ききかえしてきた。

「つまり：：何をやってる人なのか：：とか」

「ああ、お仕事？ あたしも、よくは知らないんだけ  
ど：：。美術関係：：画廊を持つてる画商さんだとか  
いう話は、前にきいたことあるけど」

「：：」

静佳の答えにある意味納得はあったが、でも、けっ

きよく垣内についてはなににもわからないも同然だつた。

「垣内さんに、自分がどうにかされるんじゃないかって、気にしてるわけ？」

今度は、口のまわり、つまりヒゲの剃り跡あたりに、またちがうファンデーションをたたきつけるようにしながら、静佳の方がきいてきた。

「……い、いえ……まあ……」

静佳の言うとおりののだが、それを素直に認めてしまうのも、どこかみつともない気がして、清孝はあいまいに言った。

「……ふふ、ちよつと変わった人ではあるけど、遊び方は、きれいな人だから……」

「……え？」

「つまり、人を陥れたり、ひどく傷つけたりはしないってこと」

「……ええ、まあ、それは……」

たしかに、先刻からの垣内との会話にそういう品性の悪さは感じられなかった。

「お金にもきれいだしね」

「……？」

「垣内さんと遊んだとしても、あなたに負担をかけたりはしないはずよ」

先刻のバーの会計も、清孝が飲んだ分までふくめて、

垣内が出してくれていた。この店の代金も、自分から連れてきた以上、垣内が支払うつもりなのだろう。それは、この間の垣内の態度から、清孝にも容易に想像はついた。

しかし、だからこそ……。

年齢がひとまわり以上離れている男が、自分から誘っている相手におごるといふのはふつうのことだとも思えたが、だからこそ、そのぶんおごられている側は

負い目のようなものができる。無闇に逆らえなくなるという面はあるだろう。

現に、今、僕はこんな……。

なんだか巧妙に、垣内に操られているような気がして、その点でも、清孝は落ち着かなかつたのだ。

僕にこんなことをさせて、あの人は、なにをしようとしているんだらう……？

清孝は、けつきよくまた、そんな疑問にたどり着い

た。

「思った以上に化粧のノリがいいわ。ニキビのあととかほとんどないから」

清孝の想念にはお構いなしに、静佳はそう言いながら、今度は小さなスポンジのついた筆のようなもので、清孝の目のあたりにシャドーを入れ始めた。

そんな静佳の言葉に反応もできず、清孝は、目の前の鏡に映った自分の顔を見た。

ファンデーションの類が塗られ、のっぺりしたその顔は、なんだか自分のものではないような気がした。しかし、とても女には見えない。塗る前にはあった生氣すら奪われ、ただ無表情で気味悪いものになっていくのだ。

：：やっぱ僕には、女装なんて無理だよな。これじゃまるで、新婚旅行の時に見たイタリアの仮面じゃないか。

清孝は白塗りされた自分の顔を見ながら、七年前、結婚したばかりの妻と行ったヨーロッパ旅行のことを、唐突に思い出していた。

あれは、たしか、ベネチアだったか……。

立ち寄った博物館はもちろん、空港のみやげ物屋などにも、カーニバルや仮面舞踏会に使ったらしいこんな顔の仮面がたくさん並んでいた。

ふふ、マスカレードか……。

口にこそ出さなかつたが、清孝は、心の中でそんな  
独り言をつぶやいた。

あの時代のヨーロッパ人は、なぜ、あんな奇妙なこ  
とをしたのか？　きっと、いつの時代も、人間には、  
自分以外のものになりたいという欲求があるのだろ  
う。それが、人間の習性というものか……。

そうとでも考えなければ、こんな店の存在を説明で  
きない気がした。

いや、そう考えれば、じつは先刻からどこかで感じているワクワクするような気持ちにも、言い訳が立つ気がした。

清孝がそんなことを考えている間も静佳は淡々とその「作業」を進め、清孝の目に目ばりとマスカラを入れ、さらに今は、細いえんぴつのようなもので眉を描いていた。先刻、ステイック状のファンデーションでつぶした上に、新たな眉をつくっているわけだ。

「ちよつと、こつちを向いて」

目のまわりの化粧の左右のバランスを見るためだろ  
う。鏡を見ながら作業を進めていた静佳が、清孝の体  
を自分の方に向かせ、顔をのぞき込んできた。

じつと見られているのに耐えられず、視線をそらせ  
た清孝の目に、静佳の肩のあたりにかかったたすきの  
藤色が鮮やかに飛び込んできた。

：：あれ？ いつの間にたすきなんてしたんだろ

う。

化粧の作業に和服の袖がじやまになるからだというのはわかったが、静佳がたすきを掛けたのを清孝は覚えていない。先刻、ブラウスを着せてくれた時にはしていなかったと思うから、清孝がここに座ってからしたのだろう。

そんなことにも気づかないほど、自分の気持ちが生でないことに、清孝は、あらためて驚いた。

静佳は、ふたたび、清孝を鏡に向かわせると、今度は、ほお骨からこめかみのあたりに濃いピンクの粉をはたいた。

目のまわりや頬にはつきりしたラインと色が加わり、仮面のようにだった清孝の顔は、いくぶんにぎやかな感じになっていた。しかし、これも、とても「女のよう」とはいえないものだと思えた。あれこれ描き加えられたせいで、「つくりもの」という感が、よりい

っそう強くなっている気がするのだ。目ばりやマスクのせいで、まぶたのあたりがこわばっていることが、さらにそんな感じを助長していた。

それにだいいち、その顔の上にある頭髮が、いかにもサラリーマンふうの横分けなのだから、なおさらだった。

と、静佳は、ヘアブラシを持って、その髪の毛をオールバックふうになでつけ始めた。化粧台の隅に置い

てあるケースからヘアピンを何本か取って、清孝の耳の上あたりの毛をとめもした。

毛がすっかり後方に向かって貼りついたようにされてしまった自分の頭を、清孝が呆然と見ていると、その場を離れてロッカーのひとつを開けた静佳が、「こんなのがいいわね」と言いながら、なにかを取り出した。

光線によっては黒に見えなくはないほどの茶色の髪

が、五十センチくらいの長さで植えられているかつらだった。

ふたたび清孝の後ろに立つと、静佳は、そのかつらの内側を広げるようにして、清孝の頭にかぶせた。

頬や肩に、毛先がバウンドした。これまでの人生では感じたことのないその触感と量感に、清孝が気を取られていると、かつらの位置を直した静佳は、先刻とはまたちがったヘアブラシを持って、前髪などの形を

整え始めた。

清孝は、言葉も発せず、それらの作業をされていた。

鏡の中に現れた自分の顔に驚いていたからだ。ヘアスタイルが変わったことにより、その顔は、確実に変化していた。眉の下あたりまで垂れた前髪、そしてなにより、サイドの毛によって、ちよつと角張った感じだったほお骨や両あごのつけ根あたりのラインが隠れたのが大きいのだろう。

アイメイクなどとも合わさって、その顔つきは、たしかに「女」と言えないこともないものになっていた。

いきなり大きく変容した自分の顔に驚きながらも、清孝は、それでも、まだどこかちがうと感じていた。

全体の印象はたしかに変わったが、先刻から感じていたつくりものめいた見かけは消えていない。いや、あきらかに自分の髪とは違う感覚のかつらが加わったぶん、かえって、その印象が強まった面もある。

……そう、その顔は、なんだかマネキンじみていた。と、静佳はそこで、化粧品が並んだケースの中から、口紅を選び、キャップをとった。容器をまわして口紅を出すと、その先に何度も紅筆を走らせ、筆先に含ませるようにした。そして、その筆を清孝の唇に寄せる、と、慎重に動かしていった。

まずは、上唇と下唇の輪郭をなぞり、そのあと、内側を塗り、最後にもう一度、両側の口角の形を整えた。

静佳にその作業をされている間、清孝は、ただ呆然と鏡を見つめていた。

自分の顔がマネキンじみて見えたのは、唇のせいだったことに気がついた。男である自分のくすんだ唇の上にファンデーションの色が重なり、顔から生気を奪っていたのだ。

そのオレンジがかった赤が描き加えられるごとに、失われていた生気がよみがえってくる……いや、新たに

に生み出されてくる感じがした。白塗りの無表情の上  
にただのせられただけだった目などの化粧が、その赤  
によって、ひとつのものに統一され、生き生きした感  
じになっていくのだ。唇が描かれたことで、目に施さ  
れた細工が、自分のふだんの目つきとはちがうパツチ  
リとした印象的な表情をつくっていることに、初めて  
気づかされた。

：：えーえっ！

心の中であげた驚きの声がそのまま口の形に反映し、塗り終わった唇の端をきゅっと持ち上げた。そして、そのことでさらに、清孝の顔は、女としての魅力を増した。

こ、これが……。

鏡の中に映っているのが、自分だとは信じられなかった。

先刻までひどく違和感を感じていたブラウスの胸の

ふくらみや、その前で大きくリボン結びされたボータイも、その顔と合わさると、少しもおかしくなく見えるのだ。

「……ふふふ」

鏡を見つめて呆然としている清孝の姿を見てかすかに笑い声を立てたあと、静佳は「全身を見てみる？」と言った。

その言葉に、まだ熱に浮かされているような顔で立

ち上がると、静佳が姿見の前に導いた。

姿見に映ったその姿は、「女」以外の何者でもなかった。

清孝は、そのことにさらに衝撃を受けながらも、開いて立っていた片足をもう一方の足の後ろに引くようにして、鏡に正対していた体を少しはすに構えた。その方が、自分がより「美しく」見える気がしたのだ。

そして、思わずそんなことをした自分自身にも、さ

らに、まさにそのとおりになったことにも愕然とし、はすに構えたことではつきりとわかるようになった胸のふくらみを見つめて、ひとり頬を赤らめた。

「初めてでパンプスはちよつとつらいかもしれないし、今の季節だったら、まだサンダルでいいわね」

いつの間にか、ふたたびロッカーのひとつを開けていた静佳が、そう言いながら、白いサンダルを取り出して、清孝の足もとに並べた。

清孝は、下着の時ほどの抵抗感もなく、それに脚を通していた。

サンダルといっても、ヒールはそれなりに高く、足首のあたりに巻いてとめるストラップがついている。

そのことに気づいた清孝は、ちよつとよろめきながら、腰をかがめ、両足のストラップのスナップをとめていた。

そんな動作は慣れていないこともあり、なんだか不

格好なものになった気はしたが、腰を曲げることで目に入ったスカートと、そこから出たストッキングの脚に気づき、自然に、両膝が開かないように気を配ってもいた。

立ち上がって、そのデザインのおかげで細く見えるようになったサンダルの足首を見ていると、静佳がスカートとそろいの上着を着せかけてくれた。

ブラウス同様、七分袖になったそのスーツを着た姿

を、清孝はふたたび鏡に映し、先刻よりさらに意識的に、サンダルの足を逆T字型に組み合わせるようにして立ってみた。

ヒールのせいでさらにすらりと見えるようになったその姿に、もはや、男の面影はなくなっていた。

街でふつうに見かける通勤途上のOL……いや、「ふつう以上」という気もした。

「……あなた、これまで女装しなかったのが、なんだ

かもつたいないくらいね」

静佳の言った言葉に、思わずうなずきかけて焦った清孝は、鏡越しにいったん静佳の顔を見たあと、目をそらした。

今の自分の存在すべてを——つまり、この姿だけでなく、今取っていた行動も、そして今感じている心持ちも含めて——どうとらえたらいいのか、自分でもよくわからない。

それが、最も正直な感想だった。

肉体と理性と感情がばらばらになっていくような、そんな感じもした。

「自分が何者であるのかさえわからないような心おののく不安」

垣内が言っていたそんな言葉が、清孝の頭の中をかすめた。

「……さあ、じゃあ、下へ降りましょうか」

静佳が言った。

……えっ？

この店のシステムから言って、ある意味当然のことではあったが、その言葉に、清孝はあらためて動揺した。

その形の定かでない不安が、一部だけ、はっきりとした不安になった。

こんな格好を、他人に見られる……。いや、もう、

ママには見られているのだけれど……。でも……。また急速に募ってきた羞恥の中で、清孝の心は千々に乱れた。

そして、ふたたび、鏡の中の自分の姿に見入った。

その心の乱れの中には、「見られたくない」という気持ちと同時に、「こんなにきれいになれた自分を誰かに見せたい」という気持ちも、たしかにあった。

大音量ではないものの、店の中にはインストルメンタルのBGMが流れていた。だから、外の音はほとんど聞こえない。

しかし、弥生やまどかの際限ないおしゃべりにたまに参加しながらも入口の方を気にしていた垣内には、ドアの向こうでエレベーターが開く音が聞こえた気がした。

そう感じて垣内がそちらを向くと、案の定、すぐに

ドアが開き、静佳が入ってきた。

入ってくるなり、静佳は垣内に笑いかけ、うなずいてみせた。

それがなにを意味しているのかがわかり、垣内も静佳に笑い返すとすぐに、その背後から隠れるように入ってきた人物に注目した。

静佳はそこで、ちらりと後ろを向き、チャコールグレイのミデイのスーツを着たその「女」を招き入れる

ようにした。

「ウワーオ！」

垣内がなにか言うより早く、カウンターの中的まどかが声をあげた。

その声に「女」——件の男は、なにか悪戯を見とがめられたとでもいうように、うつむいて肩をすくめるような仕草をした。

「すごーい」

「立派に女の子になってるう」

「しかも、美人」

「初めてだなんて、ウソでしょ」

まどかだけでなく、弥生や真由美たちも、そろって声をあげた。

「ね。あたしも、メイクしながらちよつとびっくりしちゃったのよ」

カウンターの入口をくぐって戻りながら、静佳もみ

んなの意見に同意した。

男は、そんな賛辞に、その場を動けず立ちつくして  
いた。

立ち方などにまだ女らしさに欠ける点はあるが、  
もじもじと顔を赤らめているその姿は、じゆうぶんに  
女性の「恥じらい」に見えた。

「さあ、こっち来て座って」

弥生が席をひとつづれ、もと男が座っていた――つ

まり垣内の隣の——カウンターチェアをあけた。

男はちよつとためらつた様子を見せたが、立つたまま見られているのも間が持てなかつたのだらう。すぐに弥生の言葉に従つた。

「それにしても美人だなあ。なんか、すごく清楚な感じがするわよね」

男が座ると、まどかがまたまじまじと見ながら言ったので、男は、さらに照れてうつむき加減に目を泳が

せた。

「男の時は、めちやめちや女っぽいって感じでもなかったのにね」

「肩かな、やっぱり。薄くてなで肩だから服のデザインでごまかさなくてもいいのよね。こういうシンプルな服がよく似合う」

「ふつう、スーツだと、もつとごつい感じになるのになえ」

「肌もきめ細かく見えるし。化粧のりがいい肌ってるのね、やっぱり」

弥生や真由美、それに由香も加わって、賛辞は次第に批評の色を帯びてきた。みんな、自分の参考のためにも、男の「変身の秘密」を探りたいというところだろう。

そんな会話をききながら、垣内は、ふたたび静佳と視線を交わし合って、うなずいてみせた。

グッドジョブ！

——そんな意味を込めたつもりだった。

弥生たちの言うように、男の「女装前／女装後」の変化は、思った以上に大きい。そんなギャップが大きければ大きいほど、垣内の満足度も増すのだ。

静佳も当然、垣内の視線の意味はわかったようで、ちよつとからかうような視線を交えながら笑い返してきた。

ここまでやったんだから、あとはあなた次第よ。

——と、そんなところだろう。

たしかに、あとの仕上げは垣内の「ジョブ」だった。

このギャップをさらに拡大して、そして……。

「これなら『二十二でくす』とか言っても、通るかもしれないわね」

「新入社員のOLってどこ？」

「そうそう」

「ここにいるこわいお局様たちに気をつけるのよ。かわいい子には特に意地悪だから」

「あつ、ひどい」

周りを囲んだ「女」たちの会話がつついていた。

と、そこで、弥生が垣内の方を見て言った。

「そういえば、垣内さんの感想をまだ聞いてないわね。

……どう？」

「……え、ああ。あまりにも美人になったんで、形容

する言葉が見つからなくてさ」

垣内がそう答え、それを他の連中がはやす中、男は、ちらりと垣内の方を見て、目が合うと、またあわてて視線を落とした。

照れくささを表したつもりだろうが、その一連の動作の中には、単なる照れだけでなく、垣内に言われたことがまんざらいやではないことが見て取れた。

「どうですか、ご感想は？」

今度は垣内の方が、男に耳打ちするように話しかけると、男はくすぐったそうに肩をすくめてみせてから、少しだけ目を上げ、こう言った。

「やつぱり、こんな格好、なんだか落ち着きませんよ」  
それで垣内は、「ふふ、わかります」と同意してから、重ねてきいた。

「だけど、自分でも、ちよつと驚いたんじゃないですか？ その変身ぶりには」

と、男は、いったんそれを認めたくないという表情をしたが、そんな抵抗はすぐに見破られるとでも思ったのか、素直に「え、ええ」とうなずいた。

「どうです、無理じゃなかったでしょ。これであなただけは、確実に、人生をリセットするゲームをスタートできたわけです」

「……スタート？」

垣内が含みを込めて言った言葉に気づいたようで、

男はすぐにそうききかえしてきた。おそらく、これだけ「ゲームオーバー」にしたいと思っっているにちがいない。

それを感じ取った垣内は、問いには答えず、ただ笑ってみせた。

男は、さらにいぶかしげに見つめ返してきたが、そこに割り込むように由香が声をかけた。

「ねえねえ、名前はもうつけたの？」

「……？」

「女の子としての名前」

「……あ、ああ」

由香の言ったことがやっとわかったようで、男はまた、戸惑ったように目を泳がせた。

「じゃあ、考えなきやね。ふつうはね、あこがれてるアイドルの名前だとかあ、好きな漫画の主人公とかあ……よくあるのは、初恋の人の名前とか……」

「……で、でも……」

話を進める由香に、男はさらにとまどいの表情を見せた。

そこで、真由美が言った。

「いっそのこと、垣内さんがつけてあげたら」

「……えっ、ああ、でも……」

垣内は、じつは最初からそのつもりだったのだが、いったん逡巡するふうを装ってから、男に「いいです

か？」と聞いた。

男は、まだ困ったような顔で視線を揺らしてしていたが、まわりの注目が自分に集まっているのに気づき、しかたなくといった感じであらずいた。

「そうだなあ……。ママがメイクして女の子にしてくれたわけだし、ママの名前を一字もらって『清佳』なんてどうかな」

本当のことを言えば、要するに垣内は、昔から自分

が特に気に入った子には「佳」の字をつけることにしているということだった。静佳にしたところで、なんのことはない、もともと垣内がつけた名なのだ。

そんなわけで、先刻、誰かが「清楚」と評したこと  
もあって「清佳」と言ってみたのだが、その名をきい  
て、男はなぜか驚いた顔をした。もしかすると、なに  
か心当たりのある名前だったのかもしれない。なぜだ  
かわからないが、垣内は、不思議とこういう「勘」が

働くのだ。

「清佳ちゃんかあ、かわいい名前ね」

「うん、ぴったりぴったり」

他の連中もそれに賛同して、「清佳ちゃん、よろしくね」などと言いつのつたので、男は、また、照れた顔で肩をすくめるようにした。

さらにそこで、静佳がコップを持って「じゃ、乾杯しましょうか。清佳ちゃんの誕生に」と言い、「かん

ぱーい」「清佳ちゃん、おめでとう」と、周囲がそれに同調した。

それで、そこまでは恥ずかしさの中で受け身にまわっていた男も、ついに耐えられなくなったという感じで口を開いた。

「もう、みなさん、かんべんしてくださいよ」

「ふふ、清佳ちゃんこそ、もう観念なさいな。清佳ち

ゃんは、今、どう見たって女の子なんだから」

静佳がからかうように言うと、男は、「で、ですか  
ら、僕は……」と、また口ごもった。

「僕……じゃないでしょ」

「だ、だから……」

「ま、初めてなんだし、慣れないのはわかるけどね。

女の子のつもりになって話しても、ここでは、誰も笑  
つたりしないから平気よ」

「だ、だって……」

男が、そう言つて口をとがらせたのを見て、今度は由香が「あつ、清佳ちゃん、すねた顔もかわいっ」とからかった。

どう反応してみてもからかわれるのがオチになるとに気がついたらしく、男は、ため息をつくように肩を上下した。たとえマジで腹を立ててみせたところで、今のナリでは説得力もなにもないことは、すでに男にもよくわかっているようだった。

そんなやりとりを見ていて、そろそろ次の仕掛けを繰り出す頃合いだと思った垣内は、笑いながら言った。

「ママの言うように、なりきって楽しんじゃえばいいんですよ。さつきも言ったように、これはゲームなんですから。それこそ、RPGの女主人公にでもなったつもりで」

「そんなこと、僕には……」

「無理ですか？」

垣内がすかさずそう言ったことで、男は先刻の会話を思い出したらしく、ちよつと笑った。「女装なんて無理だ」と言っていた自分が、鏡の中でどう変わったのかを思い出し、照れもしたのだろう。

「このゲームを楽しめるかどうかは、要するに、なりきることができるといふかどうかですから。それに……」

「……？」

垣内が言葉を切ったことで、男は、聞き返すように

顔を上げた。

「さつきから見ていると、あなたは、消極的にはあつても、女を演じようとはしているようですし」

「……えっ？」

「だって、そうでしょう。スカートからのぞく膝小僧をしつかり揃えて座っている」

垣内がそう言うと、男はちよつと焦ったように自分の膝のあたりを見た。そして、いったん膝を開きかけ

たが、けつきよく、またすぐ閉じた。

「……いや、こんな格好で、男のような座り方をしたら、かえってみつともないでしょう。それで……」

「ふふ、今、あなたがちよつと驚いた顔をしたのは、じつは、知らず知らずのうちにそうしていた自分に対して……ということですよね」

「……い、いや……」

垣内の指摘が凶星だったのだらう。男は、それ以上

言葉を継げなかつた。

「あなたの無意識は、すでに、その服装に感応して女を演りはじめている。その脚のそろえ方だけでなく、先刻からのあなたの仕草、たとえば、ウイツグの髪を後ろにかき上げる仕草なんて、とても女っぽいですよ」

「や、やめてくださいよ……」

「あとは踏ん切りだけです。あなたの中に生まれたもう一人のあなたを、もつと解放してあげるかどうかの」

「そ、そんなことは……」

「そうだ。その格好で、ちよつと外を歩いてみませんか？」

垣内は、さも今思いついたようにそう言った。

「……えっ!？」

垣内の提案に、男はやはり驚いたようだ。

「そうすれば、その踏ん切りのための度胸もつくつてもんです」

「……そ、そんな」

「どうですか、思い切って。女として街を歩いてみるのも面白いですよ。どうせここまでやったんだし、この際、そんな経験をしてみるのもいいでしょう」

「そんな、今でも恥ずかしくてどこかに隠れたい気分なのに……」

「だいじょうぶ、私がしつかりエスコートしてさしあげますから」

垣内がそこまで言った時、由香が「なに二人でこそ話してるのよお」と、また割り込んできた。

「いや、……」

由香に下手にかき回されるのは避けたいと思い、垣内が次の言葉を考えていると、まどかが由香を制するようにつづった。

「由香ちゃん、垣内さんが清佳ちゃんを口説いてるんだから、じやましちやダメでしょ」

その言い方はかえってまずいだろうと垣内が思っていると、案の定、由香は男に向かってさらにふざけた調子でからかった。

「うわっ、清佳ちゃんのバージンの危機ってわけ？

これはほっとけないわね。生まれただけのうぶな女の子に、もう魔の手が伸びてるんだもん」

「これこれ、ダメだって言ってるでしょ」

「清佳ちゃん、女の子はしっかりバージン守らなきゃ

だめよ。最初にあげるのは、ほんとに好きな人じゃないやね。それまで大事にとつとくのものよ」

「もう、この酔っぱらい！ そんなこと言うから、清佳ちゃん真っ赤になってるじゃない」

まどかの言葉に、垣内が見やると、男はたしかにほおを赤らめ、どんな表情をしたらいいのかさえ困っているようだった。

「でも、かわいい子はいいわね。すぐ男に声かけても

らえて」

由香は、今度は垣内の前まで身を乗り出し、多少挑戦的な語調さえまじえて男にからみはじめた。

「だから、もう……。弱いくせにすぐ飲み過ぎるんだから、由香ちゃんは」

まどかはそう言ったあと、男に向かって、「ごめんね、気にしないでね」と言った。

と、そこで、真由美が由香の肩を抱くようにして引

き戻し、「この子はあたしたちが面倒見とくから、二人で席替えたら」と言った。

「そうそう。いつそのこと、お散歩でも行ってきたら。その間に、この子にもっと飲ましてつぶしとくから」

弥生がそう言うのを聞いて、垣内は、なるほどと思った。まどかも含めみんな、垣内の次のねらいを察し、酔った由香を利用して協力してくれているのだ。

「散歩？ あ、それいいわ。一度、女の子になって世

の中を歩いてみると、人生観変わるわよ」

「人に見られれば、女の子としての自信もつくしね」

思った通り、まどかも真由美もすぐに弥生の言葉に同調した。

「……そ、そんな」

一気に流れがそちらを向いたことに、男はたじろいだようだった。そんな様子を見て、さらに弥生が言葉を重ねた。

「だいじょうぶよ。清佳ちゃんなら、簡単にパスできるって」

「……パス？」

「うん。街歩いても、誰にも疑われないってこと」

「そんなことは……」

男がさらに困った顔をして目を泳がせていると、そこでまた由香が、真由美の手をふりほどくようにして言った。

「いいわね、かわいいと。みんなにちやほやしてもらえて」

もしかすると、由香も——もちろん、実際、酔ってはいるのだろうが——この流れに協力して、こういう役割を演じていてくれるのかもしれなかった。

そう思った垣内は、そこで、男に声をかけた。

「どう？　出ようか？」

その言葉に、男はさらにちよつと逡巡したようだった。

たが、すぐにまた、しかたないという感じであらずいた。

男が思った以上に簡単に同意したことに垣内は多少意外な感じもし、また、みんなの協力に感謝もしつつ、この機を逃してはいけないと、すかさず静佳に声をかけた。

「ママ、ちよつと出てくる。勘定はあとでいいよね」  
微笑みながらなりゆきを見ていた静佳は、さらに含

み笑いを加えて垣内にうなずくと、ためらいながらも席を立った男を呼び止めた。

「清佳ちゃん、ちよつと」

その言葉に、男は、すぐに静佳の顔を見た。すでに「清佳」というのが自分のことだという感覚を持っているようだ。

「よかったら、これ使って」

静佳はそう言って、カウンターの下からなにかを取

り出した。

「女の子が、そんなかばん持って歩いてるっていうのも、変でしょ。お財布とか貴重品は、これに入れ替えていったら。それに、なんかあった時のために、化粧直し用のお化粧品も、ひとつとおり入ってるし」

シンプルなデザインの白いハンドバッグだった。

男は、そのバッグを見て、またちよつとためらったが、けっきょくは受け取り、先刻会った時から持って

いたいかにもサラリーマンという感じのサイドバッグから財布や携帯電話を取り出し、そのハンドバッグに移し替えはじめた。

男がその作業をしている間に、カウンターを出てきた静佳は、やはり立ち上がった垣内の袖を引っ張った。

「……ふふ。垣内さんが、まだ手を加えたいんじゃないかな  
いかと思って、おとなしめの服にしといたのよ」

顔を寄せ、男には聞こえないようにそう耳打ちして

きた静佳に、垣内は、また笑ってうなずいた。静佳にも、それに今カウンターまわりにいる子たちにも、垣内の願望は、すっかり読まれているようだ。

多少面はゆい思いはあるが、それはそれで、面倒なことが早くかたづくというものだ。

垣内はそう思いながら、腕時計を見た。男と会ってから、一時間半弱。たしかに、「彼女」たちのおかげで、思い描いていたプログラムより早く、ことが進ん

でいた。

「そのバッグは、ちゃんと預かっておくわ」

男がハンドバッグの留め金をしめると同時に静佳がまた声をかけ、男はそれに従って、自分のサイドバッグを静佳に渡した。

それを見て、垣内は、先に立って入口に向かった。

「いってらっしやうい」

「しっかり女の子やってくるのよ」

「他の男に言い寄られないように気をつけてね」

カウンターの連中が冷やかすその言葉に押されるように、とつかというか逃げるように、男は垣内が開けて待っていたドアを通り抜けた。

Friday

9:00pm

カフェ「スイングハート」

清孝が最後には自ら進んで店を出るといふ感じにな  
ったのは、もちろん、他の客たちにさんざんからかわ  
れたからだだが、それにも増して、この店の独特な雰  
囲

気の中で、自分自身がどんどんおかしくなっていく感じがしたからだ。

「女の子」とか「かわいい」とか言われるたびに、体の中に「むずがゆさ」のようなものが湧き起こる。

それが単なる内心の照れや羞恥にとどまらず、「胸」の重みを感じるブラジャーのストラップだとか、ストッキングの上を滑るスカートだとか、男の時にはない衣服感覚をつたって、実感として全身の肌を駆けめぐ

る。思わず体を震わせてしまいそうな、そんな感覚が耐えられなかったのだ。

さらにそれを増幅しているのが、さつきから自分に對して呼びかけられる「清佳」という名前だった。

本名に似通ったその名を、垣内が最初に口にした時にはさすがに驚いた。すでに名前を知られているのかと思った。しかし、どう考えても自分から名のつた覚えはないから、おそらくは偶然なのだろう。しかし、

偶然だとしても——いや、偶然だからこそ——、その呼び名は、最大の「効果」を發揮した。

音としては耳慣れているだけに、自分のことだと受け入れやすい。にもかかわらず、その名はまったく別の響きを持っている。自分としては男らしいと思っていた「清孝」という名前が、カナにすればたった一字削られただけで、妙に女らしいものになってしまふのだ。

そんな「清佳」という名を、周囲から何度も呼びかけられていると、自分の中からもなにかが削られ、別の存在に変えられていくような気がする。まるで、洗脳かマインドコントロールでも受けているように。

だから、早くこの場を逃げ出したいと思った。外の空気にでも触れれば、少しはまともな神経が戻ってくるのではないかと考えたわけだ。

ところが、エレベーターを待っている時からすでに、

清孝は出てきたことを後悔していた。

店のドアが閉まったとたん、今度はべつの恐怖のよ  
うなものが襲ってきた。

おかしな磁場が働いてはいても、少なくとも安全だ  
けは確保されたシエルターの中から、危険な毒をいっ  
ぱい含んでいそうな外気にふれたという感じだった。

そんな恐怖感は、垣内に促されてエレベーターに乗  
ったあともつづき、その箱が降りていく感覚とともに

さらに強まっていった。

こんな姿で街を歩く……？

男が女装することを前提としたああいう店の中ならともかく、ふつうの人たちがふつうに暮らす街なかにかこんな格好で出て行けば、そこで待っているのは、好奇の視線以外のなにものでもないだろう。こんな姿を多くの人の目にさらすことは、身も世もないほど恥ずかしいことだ。もしかすると、これまで感じたことも

ないほどのさげすみの視線を向けられることになるのかもしれない。

そう感じた清孝は、エレベーターのドアが開いたあとも、そこから動けなくなっていた。

と、垣内が片手でドアを押さえ笑顔を向けてきた。清孝に先に出ると促しているのだ。レディファーストということなのだろう。

「あ、あの、僕はやっぱり……」

清孝は、救いを求めるように垣内を見ながら言った。

「だいじょうぶですって」

垣内はそう言っとうなずいて見せた。

「で、でも……」

「心配いりません。ここから先、あなたのことは、僕が責任持つて守りますから」

垣内にそんな言われ方をされ、清孝はよけいに照れてうつむいた。

と、その視野に、狭いエレベーターの床とともに、グレイのスカートとそこから伸びたサンダルの足が入ってきた。

そんな自分の体の一部が目に入ったことで、清孝は、今の自分の姿が客観的にどう見えるのかをあらためて確認することになった。

一階の通路は表に向かってまっすぐのびているから、前の道を通る人がいれば、まる見えだ。薄暗い通

路の突き当たりで煌々と照明の灯るエレベーターの内  
部は、いやが上にも目立つことになる。

これではまるで、飲屋街のエレベーターの中で、同  
伴の男に向かってだだをこねている女ではないか。

いずれにしても、こんなところでぐずぐずしている  
のは、かえって恥ずかしいことになりそうな気がした。

それで、しぶしぶ、サンダルの足を進め、エレベー  
ターのドアの溝をまたいだ。

清孝が通路に出ると、垣内もすぐにエレベーターを降り、今度はいきなり、清孝の先に立って外に向かつて歩き出した。

あつ……。。

呼び止めようとしたが、声を出すこともできず、清孝もそれに従わざるを得ない雰囲気になった。

あわててあとを追うと、サンダルのヒールの音が通路に響いた。

かかとが高いから、つま先側で体を支える感じになる。そのぶん、つんのめり気味になって、どうしても小股で小刻みな歩調になる。

いわゆるピンヒールではないからまだいいものの、男物の靴とはくらべものにならないほど接地面が小さいこともバランスのとりにくさの原因だ。また、その靴底の小ささが、靴音をふだんよりずっと高音にしてもいた。

それは、あきらかに「女の足音」なのだ。

それらすべてに慣れない清孝には、ほんの数メートルのその通路が、何倍もの長さを感じられた。

ビルを出たところで垣内は立ち止まり、清孝が出て来るのを待っていた。

垣内につづいておそるおそるエントランスを出ると、清孝はまずその裏通りの左右に目を走らせた。

十数メートル先の表通りにはさかんに人が行き交っ

ていたし、道の反対方向にも遠くに人影が見えたが、顔が見えるほどの至近距離には人がいないようだった。道自体もそんなに明るくはない。

それで一安心はしたが、清孝はさらに、すぐ近くに  
ある「ターニングポイント」の電飾看板の明かりを避けるように垣内の影の中に入って立った。

「どうやら、靴はだいじょぶそうですね」

垣内がそう言った。

さつさと先に出て、振り返って見ていたのは、それを確かめたということらしかった。

「かなり、歩きにくいですけど……」

清孝は、垣内にしか聞こえない程度のささやき声で言った。

近くに人はいないにしても、ふだんの声でしゃべるのははばかられた。

「でも、よたついたりはずせずにちゃんと歩いてました

よ。痛みとかはないでしょ。女性は、靴が合わないと  
つらいですからね。せっかくのデートも台無しになる」  
デートなどと言われ清孝はまた動揺したが、一方で、  
かつて妻との恋愛時代、新調した靴のせいで、彼女が  
ずっと不機嫌だったことがあるのを思い出していた。  
あの時、自分は、彼女に言われるまでそのことに気づ  
かず、それこそ「せっかくのデート」での彼女の態度  
に腹を立てたりしたものだ。

「もし痛くなったら、すぐに言ってください。休憩するなり、タクシーを停めるなりしますから」

それにどう答えたらよいかわからず、清孝が垣内の顔を見上げていると——ヒールの分を足しても、垣内の目は清孝よりも5センチほど高い位置にあつた——、垣内は「じゃあ、ちよつと歩きましょうか」と言つて、表通りの方向に向き直つた。

「あ、あの……」

そこで清孝が言うと、垣内は歩きかけた足をとめ、清孝の顔を見た。

「そつちへ行くんですか？」

「……ん？ どこか、行きたいところでも？」

清孝は当然、人通りの多い場所に出るのがいやで言ったのだが、垣内にそうきき返され、「い、いえ……」と答えるしかなかった。本当のところ、「店に戻りたい」と言いたいところなのだが。

「ふふ、表通りに出るのは抵抗がある？」

「……え、ええ」

わかっているならあんなふうにかかなくてもいいのにも思ったが、清孝は素直にうなずいた。

「たぶん、思っているような心配はないと思いますよ」  
「……？」

「歩いてみればわかりますが、意外と人は、街ですれちがう人間をじろじろ見たりしないものです」

「……で、でも……」

「もし、どうしても耐えられないというならすぐに戻りますから、一度、行ってみませんか」

垣内はそう言うと、またにっこりと笑い返し、促すような仕草をした。

こんな場所で立ち話しているのも、やはり目立ちそうな気がして、けっきょく清孝は、しぶしぶながら足を運んだ。

今度は、垣内は清孝のことを気づかないながら、ゆつくりと歩を進めていた。

それでも、清孝は、表通りを行く人々から隠れるように、垣内より半歩遅れて歩いた。

しかし、ほんの何秒もしないうちに、二人はその人波のまっただ中に出ていた。

そもそもが深夜まで人通りが絶えることのない大都會の歓楽街だ。まだこの時刻だと——さすがに子供の

姿はないものの——男女さまざまな年齢層の人たちが行き交っていた。

そんな人の流れの中を一方に向かって歩き出した垣内に隠れるように、さらに顔が見えないようにうつむいて、清孝はついていった。

ヒールのサンダルの歩きにくさは相変わらずだが、それだけではなく、ふだん男で歩く時とはあきらかにちがう感覚があった。足の動きと同時にスカートの中

に外気が忍び入ってくるのがわかる。太股や膝の内側では、ストッキングが微妙にこすれ合う。かっちりと脚を被うズボンでないぶん、決まりどころがない感じだ。で、なんとも心細いのだ。そして、そんな部分も含めて、道行く人に見られているのだと思うと、よけいに心細さが増していく気がした。

できたらこのまま、この場から消えてしまいたいよ  
うな気分だった。

と、そんな清孝を振り向くようにして、垣内が言った。

「そんなにびくびくしないで、もつと堂々と歩いた方がいいですよ。びくついてこわばっていると、かえって目立ちます」

一方でそれももつともな気がして、清孝は、おそるおそる視線を上げた。

そこから数歩も行かないうちに、何人もの人とすれ

違った。

：：ん？

垣内の肩越しにそれらの人々の顔を見て、清孝は意外な感じにとらわれた。

そこに、露骨にこちらを見てくるような視線は感じられない。

清孝はまず、そのことに呆然とした。こちらはさとう緊張しているのに、なんだか肩すかしを食らわさ

れたような気分さえした。

どうやら、先刻、垣内が言ったことは単なる気休めではなかったようだ。

「……ね。都会人というのは、思っている以上に、他人に対して無関心なものなんですよ」

こちらの考えていることがわかっていような垣内の言葉に、さらに視線を泳がせて周囲を観察したが、想像したような悪意や好奇の視線はどこにもなかつ

た。

「よほど突飛な格好をしていたり、たとえば二メートルもあるような大男が女装でもしていれば、みんな見るでしょうが、そうでもなければ、できるだけ目を合わせないようにして歩く。それが都会のルールなんでしょうね」

言われてみれば、たしかに自分だって、道を歩きながら人のことをじろじろ見たりはしない。

「ましてやあなたはそんなふうなんだし、ふつうにしていけば、誰も正体を詮索したりしません。もっと自信を持ってだいじょうぶです」

「そんなふう」というのは、女っぽいということだろう。それには多少抵抗があつたものの、そう言われ、清孝はほんの少し緊張を解いた。

と、垣内が、もう少し前に出ると言うように、歩きながら一歩横へずれた。

垣内の斜め後ろにぴったりくつついて歩いているのもたしかに不自然な気がして、清孝も一步前に出て横に並んだ。それに、実際、そのままでは歩きにくくもあつたのだ。

垣内は清孝のスピードに合わせてゆっくり歩いてくれたが、どうしても小股になる清孝は、垣内より速い回転で歩を進めなければならぬ。そのタイミングのちがいのせいで、後ろを歩いていると、垣内の足と

ぶつかりそうになるのだ。

しかし、横に並んでも、その歩調のちがいは、清孝が垣内について行っているという印象だけは残した。

「暑くもなく寒くもなく、こうしてぶらぶら歩くにはちょうどいい気候ですね」

垣内が、さらに清孝の緊張をほぐすだけでもいうように、そんなことを言った。

たしかに、頬にあたる微風が心地よい。

そう思ってから、清孝は、男の時は、こんなふう  
にそよ風を意識したりはしないなと思った。

それは、先刻から、恥ずかしさに顔が上気している  
せいだろうし、時折、頬をなでるウィツグの髪が、風  
の動きを伝えてくるからでもある。さらには、肌その  
ものも、上に塗られた化粧の質感をつねに感じること  
で敏感になっている気がする。

「どうです、女性として世の中に出てみた感想は？」

思ったほどたいしたことではなかつたでしよ」

垣内にそうきかれ、清孝は、ちよつと考えてから、まわりの人に聞こえないくらいの小声で言った。

「……え、ええ、まあ。でも……」

まだ落ち着かないということ伝えようとした、その時だつた。

前方から歩いてくるサラリーマンふうの二人連れが、あきらかにこちらを見て、なにかをささやき合つ

た。そして、そのあと、さらに露骨な視線を浴びせかけてきた。

それに気がついて、清孝の緊張がまた高まった。

その三十代らしい二人の男は、あきらかに酒場帰りのようで、足もとがふらつき、顔もだらしない感じに赤くしている。

二人は近づくにしがって、いよいよ、じろじろとこちらに視線を送ってくる。からかうというか、馬鹿

にするというか、そんな視線だった。

正体を感じかれたにちがいない。

さつき垣内はあんなふうに言ったが、やはり気がつく人はいるのだ。

そう感じ、清孝は、また顔が見えないようにうつむき、極度の緊張状態に陥った。

なんだか、歩くことすらおぼつかない感じだった。

見られているからこそちゃんと歩こうとしているの

に、サンダルの足がもつれそうになる。

清孝がそんな自分に焦っているうちに、男たちは近づき、そしてすれちがいざま、案の定、からかい口調の言葉を投げかけてきた。

「いいよな、そんな若い子と不倫かよ」

「奥さんだいじよぶなのお、おじさま」

……えっ？

一瞬、男たちの言ったことが理解できず、垣内の方

を見上げると、おかしさをこらえるという感じで苦笑していた。

「……ふふ。不倫……だそうです。今、私たち二人は  
そう見えるんですね、きっと」

「……」

けつきよく男たちは垣内をからかったのだというの  
はわかったが、垣内の言葉にどう答えたものか迷い、  
清孝が黙って歩いていると垣内がつづけた。

「あなたがびくびくと緊張しながら歩いているから、よけいにそんなふうに見えるんでしょう。中年の上司がよこしまな心を抱いて、ウブな女子社員を連れまわしているというところでしょうか」

その言葉に、清孝はさらに照れたが、一方でたしかに、垣内の言うとおりかもしれないと感じ、ふたたび、正面を向いて顔を上げた。

「でも、確実に言えることは、酔っぱらいがあんなふ

うにちよっかいを出してくるのも、あなたが女として魅力的だからです」

「……え？」

「だってそうでしょう。連れているのが取るに足らないような女性なら、うらやましがってからかってくるようなこともない。こんな中年男が、若くてかわいい子連れにいるからこそ、彼らもしやくにさわったわけです」

「そんな……」

と、その時また、十数メートルほど先から、数人の男たちの大声が響いてきた。

「課長、もう一軒行きましようよお」

「そうそう、せつかくのキャンペーンの打ち上げなんだから」

また酔っぱらいらしい。

背広姿の男たちが、お互いにからみつくようにやつ

てくる。仕事帰りに飲んで、ハシゴをしているという感じの一団だ。

「お前ら、目標達成もできずに、よく言うよな」

「まあまあ、いつものことなんだから、そう堅いこと言わずに」

「次は、カラオケく：：なんちって」

「えーっ、男ばっかでカラオケかよ。どうしようもねえな」

わがもの顔で歩道に横に広がり、あきらかに他の人の通行のじやまになっているその男たちを見て、清孝は一方で、彼らの今の心情が、おおよそ察しがつくような気がした。もちろん、自分にも覚えがあるからだ。しかし、そんなことばかりも思っていられない状況だった。

このまま行けば、彼らと真正面からかち合うことになる。

「おねえちゃんたち、どこ行くの？」

「いっしょにカラオケ行かない？」

脇をすり抜けようとした女性の二人連れにちよつかいを出し、大笑いしている男たちを見ながら、清孝はまた不安になった。全員が、自制心をなくすほど酔っている。そうとうたちが悪そうだ。

あんなのにからまれたくない。

そう思った清孝は、知らず知らずに横の垣内の顔を

見やっていた。

と、そこで、垣内がこう言った。

「心細かったら、腕につかまってもかまいませんよ」

「……え!？」

その言葉に驚いて、そして、自分の中で、言葉どおりにしたいという気持ちがあったことにさらに驚いて、清孝の歩調がちよつと乱れた。

と、垣内は、いったん立ち止まって清孝の二の腕の

あたりに手をかけ、脇へ押しやるようにした。

「こちら側を歩いてください」

それまで垣内が車道側を歩いていたのを、入れ替わり、前の男たちから清孝を守ろうということらしかった。

男たちが近づいてくることに緊張が高まっていく中、清孝はそれには素直に従って、歩道のいちばん端に位置を変えた。

と、垣内は、すぐに男たちから清孝を隠すように、斜め前を歩き出した。

清孝も、なるべく目立たないように、その影になる位置を選んで進んだ。

と、男たちのうち端の一人が、こちらに気がついたらしく、近づきながらなめるように見てきた。あきらかに、なにか言いたそうな目だ。

清孝の中で、最前感じた気持ちさがさらに高まった。

この腕につかまりたい。

そう思ったのだ。

先刻、七分袖のスーツの腕に手を添えられた瞬間、どこか安心感のようなものを感じた。高まる不安の中、その感覚にすがりたい気がしたのである。

しかし、もちろんそうもできず、男たちとの距離が縮まるにつれ、不安だけが大きくなった。

なぜだか、スカートの中で股間あたりに緊張を感じ

た。

やがて、男たちが脇を通り過ぎ、垣内が清孝に折り重なるようにして彼らの集団をよけた。

そんなふうに垣内が視線を遮ってくれていたおかげもあつたのだらう。どうやら清孝は全員の目にはさらされずにすんだようだ。数メートル前から露骨な視線を向けてきた端の男だけは、すれちがいざま、舌打ちしたようだが。

営業キャンペーン中ふるわなかつた自分の成績に腐  
つていて、カップルを見ただけでも腹が立つ。いかに  
もそんな感じだった。

いずれにしても、清孝の正体を疑ったのではないこと  
はたしかだった。自分は今、まちがいなく女として見  
られていたのだ。

男たちが通り過ぎたのと、そう感じてまた少し安心  
したので、清孝は思わずため息をついていた。

そんな様子を見たからだろ。垣内が言った。

「ふふ。もう疲れましたか？ それなら、ここでちよつと休んでいきましようか？」

ちようど歩道の切れ目に来て立ち止まったその角のビルに、カフェテラスふうの喫茶店があつた。

煌々と照明の灯るガラス張りの店内を見て、清孝は、そんな明るいところに入るには少なからず抵抗を感じたが、度重なる緊張と慣れないサンダルやスカート

のせいで下半身が疲れ、どこかに座りたいのもやまや  
まだった。

それで、垣内の顔を見たあと、こくんとうなずいた。

この店は以前にも利用したことがあるから、どんな  
造りになっているかを垣内は心得ていた。

ジャズアレンジのイーजीリスニングが流れる店内  
に入ったあと、壁際のソファ席に案内しようとするウ

エイターを遮って、「こつち、いいかな？」と、窓側に並んだ二人がけの丸テーブルの方を指さした。全面ガラス張りで、しかもカフェテラスふうのテーブル配置になっている。

「ええ、どうぞ」

ウエーターが答えるのを待って、垣内は、そのうちのひとつに近づき、椅子を引いた。

そして、男に、そこに座るよう促した。

男はちよつとだけソファ席の方を振り向くようにしたが、すぐに従った。本当のところは、外の歩道からよく見えるこちら側の席は避けたかったにちがいない。とはいえ、ソファ席の方にはけっこう先客がいて、そつちに近づくのもいやだと思ったのだらう。

男が席に着くのを待って、垣内はテーブルに添えられたもうひとつの椅子をずらしてから腰掛けた。もともとは、外に背を向け、男と向かい合う角度で据えら

れていたのを、九十度近く動かし、男と斜はずになる形にしたのだ。

店内と外を仕切っているのは透明ガラスだから、この席に座ると外からよく見えるのはもちろんだが、中が明るく外が暗いこの時刻だと、中からはガラスが鏡のような作用もする。つまり、透過してくる外の風景に重なって店内の様子も映るわけである。今、ガラスに向き合って座った男の目には、外の歩道を行く人々

の景色と重ね、ガラスに映った自分自身の姿も見えて  
いるはずだ。人々の視線と同時に、その視線によつて  
自分がどうとらえられているかを意識させる。垣内が、  
わざわざこの席を選び、前をどくように座ったのは、  
そんな思惑があつてのことだった。

案の定、男もすぐにガラスに映った自分の姿に気づ  
いたらしく、そちらを見てはつとした表情をした。

小さな丸テーブルは真ん中に足が一本ついているだ

けだから、じやまするものもほとんどなく、腰掛けた男の姿が脚まで含めてそこに映っている。

男は、自分自身を見ながら、スカートと裾をちよつと引き下げるようにし、さらに膝頭を合わせたまま足先の位置を変えてみたりした。そして、最終的には、サンダルの足先を揃えて斜め前方に置き、膝から下を傾けるような形で落ち着いた。

その姿態は、女として申し分ない腰掛け方だ。

どうやら、こちらからあれこれ言うまでもなく、この男は、自ら学習していく頭のよさを持ち合わせているようだ。

ねらいどおりだったとはいえ、垣内は、そんな男の様子に満足した。

しかし一方で、この賢さなら、たぶん、垣内がこの店のこの席を選んだ意図もおおよそ感づいているだろうと思つた。

と、案の定、男が小さな声でつぶやいた。

「こんなところじゃあ、とても休めそうもないです」  
「だいじょうぶですよ。あなたはうまくやっている。  
道に行く人たちからも、あなたは、美しい女性に見える  
ているはずですよ」

「……そんな」

男は、ちよつと不服そうな顔をしたが、その顔は、  
かわいらしくすねているようにさえ見えた。

と、そこで、ウエーターが水を持って注文を取りに来た。

「お決まりですか？」

「うーん：：、僕は、カフェ・ラテ」

ウエーターにそう言ったあと、垣内は、男の方を向いてきいた。

「清佳ちゃんは？」

ここは、ちよつとくすぐってやろうと思ったのだ。

いきなりそう呼ばれたことで、男の顔がみるみる紅潮した。そして次には、困ったように目を泳がせた。

ウェイターは男の方を向き、オーダーを待っているのだ。

男は一瞬、垣内に助けを求めると、あきらめたように、ウェイターの方を見上げた。そして、聞こえないぐらいの小声で、しかし、口だけは明確に動かし

て「(同じで)」と言った。

声ははっきり聞かれたくないが、口の形で意を伝えたいと思ったにちがいない。しかも、言ったあと、ウエイターに対し、女性らしく微笑むような表情さえしてみせた。

こんなところも、この男が賢く、順応性の高いところだ。

おかげで、ウエイターも少しの不信感を抱いた様子

もなく、「ラテ二つですね」と手持ちのオーダー端末に注文を入力し、戻って行った。

「……ふふ、たいしたものです。今も、まったく疑われていなかった」

「もう、いい加減にしてくださいよ、いじわるするの  
も」

垣内の言葉に、男はそう言い返してきた。垣内に対する異議申し立てにはちがいないが、その声音に、さ

ほどのとげとげしさはない。ウェイターに対する受け答えがうまくいったことへの安堵感と、さらに言えば、ある種の達成感のようなものも感じたからだろう。

男にも、このゲームの面白味がわかってきたにちがいない。

「いや、申し訳ない。正体を知っている私にも、そうしているあなたは、とても魅力的な女性に見える。だから、ちよつと試してみたくなってしまうたのです」

垣内が言うと、男はさらに不服そうな表情をしながらも、またガラスにちらりと目をやった。そこに映つた自分の姿を、今一度確かめたかつたのだらう。

そこで垣内は、安心させるように、先刻言ったことを繰り返した。

「今ここにいるのは若い女性、それも、まちがいなく美人の部類の女性です。歩道を行く人たちにも、きつとそう見えているはずですよ」

そして、こうつけ加えた。

「あなただつて、そう思うでしょ」

「……」

男は目を伏せ、今度は照れ隠しのような苦笑をしただけでなにも答えなかつた。否定しなかつたことが、男の感じていることを如実に物語っていた。

「……ほら、今通つた男も、あなたの方にちらりと視線を向けていきました」

その言葉に、男は、また上目づかいでガラスの外を見た。

そしてもう一度「もう……」と言っただけで口をつぐんだ。

なにかを考えているようだ。

……こんなに他人の視線が気になるのって、もしかしたら、生まれてはじめてかもしれないな。

清孝はそう思っていた。

それはもちろん、自分が女装などをしているからだろうし、その姿をわざわざ通行人たちの目にさらさすような場所に座っているからだ。

おそらくこの垣内という男は、意図的に僕をそんなシチュエーションに導いて、おたおたするのを見て楽しんでるにちがいない。

そう思うと、垣内に対してはもちろん、そんな垣内

に体よくのせられて、いる自分自身にも腹が立つた。

しかしそんな思いとはべつに、その「他人の視線が気になる」ということに、清孝は、ある種不思議な感覚を抱いていた。

視線が気になる理由は、どうも、女装しているという自分の側の心理的動揺ばかりではない気がする。自分に向けられる他人の視線そのものが、ふだん男として感じるのとは異質なのだ。

……これは、なんなのだろう？

清孝がそんなふうに考えていると、垣内がどこかおかしそうに笑いながらふたたび口を開いた。

「ふふ。さっきも言いましたが、都会人はそんなに他人のことをじろじろ見たりはしないものです。特に、見ず知らずの人とは目を合わせるのを避けます」

どうやら垣内は、今、清孝が考えていた「視線」について語ろうとしているらしい。なんだかますます見

透かされているようでいやな感じがしたが、だからこそ清孝は、その言葉のつづきが気になり、促すように顔を向けた。

「でも、女になって街に出ると、人の視線が、男の時とはずいぶんちがうとを感じるんじゃないですか？」

やはり垣内は、清孝の思っていることを正確に言いあてた。

そのことにちよつと驚いた顔をした清孝に対し、垣

内はさらにこうつづけた。

「人間というのは不思議なもので、意識とは別次元で、気になるものにはつい目がいってしまふものです。特に、男はね」

「……えっ？」

「あなたの顔をじろじろ見たりはしないにしても、男たちは、あなたの胸のあたりや、スカートから出た脚に視線を走らせるでしょう」

：：そう。たしかにそうだ。

先刻、街を歩いていた時から感じていた違和感は、おそらく「男たちの視線」によるものだ。

すれちがいざま、男たちは一瞬——それは、本当に一瞬なのだが——視線を揺らせる。そして、その動きの先は、たしかに清孝の胸や脚に向かっていった。

つい先刻、前の歩道を通りながらこっちをのぞいていった男も、視線をテーブルの下あたり——つまり、

清孝のスカートから出た脚のあたり——に走らせた気がする。

それが、いわば「盗み見る」という感じの一瞬の動きだからこそ——清孝のように見られることを意識し緊張している人間にとっては——よけいに気になるのだ。

そんな視線は、むろん男の時には経験しないものだ。と、そこで垣内は、口調を変えて言った。

「しかしまあ、それは男の本性的なものでね。僕も、それに、たぶんあなた自身だって、よく考えてみれば思い当たることだったりするわけですよ」

それも、たしかにまちがいではないだろう。

男である自分は、ふだん、知らず知らずのうちに、女性に対してそんな視線を送っている気がする。そこには、けっして下心などないのだが：：いや、無意識の部分まで含めれば、多少はあるのかもしれないが：

：。

「お待たせしました」

急に声をかけられ顔を上げると、そこに、先刻のウエイターがトレイを持って立っていた。

清孝と目があつたウエイターは一度うなずいてみせたあと、ふたつのカップのうちひとつを清孝の前に置いた。

その瞬間、清孝は、スーツの襟に手をかけ、それを

軽く胸の前でかき合わせるような仕草をしていた。

そしてそのあと、自分が今したことに気がついて愕然とした。

今、スーツの襟で胸を隠すようにしたのは、前屈みになったウェイターの視線がブラウスのふくらみあたりに走った気がしたからだ。

男の視線を敏感に感じ取り、すかさずそれに反応している自分。

しかもそれは、きわめて自然に出た行為だった。

女装して街に出てまだ三十分とたっていないのに、今、自分は、すっかり「見られる立場」でものを感じているようだ。

そんなふうに加え、今度はもうひとつの「視線」が気になってそちらを見ると、給仕するウエイター越しに垣内が微笑んでいた。

やはり、今の一連の仕草を見ていたにちがいなかつ

た。

そのことへの照れで、清孝はうろたえたように視線をそらした。しかし、それがかえって、女っぽい「恥じらい」という感じになってしまった気もした。

ウェイターが去ると、垣内はさっそくテーブルの上のカップをとり、ひとくち飲んだ。

そして、そのカップを持ったまま、今の清孝の行為に対するコメントとも、先刻の話のつづきともつかない

い言い方で言った。

「男の方はいわば本性に従って無意識に見ているのだとしても、女の方は、その視線を敏感に感じ取っているということなんでしよう、きつと」

清孝は、今の実感としてもそのとおりのだろうと思っただが、それを認めれば、自分が「女」になっただけであることを認めたことになる気がして素直にうなずかず、無言でコーヒーを口に運んだ。

カフェ・ラテのマイルドな味と香りが口に広がり、動揺をつづけている自分の気持ちを多少落ち着かせてくれる気がした。

それで、最初のひとくちをゆっくりと味わったあと、カップを置いた。

と、その白い陶器の縁に口紅がついていた。

それを見て、清孝の心は、けっきよくはまた波立った。

：：今、僕は、「化粧している存在」なのだ。

それをあらためて意識させられたのだ。さらに、そう感じると――

唇にラテの泡が残っていないか：：、口紅ははげっていないか：：？

――と、そんなことにも気がまわり、思わず目の前のガラスに映る自分の顔を確認していた。

「たぶん：：」

そこで、垣内がまた話を継いだ。

「女は、そんな男の視線を単に意識しているというだけじゃなく、どこかで楽しんでいるんでしょうね」

その言葉に見返すと、垣内はさらにつづけた。

「あなたもせっかく女になったのだから、ぜひ、そんな視線を楽しんでください」

「そんな、楽しむだなんて……」

と、そこまで反論しかけ、清孝は言いよどんだ。

「……そんなゆとりはない」と言おうとしたのだが、それでは「ゆとりさえあれば楽しみたいのか」ということになりそうな気がしたのだ。

本来なら、「そんな気味悪いことはしたくない」とでも言うべきだろう。

一瞬そんな逡巡をしたせいで、清孝は言い返すタイミングを失ってしまった。

垣内が、またコーヒーカップを口に運んだからだ。

さらに垣内は、コーヒーの香りをくゆらせるとでもいうように、あごのあたりにカップをとどめたままゆつくりと揺すり、清孝から視線をはずして外の歩道を眺めた。

ひとつピリオドを打って、今の話題は、その最後の結論に落ち着かせたいということらしかった。

当然、それに承伏できない清孝は反論しようとしたが、むきになって言うのも、かえっておかしな勘ぐり

をされるような気がし、それに、むこうを向いてしま  
った垣内に呼びかければ、その声が店内の他の人にも  
とどきそうな気がして、しかたなく口をつぐんだ。

「……」

もどかしい思いをしながら垣内の視線につられ外を  
眺めると、その時また、外に行くひとりの男がこちら  
を見た。

思わず目が合ってしまった、男の方があわてて目をそ

らせたのだが、そらせながらも、その視線は下方へ——つまり清孝の体の線に沿って——動いた。

それを意識したことで、清孝は、自分の背筋あたりになにかむずむずするものが走ったのを感じた。

道行く男からまるで値踏みするような視線を受けたことでの悪寒……ともいえたが、悪寒というほどの嫌悪感はない。

それは、清孝を見たあとの男の表情に悪感情が混じ

つていなかっただからだ。いや、その顔つきは、ちよつとにんまりするような、それでいて、「もつとしつかり見たかったのに」という気持ちが表れた、どこか残念そうなものですらあった。

清孝が、そんな相手の反応と、それによって引き起こされた自分の感覚に驚いていると、また視線を感じた。

今度は、さっきの男とは反対方向からやってきて店

の前を通った管理職ふうの中年男だ。そして、この男もまた、先刻の男と同様の反応をした。

さらに、その男の三人ほど後ろを歩くふたり連れの男たちも、同じように視線を向けてきた。そのうちのひとり、他の男たちのように一瞬見るといふのではなく、歩きながらこちらを目で追うという感じだった。そのまなざしも——けっして奇異なものを見るといふのではなく——好意的といつていい興味の表れたもの

だった。

そんなふうを意識していると、同様の視線はさらにつづいた。

もちろん、すべての男たちがそうしてくるわけではないが、ほんの一瞬目を動かす者まで加えれば、店のそばを歩く男の四人に一人はこちらを見てくる気がする。

そんな男たちの表情を観察しながら、清孝は時々、

ガラスに映った自分の姿を確認し、おかしなところがないか点検した。それに納得すると、ふたたび、前の道を行く人々に目を移した。

そのうち、そんな視線にも慣れてきて、次々にやってくる人を見ながら、この人は見るにちがいないなどと予測するようになった。

そして、その予測がはずれたりすると、ちよつと物足りなさのようなものさえ感じた。

垣内がすでに向き直って見ているというのに、男はそれにも気づかず、店の外に目を向け、人々の反応をうかがっていた。

さつき垣内が言ったとおり、この状況を楽しみはじめていることはまちがいない。

視線を送ってくる人々との間に——透明なガラスとはいえ——バリアがあることが、男がそれを安心して

楽しめる条件をつくっているのだ。そういう意味でも、この店はうってつけの道具立てなのだ。

もちろん男は、道行く人や垣内にそんな自分の内心を覚られたくはないのだろう。一生懸命とりすまして顔をつくっている。しかし、そんなふうにすましてみせることは、逆に、表情から、ふてぶてしい男っぽさのようなものを消していく。

ふふ：：、いよいよ女の顔になってきたぞ。

垣内は秘かにほくそ笑んだ。

男が時折、ガラスに映る自分の姿を見て居ずまいを正すごとに、その表情や雰囲気に女っぽい「やわらかさ」といったものも加わってくるようだ。

たとえば今しがたなど、前を通った男を目で追ったせいで、ウイツグのサイドの髪がいく筋か顔にかかった。それが気になったらしく、やはりガラスに投影した自分を見ながら直したのだが、その薬指だけを折り

曲げて髪を耳にかける仕草など、すでに堂に入ったもののなのだ。

そんな男の様子を見ながら、垣内は、自分自身の認識としても、もうこの男のことを「男」としてではなく、「女」として、つまり「清佳」としてとらえてもいいだろうと考えた。

そして、男——清佳に声をかけた。

「さて、と……、これから、どうしましょうか？」

「……えっ？」

清佳は、夢から覚めたという感じでこちらを見た。

その表情には、まるで少女のようなあどけなささえ感じられた。

「もう少し、街を歩きますか？」

からになったコーヒークップをソーサーに戻しながら、垣内はきいた。

「あっ……ええ、でも……」

やっと現実に取り戻された清佳は、言葉を切るごとに声音を変化させながら言った。

「……もう、これくらいで……戻りましょう」

消えていた男の顔つきが、若干戻ってきてもいた。

ここは、あまり、考える余裕を与えない方がいいだろう。

そう感じた垣内は、清佳の言葉にかぶせるように言った。

「お腹、すきませんか？」

「……え？」

「おたがい、最前から飲みものばかりで、なにも口に入れてませんからね」

「え……ええ、でも……」

「食事をご一緒しませんか？ いや、もしかすると、

家に帰って食べなければまずいのかな？」

「あつ、いえ、そんなことは……」

「それなら……」

垣内はそう言いながら、すかさず、持っていたサイドバッグから携帯電話を取り出した。

驚いて見ている清佳をしり目に、メモリーから目的の店を選び出し、通話ボタンを押す。

耳に当てると、呼び出し音が二回鳴ったところで相手が出た。

「はい、アプローズでございます」

「垣内ですが」

「あつ、はい。いつもありがとうございます」

「今日、これからおじやましたいと思うのですが、席はだいじょうぶですか？」

「はい、いつもどおりお二人様でよろしゅうございませぬね？」

「ええ」

「ご用意させていただきます」

「そうだな……、三十分ほどあとに」

「はい、かしこまりました。お待ちいたしております」  
なじみのマネージャーの受け答えに——それにしても「いつもどおりお二人様」はないだろうと思ひながらも——満足し、垣内は携帯を切った。

そして、面食らったようにこちらを見ている清佳に言った。

「リザーブ、できました」

「……え、ええ……で、でも……」

「なかなかうまい店でね。気に入ってもらえらうれしいんですが」

そう言いながらテーブルの上の伝票を取り、席を立つ。

いささか強引な展開に驚いているのだろう。清佳は、椅子に腰掛けたまま、まだ半分ほど残っているコーヒークップに目をやったりしていたが、そばに立って待

っている垣内の顔を見上げたあと、膝の上に置いていたバッグを持ち立ち上がった。

まだ納得していないという顔の清佳に、ジエスチャ―で先に行けと促し、垣内はそれにつづいて入口横のレジへと向かった。

垣内が清算している間、その後ろで、清佳は所在なげに立っていたが、ちょうどそこへ新たな客――若い男女のカップルが入ってきた。

ウエイターが釣り銭を数えるのを待ちながら垣内がうかがい見ると、カップルの女の方と目があつたらしく、清佳は、あわてて開いていた足をそろえ、背筋を伸ばした。

明るい店内で、至近距離から女性に見られ、見破られはしまいかと緊張したにちがいない。

しかし、どうやら、清佳はそんな「同性」の目をも難なくパスできたようだ。釣りを受け取って振り返つ

た時には、小首を傾げた女っぽい微笑で、そのカップルを見送っていた。

そればかりか、垣内が開けたガラスドアをくぐる時には、左腕を肘のところまで曲げ、バッグの持ち手をその手に通して、下腕にかけるような持ち方に変えていた。先刻ここに来るまでは、ただ持ち手を握ってぶら下げていたのだが、今の女のバッグの持ち方を見て、そうした方がより女らしいことに気がついたのだら

う。

この店の窓際の席でたくさん視線を浴び、その面白さを知って、積極的に女を演ろうという気持ちになつてゐることはまちがひなかつた。

Friday

9:30pm

ブ  
テ  
ィ  
ツ  
ク  
「  
ア  
ル  
タ  
ー  
エ  
ゴ  
」

ふたたび垣内と並んで街を行きながら、清孝は、自分の感覚が、先刻歩いた時とはずいぶんちがっていることに気がついた。

すれちがう人たちの視線が気になることに変わりはないが、その気になり方がさつきとは異なるのだ。

さつきまでは、こんな姿を人に見られることそのものをいやだと思っていた。だから、すれちがう人の顔から視線をはずし、直視しないようにしていた。

ところが今は、自分がちゃんと女として見られていくかどうか——あの「ターニングポイント」という店で聞いた言葉を使うなら、「パス」できているかどうかどう

か——が気になつてゐる。むしろ、相手の顔をうかがい、その表情の変化を読みとろうとしていた。

実際、注意深く観察していると、すれちがう人の多くはちらりとこちらに視線を走らせる。そしてその後、何事もなかつたようにすれちがう。

それはつまり、清孝が、立派にパスしてゐるということだろう。

「女装している」という自分の側の恥ずかしささえ

度外視すれば——というか、開き直ってしまえば——、これは想像以上に面白いことだった。

相手はこちらの正体にまったく気づいていない。なのに、こちら側からは、そんな相手がよく見えているのである。なんだか自分が、優位な立場に立って世の中を見ているような気がした。

ことに、例の「男たちの視線」——それは、喫茶店の時よりずっと確率が高くなっていた——を感じた時

には、そんな気分は増す。

こちらの存在に気づくと、男たちは、顔、胸、脚という順番に、さっと目を走らせる。おそらく本人たちはさほど意識せずやっていることなのにちがいない。だから、そのあとは、平然とした顔で近づいてくる。もちろん清孝の側も、それに気づいたことはお首にも出さずにすれちがう。でも、こちらは、そんな相手の無意識の部分までしっかり見透かしているのだ。そう

思うと、すれちがう瞬間、一種の勝利感のようなものを感ずるのである。

相手がまったくこちらを向かずに通り過ぎたりすると、かえって物足りない気さえする。

そんな心境の変化はまた、当然、清孝の見かけにも反映していた。

うなだれることなく前方を見て歩くことで、胸を張り肩を後ろに引く感じになった。背筋が伸び上半身が

ぶれないおかげで、下半身も安定し、高いヒールにも膝が曲がらずに足が出た。しかも、スカートの裾を意識することで、出した足が内側寄りになり、一直線上を歩いている感じになる。そして、そんなふうには足を送ると、自然に腰を左右に振るような歩き方にもなるのだ。

肘を曲げ、ハンドバッグをかけた左手は、当初、軽く握って胸のあたりに添えるようにしていたのだが、

そんなふうには上体を開く姿勢をとって歩いていると、これも自然に、体の外側に向かって開く形になった。

肘は体につけたまま手の先は外側を向くという、男の時には絶対にしない腕の形だ。

さらに、胸を張っているということは、上着からのぞくブラウスのふくらみも目立つということだった。

中のシリコーンパッドが歩調に合わせて揺れることとも相まって、男の目がそこに向けられた時はちよつと

恥ずかしい気がするのだが、そんな恥ずかしさをこらえてとりすました顔を装うことが、清孝の気分をさらに高めることにもなっていた。

ふと気がつくとき、並んで歩いていた垣内が、ちらりとこちらを見た。

喫茶店を出て以来、どうしたわけか、垣内はほとんどしゃべってこない。今のように、時折、こちらをうかがう感じの視線を送っては来るが、最前までのよう

に話しかけようとはしないのだ。

もしかすると垣内は、清孝がこの状況を——先刻の垣内の言葉どおり——「楽しんで」いるのを見て、面白がっているのかもしれない。いわば、垣内の思うつぼにはまっているわけで、それには少なからず反発を感じるが、かといって、そんな反発で、この奇妙な「樂しみ」をご破算にしてしまうのも惜しい気がした。

それにしても……。

無言のままふたたび前を向いた垣内を見やりながら、清孝は思った。

……この人は、こうやって、三十分歩こうというのだろうか？

先刻、これから行くというレストランかなにかに電話した時、垣内は「三十分ほどあとに」と言ったはずだ。

それを聞いて清孝は、その店まではそれなりに距離

があるのだらうと思った。そして、そうである以上、おそらくはタクシーでも拾うつもりだらうと考えていたのだ。

ところが垣内は、そんな様子も見せず、歩道を歩いていく。

いったいどこに行こうとしているのだらう……？

清孝がそんな疑問を巡らせている時、突然、垣内が「あつ」と言って立ち止まった。

「……しまったあ」

なにか重大なことを思い出したという感じだ。

「……どうか、したんですか？」

「あ、いや。じつは、今から行く店、フォーマルな格好じゃないと入れてくれないんですよ。料理が上等なぶん、あれこれうるさいことを言うんです。少なくとも男は、ネクタイをしていないといけない。僕は今日、ノーネクタイだったことを、すっかり忘れてました」

「はあ……」

困った顔をしている垣内にどう返事したらいいのか  
わからず、清孝は曖昧にうなずいた。だいいち、これ  
から行くのが、そんな格式の高い店だということ自体  
に、少なからず驚いていた。

「どうしたのか……。ネクタイを買いにしても、こ  
の時間だと、開いている洋服屋なんてないだろうし：  
」

「……」

立ち止まって考え込んでしまった垣内のそばで、清孝は、ただたたずんでいることしかできなかつた。

と、そこで、垣内がなにか思いついたように言った。

「そうだ、あそこなら……。寄り道になつて申し訳ないけれど、ちよつとつき合つてもらえますか？」

「え？ ……ええ」

他にどう返事するわけにもいかず、清孝がうなづく

と、垣内は向きを変え、今来た道を引き返しはじめた。

少しあざといかなと思ったが、今、垣内が打った芝居を、清佳は素直に信じたようだ。先刻よりはずっとこなれた女らしい足どりで、ついてきていた。

しかしまだ、どこか不可解そうな表情を浮かべている。安心させるためにも、説明しておいた方がいいだろう。

「たしか、この筋だったと思うけれど……」

あたかも今思いついたのだという芝居をつづけながら、垣内はすぐ次の角をまがった。

「……いえね、この先に、深夜まで開いているファッションビルがあるんですよ。たぶん、このあたりのクラブやバーで働いている人を客筋にしているからなんでしょうね。まあ、そんなところだから、あまり品のよいものはないかもしれないけれど、ネクタイくらい

なんとかなるでしょう」

裏通りと言つてよいその道はやはり飲屋街で、細くて丈の高いビルが並び、壁面から店の名を書いた看板がいくつもつき出ている。

しかし、一ブロック行ったあたりからは、そんなビルがまばらになり、ゲームセンターだとかレンタルビデオショップ、あるいはコンビニなどが軒を連ねる街区になる。たいていの店が、まだ煌々と明かりが灯り、

人が出入りしていた。

「ほら、やっぱり開いていました」

そんな店舗の並びにある五階建てのビルを示しながら、垣内は言った。

上階の方は事務所仕様になっているらしく窓は暗いのだが、店舗の入る三階までは窓から明かりが漏れている。ことに、派手な色とデザインの婦人服が並ぶ道沿いのショーウィンドウは、周囲の道に光を投げかけ

ていた。

ビルの入口にたどり着いたところで、垣内はまた清佳を先に立たせ、自動ドアを通った。一階には、正面奥にあるエレベーターまでの通路をはさむ形で、三軒の店がある。

通路の片側は、外のショーウィンドウからも見えていたレディスショップがすべてを占領し、反対側には、革衣料や毛皮のショップと、メンズショップが並ぶ。

このメンズの店が、三つの中ではいちばん小さい。

垣内は、その店の前まで行くと、清佳に「ちよつと、待っててくれますか？」と言った。

女装姿でひとり取り残されるのは不安なのだろう。

清佳は一瞬、心細そうな顔をしたが、そのメンズショップの店内をちらりと見てからうなずいた。店の雰囲気——特に女装姿では——入りにくい感じがしたからにちがいない。

店頭に並べられている男物の服はそれなりに高級なのだが、いかにも尋常でない感じが漂う。やたらキザつぽさを強調したようなデザインが多いのだ。おそろくは、接客業の男たち——たとえばホストとか——を得意客にしているからだろう。

清佳を残し店内に入っていくと、案の定、紙袋を持ったホストらしい男が出て行くところだった。勘定は、連れの着飾った中年女が払っていたようだから、同伴

出勤の途中、服をねだったということか。

この店を何度も利用したことのある垣内は、すぐにネクタイの吊されたコーナーに行き、そこで振り向いて、店頭の清佳の様子をうかがった。

と、今出て行ったホストの男と目が合ったらしく、清佳は一瞬、体をこわばらせた。周囲の視線に対し、よりいっそう敏感になっていることは確かなようだ。

しかし、次の瞬間、清佳はさらに厳しい視線にさら

されることになった。

連れの中年女がそんな男のそぶりに気づいたらしく、組んでいた腕を引っ張りながら、一瞥をくれたのだ。

おそらく敵愾心に燃えてにらみつけるといふ視線だったにちがいない。それにたじろいだらしく、清佳は向かいの店の方へ体ごと向きを変えてしまった。

そんな清佳の様子を見てほくそ笑んだ垣内は、目の

前のネクタイの中から、手早く一本を選んだ。くすんだブルーだから、今着ているグレイ系の取り合わせには合うだろう。

「これを、いただけますか」

店員を呼び、いったんそのネクタイを渡した。

「ありがとうございます」

「そのまましていきますから、包まなくてけっこうです」

「はい、かしこまりました」

どうやら店員はそう言われるのがわかっていたよう  
で、ネクタイに付いていたタグを手早く取るとすぐに  
返してくれた。そこで、垣内も持っていたサイドバッ  
グからカードを出し、渡した。

「少々、お待ちください」

店員が奥に引っ込んでいる間に、垣内は、買ったばかりのネクタイをさっそくシャツの襟に通した。そし

て、それを締めながら、ふたたび店の外に目をやる。

清佳は、先刻向きを変えた後ろ姿のまま、向かい側のレディスショップを眺めていた。あんな格好では、その方が自然だと考えてのことにちがいない。

必要以上に明るい照明が灯る向かいの店は、通路との間が、表のショーウィンドウからつづくガラス張りで区切られ、その中央あたりに「alter ego」と店名の入った入口があった。店内にディスプレイされて

いる服は、若向きなのだが、場所柄からかけっしてカ  
ジュアルとは言えない「夜の遊び着」という感じの品  
揃えだ。ちようど清佳の立つ前あたりの店内には、ち  
よつとしたアクセサリーのコーナーもある。

「お待たせいたしました」

そばにあつた鏡で襟元をたしかめていると店員が戻  
つてきた。垣内は、差し出された清算書にサインし、  
カードを受け取った。

「いつもありがとうございます」

ときどき寄ってはネクタイだけを買っていく自分のことを、この店員はなんと思っているのだろうか？

そう考えてちよつと苦笑しながら、垣内は店を出た。

そして、清佳の背後に近づいた。

「あなたも、なにか買いますか？」

「……えっ!？」

垣内が思っていたより早く出てきたせいもあつたの

だろう。驚いた顔で振り向いた清佳は、すぐに垣内の襟元を見た。

「ふふ……、どうです、おかしくありませんか？」

垣内がそうきくと、清佳は、ちよつと照れたように「……え、ええ。よくお似合いです」と答えた。

それで垣内は、先刻かけた言葉のつづきというように言った。

「あなたもなにか欲しいものがあるなら、遠慮はいり

ませんよ」

「……え？」

清佳は、なぜそんなことを言うのかという顔で見返してきた。

「だって、今、そっちの店を熱心に見ていたようだから」

「……あ、いえ、そういうことじゃあ……」

その否定の言葉を遮るように、垣内は、清佳の全身

に目を走らせながら言った。

「……うむ、たしかに」

「……？」

「これから行く店、あなたの方はスーツでなんの問題もないわけですが、これじゃあ、いかにも勤め帰りのOLって感じだ。どうせなら、もつとゴージャスに着飾った方がいいかもしれませんか」

垣内が自然な感じでそう提案したことに、答える言

葉が見つからないのだろう。清佳は、あ然とした顔をした。

そこで垣内は、さらにこうつぶけた。

「ここまでむりやりつき合わせているんです。むろん、僕がプレゼントします」

「そ、そんな……」

垣内の言葉に、清孝はあせって言った。

男である自分が女物の服をプレゼントされても、それをいっただいどうしろと言うのだ。始末に困るだけではないか。

そう反論しようと思ったのだ。

しかし、そこで言葉が出てこなくなった。

垣内が「さあ」と言いながら、清孝の背中に手をかけ、押すようにしたからだ。

えっ：：！?

その瞬間、なぜか、清孝の全神経が背中に向かつて集中した。そして、その神経を伝い、しびれるような感覚が全身を走った。

なに：：、これ：：？

自分の体のそんな反応に、清孝自身が驚いた。

な、なんで：：？

その驚きのせいで、清孝は、垣内に押されるまま、その「アルターエゴ」という店の入口をくぐっていた。

これって、もしかして……。

店内に入り、垣内の手が離れたことで、やっと少し平生を取り戻した清孝は、その理由らしきものに思い至った。

……周りの目を意識しつづけてたせいで、体の感覚が敏感になってる……ってこと？

自分でも信じられない気がしたが、そうとしか考えられなかった。

「いらっしやいませ」

気がつくのと、二十代半ばくらいの女性販売員が目の前に立っていた。

背中に感じた緊張からやっと解き放たれたのに、清孝は、今度はその販売員に対して神経を使わなければいけなくなった。

「これからいっしよに食事に行くのだけれど、その前に、彼女に服をプレゼントしようと思ってね。似合い

「そんな服をコーディネートしてあげてください」

「ありがとうございます」

垣内の言葉に笑顔でうなずいた販売員は、つづいて清孝の方に目を向けた。

「どんなのが、お好みかしら？」

「……」

そうきかれても、どう答えたらいいか、わかるはずもない。それにだいいち、声を出せば正体をさらすこ

とになる。

清孝が目を泳がせておたおたしていると、販売員の女性は、さらに首を傾げるようにして、表情をのぞき込んできた。

ど、どうしよう……？

と、そこでまた、垣内が助け船を出すように言った。

「そうですね、それなりに品がよくて、でも、彼女のかわいらしさを際立たせるようなものを。あとは、あ

「あなたのセンスにおまかせします」

「……は、はい……」

販売員は、その清孝と垣内の対応に一瞬いぶかしそうな顔をしたが、すぐにまた笑顔をつくった。

あれこれ詮索して、どうやら上客らしい相手の気分を損ねない方がいい……と、そう思ったにちがいない。

「そうですね……」

独り言のようにつぶやきながら、販売員は、ふたた

び清孝の全身に目を這わせた。

さつきまで街で受けたのとはまたちがうその視線に、当然ながら清孝は緊張した。

「……ヒップから脚の線がすらりとおきれいでらつしやるから、かわいらしさを出すなら、もう少し短めのスカートの方がいいかもしれませんね」

うなずきながらそう口にした販売員は、清孝に「こちらへ」というようなジェスチャーをした。

しかたなく指し示された方に歩いていくと、色とりどりのワンピースが吊されたハンガーラックの前まで案内された。

「この時間からお食事にいらっしやるんだとすると、上品といっても、かっちりしたものより、お洒落な感じの方がいいでしょ」

そう笑顔を向けられ、どぎまぎした清孝は、あいまいにうなずいた。

「お顔立ちがはつきりしてらっしやるから、柄物とか  
じやない方がお似合いよね」

ごく自然な感じでハンガーラックの商品を物色しは  
じめた販売員を見ながら、清孝は、そのことにかえつ  
て不安を抱いた。

相手は、なんと言っても婦人服の販売員だ。先刻の  
様子などを見ても、体型などに対する観察眼は鋭いに  
ちがいない。しかも、こんな明るい店内で至近距離か

から見られているのである。もしかすると、男であることなど、とうの昔に感づかれているのかもしれないなかつた。

そして、たとえばそうだとすても——先刻、清孝の対応に一瞬戸惑いながらもすぐにその表情を引つ込めたように——、商売のことを考え、なに食わぬ顔も装えるのだろうか。彼女が見せている「自然な接客態度」は、けっして「パスしている」という証拠にはならないの

だ。

と、そこで、その販売員がひとつのハンガーをはずした。

「たとえば、こんなベロアとか……」

そのハンガーに掛かっているのは、赤のワンピースだった。

清孝が今着ているスーツと同じくらいの七分袖。生地の種類を言ったららしい店員の言葉の意味はわからな

かったが、よく見ると表面が細かく毛羽立っている。しかし、その毛自体に光沢があるのだろう。やわらかそうな生地の流れに沿って微妙に光を反射し、デザインそのものはシンプルなのに、きらびやかな印象がある。広い襟ぐりについた同じ赤のファーも、そんな印象を強めていた。丈は、ハンガーにかかっているのによくわからないが、今はいているスカートよりずいぶん短い気がする。

こんな赤くて派手な服なんて……。

清孝がおたおたしながらその服を見てみると、彼女は、もう一方の手でさらにハンガーラックの服を送るようにながら、もう一着はずした。

「それとも、思い切って、こんな感じでも……」

こちらは、濃いピンクのミニドレスという様相の服だった。キャミソールドレスというのだろうか、ハンガーに掛かる部分は肩ひもだけで吊られている。そし

て、その下のバストのあたりは細かいひだ飾りが何段にもつけられている。

そ、そんな……。

へたをすればアイドルのステージ衣装にさえ見えるそのデザインに、清孝はたじろいだ。

「この季節、外を歩くにはちよつと涼しすぎるかもしれないけど、これだったら、今着ていらつしやるスーツのジャケットを上から羽織っても、そんなにおか

しくありませんし」

二つの服を両手で吊し持つて見せながら、販売員は清孝にまた笑いかけてきた。やはりその内心はうかがい知れないが、少なくとも表面的には、からかっている様子はない。本気で、このどちらかをすすめているらしい。

答えを待っているというように見えてくるその視線に、清孝がさらに困惑した顔をしていると、販売員の

方から「ちよつと色目が派手すぎます？」ときいてきた。

その言葉に救われた思いがし、清孝はあわててうなずいた。すると、彼女はこうつけ加えた。

「でも、お連れ様が 그레이 でシツクにまとめてらっしゃいますから、やはり女性の側は赤系統の方が映えるかと思ひまして。いかがでしょう？」

販売員は、その最後の問いを、清孝にではなく、さ

らに背後に向けて発した。

「ええ、どちらにも彼女に似合うと思います」

いつの間にか清孝の後ろに立っていた垣内が答えた。

販売員は、その言葉に納得したようにうなずいてから、ふたたび清孝に目を戻した。

言葉には出さなかったが、「お連れ様もこうおっしゃっていますし……」という感じのまなざしだ。

ふたたび返事に困って、清孝が目を泳がすと、販売員がまた問いかけた。

「よろしかったら、試着なさいます？」

「……えっ」

いきなり言われたせいで、驚きがかすかな声になって出た。

その声を聞かれたのではないかと、清孝はさらに動揺した。

と、背後から垣内が言った。

「清佳、そうさせてもらったら」

またいきなり、人前で「清佳」などと呼ばれたことで——しかも、今度は呼び捨てされたことで——、さらに動揺を重ね、清孝が焦って振り向くと、垣内は穏やかな微笑みとともにうなずいてみせた。

そのいとも平然とした表情を見て、清孝は、どうやら自分は、この流れに乗るしかないのだと悟った。

垣内は、当然すべてを承知した上で、「若い恋人に服をプレゼントする男」を演じている。販売員の方は、それを真に受けているのかどうか、本当のところはよくわからない。しかし、考えてみれば、それはけっきよく、どちらにしても同じことなのだ。

もし彼女が、清孝のことを本物の若い女性だと思っているのなら、清孝が反発して言葉を発すれば正体を露呈することになる。一方、もし彼女が、垣内同様、

すべて承知の上で調子を合わせているのだとしたら、それをぶちこわせば、なおさら気まずい結果しか招かないはずだ。

いずれにしても——今現在、すでにこんな格好をしている以上——、そこで恥ずかしい思いをするのは清孝自身なのである。

ここは、開き直って、僕自身もこの芝居を演じ通すほかない。

そう覚悟を決めた清孝は、販売員の方に向き直り、うなずいた。

と、彼女はすぐに「こちらへ」と、店の一角へと導いた。

壁をくりぬいたようにつくられた試着室の前まで来ると、販売員は、手に持っていた二着分のハンガーを、中の壁につけられたフックにかけた。そして、「どうぞ」と言った。

中に入るとすぐ仕切りのカーテンが閉められ、そこで一人になった清孝は、しばらく目の前の鏡を見つめたまま呆然としていた。もちろん——ふだん男物を買う時、試着室を使ったことなど何度もあるのだから——、場所自体に戸惑ったわけではない。

その鏡に映った姿が、あまりにも自然だったからだ。「ターニングポイント」の着替室で姿見を見た時より、あの喫茶店のガラスに映った姿を見た時より、さらに

「女」になっている気がする。レデイスショップの試着室にすることが、なんの不思議もない感じなのだ。

これなら……、あの販売員は、疑っていないのかも  
しれない。

そんな気がした。

少し安心して、目を下に移すと、鏡越しに、カーテンの下からその販売員の靴がのぞいていた。試着室の前で待っているようだ。

着替えにあまり時間をかけるのも不自然だろう。

そう思った清孝は、あわててスーツの上着を脱ぎ、つづけてスカートとファスナーを下げ足もとから抜き取った。ブラウスのリボンをほどいたあと、ボタンをはずす時には、合わせが逆なのとボタン自体が小さいのに慣れず、ちよつと手間取ったが、それでもなんとかその作業を終え、袖から腕をぬいた。

鏡の中には、ブラジャーとパンティとストッキング

姿の自分がいた。

最初にこれらをつけた時ほどの動揺はなかったが、そんな姿を見ているのは、やはり落ち着かない。

と、そこで――

「あの、ちよつとすみません」

カーテンの向こうから垣内の声が聞こえた。

「はい……」

返事とともに、カーテンの下に見えていた販売員の

足が消え、ヒールの音が遠ざかっていった。

どうやら、垣内に呼ばれたらしい。

「……これを、見せてくれませんか？」

また、少し離れた場所で垣内の声が言った。

……他になにかを買おうとでもいうのだろうか？

首を傾げながらふたたび鏡に目を戻すと、その中で清孝は、両腕を胸の前で交差させて立っていた。今の垣内の声に驚いたことで、思わずブラを隠していたら

しい。

自分がそんな動作をしていたことにもさらに落ち着かなさが募り、清孝は、早くアウターを着て下着姿を隠したいと感じた。

それで、壁に掛けられた二着のワンピースを見た。

やっぱり両方着てみなければいけないんだろうか：

：

そう考えながら二着を見比べていて、清孝はあるこ

とに気がついた。

：：あつ、でも、こっちの服：：キヤミソールの方は、そもそも無理なんだ。

ふたたび鏡に目をもどし、肩のあたりを見やった。

そこには、ブラジャーのストラップがかかっている。

この服では、これがまる見えになってしまふだろう。

：：いや、待てよ。

そこで今度は、あることを思いだした。

以前、夏場にどこかへ出かけようとしていた時、着替え中の妻が、ブラをつける前に、ストラップをとりはずしているのを見たことがある。

もしかしたら、これも……？

そう思って、ブラカップの上の部分をつまみ、めくるようにしてのぞき込んだ。と、やはり、ストラップの先についたフック型の留め具が、カップの側のループにはめこまれていた。おそらく、バックもそうなつ

ているのだらう。この留めをはずせば、ストラップレスにもなるのだ。

：：ふーん、キャミソールも、着られないわけじゃないんだ。

そこで目を上げ――

：：あ！

清孝は、けつきよくはそれが無理なことがわかった。ブラジャーの端をつまんだ手の肘が上がって、腋の

下が鏡に映っていた。そこに、腋毛がのぞいていたのだ。

ストッキングを履いただけです。ね毛がわからなくなるくらいに体毛が薄いたちの清孝だったが、腋毛は、それとわかるくらいには生えている。腋が見える服を着ながら、それを処理していない女性というのは、やはりおかしいだろう。

そこまで考えて、けっきよく清孝は、赤の七分袖の

ワンピースの方をとった。

ハンガーからはずして、それを頭からかぶる。

ウイッグがひっかかるのではないかと思ったが、その生地は、見た目以上に伸縮性があるようだ。

両袖に腕を通し、胸のところまで引っかかった服全体を伸ばすように下ろす。

思ったとおり、その裾は、さっきまではいていたスカートよりずいぶん短い。太股の真ん中あたりまでし

かないのだ。ひざ上二十センチというところだろうか。

しかも、伸縮性のある生地のおかげで、胸からその裾まで、体にぴったりと貼りついているような着心地だ。

襟の中に入ったままになっていたウィッグの髪を両手でまとめ、後ろに跳ね上げながら鏡を見ると、やはり、さつきまでストレートでシンプルに見えた服のデザインが、清孝の体の輪郭に沿って形を変えている。

赤いファーがモールのようにとりまいて鎖骨のあたりまで開いた襟ぐりから始まって、ふくらんだ胸、ウエスト、ヒップまでの線がモロに出てしまっていた。

これは……、よほど姿勢に気をつけていないとやばいぞ。

清孝は、そう思いながら、お腹を引っ込め、さらに、さつき街を歩きながら修得した姿勢をとってみた。

ヒップのポリウムとかは貧弱な気がしたし、バス

トの下あたりの肋骨の出っ張りが気になったが、それでも、全体のイメージは立派に「若い女性」に見えた。

特に、ヒップからつづくすらりと伸びた脚は、さつきまでのスーツのスカートよりずっと魅力的な気がした。

でも……。

その服の、いやが上にも目を引く真っ赤な色や裾の短さは、やはり恥ずかしい。販売員や垣内に見られる

ことすら抵抗を感じた。

清孝がそう思ってたためらっていると、少し離れた位置で聞こえていた二人の会話がやみ、販売員のヒールの音が近づいてきた。

「よろしいですか？」

販売員の声に観念したように、清孝は向き直った。

おずおずという感じで開いた試着室のカーテンの向

こうに、真つ赤なワンピースの清佳が立っていた。

その姿を見て、垣内は息を呑んだ。

服の色が反射してもいるのだらう、うつむいた頬が赤く染まっていた。

生地が光をたたえているせいだろうか、胸のふくらみが大きさとやわらかさを増したように見えた。

生来のものであるらしい細いウエストは、ぴったりと貼りついた服がその輪郭をはっきりさせたことで、

逆に本来の性を隠す役割を果たしていた。

そしてなにより、短いスカートから形よく伸びた脚が、女としてのセクシーさ、いや、並の女以上のセクシーさを醸し出していた。

「すつごくお似合いです」

言葉を失っている垣内の代わりに、販売員が感心したように言った。

じつは、この販売員と垣内は、今日が初めてではな

い。この店で何度も顔を合わせている。しかし、おそらくこちらの意図がわかっているからだろう。いつ来ても初めてという顔をしてくれる。

さらに、この店は、ニューハーフの客なども多いからだろう。たとえば垣内が連れている人物の奇妙さに気がついていても、そんなことはお首にも出さずに「女性客」として扱ってくれる。

それで、いつもここを利用するのだが、今の彼女の

声は、そんなこれまでの対応では聞いたことのない、本心からの感嘆だった気がする。

そういえばさつきも、いつもは見せない不可解そうな表情をした瞬間があった。あれは、清佳が本物の女性なのか、それともいつも垣内が連れてくるような「女性」なのか、戸惑ったからにちがいない。プロの女装者を見慣れているはずの彼女の目からも、清佳の正体は見破りにくいのだ。

垣内が、清佳を見つめながらそんなことを考えていると、その販売員が声をかけてきた。

「いかがですか？」

「うむ、さつきまでより、だんぜん女らしい」

一瞬、垣内の方を見た清佳は、その言葉に、また恥ずかしそうに目を伏せた。

「ほんとうに」

清佳の代わりに、また販売員がそう答えた。そして、

清佳の方に向き直り、「じゃ、もう一着も着てみましようか」と言った。

すると、清佳はあせったように手をふり、カーテンを閉めかけた販売員を制した。

販売員が顔を見ると、清佳は、先刻の喫茶店の時と同様に、聞き取れないほど小さくかすれた声で、しかし、口だけは大きく開いて、「(これにします)」と言った。

「……そう……ですか？」

販売員は、そう聞き返しながら、垣内の方を振り返った。金を出すのは垣内なのだから、了解を取っておこうということにちがいない。

垣内は、キャミソールドレスを着たところも見てみたい気がしたが、おそらく清佳は腋毛のこととかを気にしたにちがいないと思い、うなずき返した。

「じゃ、それを。彼女には、そのまま着ていってもら

いますから」

「それなら、着てらした服の方をお包みしておきますね」

販売員は、そう言いながら、試着室の床にまとめられていたスーツとブラウスを拾い上げた。

そのあと、もう一着のキャミドレスを壁からはずす販売員のじやまになると思ったのだろう。清佳は、短スカートを気にする様子を見せながら試着室を出て

きた。

販売員が試着室を出るのを待って、ふたたび垣内は彼女に声をかけた。

「じゃあ、さっきのものを、お願いします」

「あ、はい、かしこまりました。こちらへ」

はずした服などをかかえた販売員は、小走りにカウンターのところまで行き、奥へまわりこんだ。

垣内と販売員の今の会話にちよつといぶかしげな顔

をした清佳を目で促し、二人でそのカウンターに近づいていくと、販売員は、清佳の前に小さなトレーを差し出した。

「こちらでございます」

その上によっているのは、先刻、清佳が着替えている間に選んでおいたパールのネックレスとイヤリングだ。

それを見て、清佳はさらにわけがわからないという

顔をした。

「気に入ってもらえましたか。その服にはちょうどいいでしょう」

やっと意味を理解したようで、清佳は目を丸くした。

「つけてあげましょう」

ネックレスを取り上げながら垣内が言うと、清佳は今度は戸惑ったように目を泳がせた。

と、販売員がカウンターのの上に楕円形の鏡をセット

してくれた。

「こちらでどうぞ」

清佳はまだ困惑気味だったが、その販売員の目も気にしたようで、おずおずと鏡に顔が映る位置に移動した。

その後ろに立った垣内は、まるで抱くように左右から腕をまわした。

それに気づき、清佳の全身が緊張するのがわかった。

開いたネックレスの両端を持って、それを清佳の首に近づけていく。

「ちよつと髪を上げてください」

垣内が言うのと、清佳は、一瞬の戸惑いのあと、両手で髪をまとめ、それを持ち上げるようにした。ウイツグがずれないように気を使ってもいるようだ。

ネックレスの留め金を留める時、垣内の手が清佳のうなじに触れた。

と、清佳の体がびくりと震えた。

それを見た垣内は、あえて清佳の耳に口を寄せ言った。

「イヤリングの方は僕がやるのもおかしいですから、あなた自身でつけてください。フックのねじを調節するのはわかりますね」

清佳は、垣内が販売員に聞こえないようにそうしたと理解したのだらうが、その耳たぶに息を吹きかける

ようなささやきに、あきらかにまた体を震わせた。

先刻、ここに入りながら手を添えた時にも感じたことだが、すでに清佳の体は、かなり敏感になっているようだ。

そう思いながら垣内が体を離すと、髪をもとに戻した清佳は、トレーの上からイヤリングをひとつ取り上げ、鏡を見ながら、それをまず左の耳にとめた。やはり締めがきつかったと見え、すぐにいったんはずし、

ねじを調節してとめ直した。さらに数回そんなことをくり返し、落ち着くと、右耳の方は、最初からある程度ねじをゆるめてとめた。こちらの方は、とめたまま、指先でねじを多少調節するだけですんだようだ。

その作業が終わると、清佳は、あらためて鏡に見入った。

さほど大きくはないが玉粒のそろったパールが、清佳の襟元と両耳に光をたたえていた。生地的光沢とマ

ツチしていることもあり、へたをすれば「はすっぱ」な印象を与えかねないそのボディコンシヤスな服を、上品な感じにまとめている。

垣内がそれに満足していると、清佳は、さらに、首を左右に振るようにして、今一度、イヤリングの位置をたしかめた。その仕草とまなざしは、すでに完全な「女」だった。

先刻からの一連の動作といい、その順応力の高さに

驚きながら、垣内は、清佳自身もこのアクセサリーを  
気に入っているらしいことを見て取り、さらに満足を  
感じた。

気がつくのと、清佳が着ていたスーツとブラウスをた  
たみ終えた販売員が、それを、この店のロゴの入った  
紙袋に入れていた。

それで、垣内は、サイドバッグからクレジットカー  
ドを出し、その前に差し出した。

「あ、はい、お預かりいたします」

カードを受け取った販売員は、壁際のカードリーダーのところまで行き、服やアクセサリからはずしたタグを見ながら清算の作業を始めた。

ふと気がつくとき、そのカードリーダーののった小机に、先刻のピンクのキャミソールドレスが、まだかたづけられずに置かれていた。

それを見た垣内は、ある考えがひらめいて、販売員

に声をかけた。

「すみませんが」

「はい……？」

「やはり、そちらの服もいただいでおきましょう」

「……あ、はい、ありがとうございます」

垣内の言葉に、販売員はうれしそうに笑い返し、清佳は、また驚いた顔を向けてきた。

そこで垣内は、清佳に言った。

「先に出て、待っていてもらえますか？」

「……？」

問いかけるような清佳のまなざしに、垣内は笑いながら答えた。

「プレゼントの額から下心を読みとられるのは、男としては最低の手並みですからね」

実際の話、相当な額になるはずの代金を清佳に知られ、へたに気をまわされなくなかったのだ。

垣内の言葉に清佳はまた困惑した顔をしたが、その目を見ながら垣内がゆっくりとうなずいてみせると、今度はあきれたというような顔にかわり、バッグを取って出口へと向かった。

その赤いドレスの後ろ姿を見送りながら、垣内は、たしかにこの「女」には、それくらいの価値はあるだろうと思った。

あの人は、いったいなんのつもりでこんな金を使うのだろうか？

しかたなくひとりで店を出ながら、清孝は、垣内の真意を測りかねていた。

その身なりや、静佳ママから聞いた話、それになにより、ここまでの行動を見ていて、垣内がそうとう裕福で、かつ、かなり風変わりな「趣味人」であることはよくわかった。

しかし、たとえそうだとしても、こんな「散財」に何の意味があるというのか？

通路に出て立ち止まったところで、清孝は、自分の姿をあらためて見下ろしながら、首のパールを指先でなぞった。

この服にしても、試着室でちらりと見た値札には、三万なにがしかの数字が並んでいた気がする。ましてや、このネックレスやイヤリングに至っては——けっ

して安物の模造品などではないだろうから——、それにも倍加する額にちがいない。

しかし、こんなものは、垣内自身にはもちろん、清孝にとっても、今後の人生でなんの価値も持たないものだろう。いわば、どぶに金を捨てているようなものだ。

ただ……。

男がこんなふうに金を使う合理的理由が唯一あると

すれば、それは——さつき垣内自身が冗談めかして言ったように——、「下心」ということだ。

つまり——想像したくもないことだが——、清孝との「肉体関係」が目的ということだろう。

しかし自分は、援助交際になびく女子高校生や商売女とはちがう。

むろん、これまで一度だって、男に対して性的衝動などを感じたことのない人間だ。

そんなことを期待されたところで、素直に言うことをきくほど馬鹿ではない……というか、変態ではないのだ。

それくらいは、垣内にだってわからないわけではないだろう。

清孝は、自分が今感じている不安を払拭するため、そんなふうな考えを進めた。

「お待たせしました。じゃあ、行きましようか」

清孝の心の乱れを断ち切るように、店を出てきた垣内が言った。

今の店の紙袋を持ち、そのままビルの出口に向かう垣内について歩き出しながら、清孝は「あの……」と声をかけた。

「なんですか？」

「……あ、いえ、なんでも……」

一瞬、高価なプレゼントをもらいながらなにとも言わ

ないのはまずい気がしたのだ。しかし、礼を言えば、さらにおかしなものになることに気づき、あわてて言葉のみこんだというわけである。

ビルを出ると、垣内は、先刻来た道を逆方向に歩き、ふたたびメインストリート方面に向かった。

その横を並んで歩きながら、清孝は、これまでとはまたちがう緊張を感じていた。

まだ裏通りを歩いているのだから、メインストリー

トほどには人通りは多くない。それなのに、これまでより強い視線を感じるのだ。

すれちがう人がこちらを見てくる確率は、最前より確実に高くなっていた。少なくとも男は、ほぼすべてが視線を向ける。

しかも、その視線の質が最前までとはあきらかにちがっていた。

粘度がちがうとでも言ったらいいのだろうか。

さつきまでは「視線を走らせる」という感じだったのが、今ははつきりとこちらを「眺めて」くるのである。

前と同様、その視線は、顔から下へと移動するのだが、それが、スカートの裾から出た太股のあたりに達したところで、そこに貼りつく。人によつては、そのあと、ふたたびなめるように胸、顔へと戻ってくる。

前は、たいていの男が、表面上はなに食わぬ顔を装

っていたのに、今は、少くない数の男が、こちらに気づかれることもお構いなしに、すれちがうまで見つけけてくる。

これは、まちがいなく、清孝の服が替わったせいだろう。

ボデイラインがはっきりとわかる、しかも膝上二十センチのミニ。街路灯や店の明かりでけっして暗くはない路上で、そのワンピースの赤と、光を微妙に反射

して光沢ある生地は、あきらかに人の目を引くのだ。さらに、歩いていることで、生地表面で光っている部分が動き、胸の揺れや、隠れている太股の上部の動きまで強調する。

通りが飲屋街に達し、さらにメインストリートに至る頃には、周囲はいよいよ明るく、人通りもいよいよ多くなって、その視線もいよいよ増した。

清孝は、そんな男たちの視線を怖いと感じ始めてい

た。

さつきまでは、いやだとは思っても、恐れまでは感じていなかった。

しかし今は、何重にも重なって注がれるその粘りつくような視線に、スカートから出た太股のあたりがひりつくような気がした。すれちがう寸前まで注がれる胸の揺れへの視線に、なにか体を切り裂かれるようなおびえを抱いた。

もちろん清孝は、そんな動揺を必死に押し隠し、できるかぎり平然とした顔で歩いているのだが、もうこれ以上ひとりでは耐えられない気がしてきていた。

誰かにすがりたい。

そう思った。

誰か：：もちろんそれは、垣内しかない。垣内にもつと寄り添えば、この心細さから、少しは救われる気がした。

しかし、メインストリートに出て、さつきと同じ方向に歩き始めた垣内は、やはり先ほど同様、なにも話してこない。それどころか、目を向けることさえしなくなっていた。

：：僕にこんな格好をさせておいて、それはないだろう。

清孝は、そんな垣内に、恨めしいような感情を抱いた。

：：せめて、こつちを見てくれれば、少しは安心で  
きるのに。

そんな気持ちちが募った清孝は、先刻、垣内がネクタ  
イのことを思い出して立ち止まった地点まで来た時に  
は、自分の方から垣内に腕をからめようかとさえ思っ  
た。

しかし、清孝がそれを思いきる前に——つまり、そ  
こから一ブロックも行かないうちに——垣内は足を止

めた。

「ここです」

……えっ？

見ると、まわりの高層ビルに比べると古い感じの石造りのビルがあり、全体のエントランスとはべつに、外から二階につながる階段があつた。

……もう、……着いたの？

垣内に導かれるまま、その階段を上りながら、清孝

は、今度は不可解な思いにとらわれた。

垣内は電話で三十分と言い、しかも、あんな寄り道をしたのだから、目的の場所はもつと先だと思つていたのだ。

ここなら、あの喫茶店から直接来ていれば、どう見たつて五分ほどしかかからないじゃないか……？

そう思いながら、清孝は、ヒールをひっかけないよ  
うに、そして、短いスカートの手も気にかけてつ、階

段を上った。

上りきると、そこはひさしつきのバルコニーになっていて、ビルの壁側には、どこかいかめしい造りのドアがあった。看板の類はいつさいなかったが、ドアまでは赤い絨毯が敷かれ、その脇にはドアボーイまで立っている。

どうやら、あのドアの向こうが、目的の店らしい。

繁華街の中空にポツカリとできた異次元空間のよう

なそのスペースを、垣内と並んで歩いている時、隣のビルの壁面につけられたデジタル時計が目に入った。

：：えっ？

それを見て、清孝はあ然とした。

時刻は、あの喫茶店を出てからちようど三十分を経過していた。

ということとは、つまり：：。

「いらっしやいませ、垣内様。お時間どおりですね」

ドアボーイの声を聞きながら、清孝は垣内の顔を見  
やっ  
た。

Friday  
10:00pm

レストラン「アプローズ」

こんなおしやべりな人間を雇っているなんて、この店も質が落ちたものだ。

そのドアボーイが開けてくれたドアを清佳につづいて

入りながら、垣内は苦笑した。

サービス業の基本はしやべりすぎないことだ。奴があんなことを言ったおかげで、清佳はよけいな勘ぐりをしたかもしれないじゃないか。

「お待ちしておりました」

クローク前で出迎えたマネージャーの顔を見て、垣内はひとこと皮肉でも言っつてやろうかと思ったが、けつきよくはやめておいた。

まあ、自分自身にしたところで、あれだけ見え見えの芝居をしたのだ。清佳なら、ドアボーイの言葉以前に、こちらの思惑など気づいているかもしれない。

「お荷物、お預かりいたします」

垣内が持っていたレディスショップの紙袋を見て、マネージャーが手を差しのべた。

「ああ、ありがとう」

垣内が渡すと、受け取ったマネージャーは、それを

そのままクロークの中にいた女性従業員に預け、「どうぞこちらへ」ともうひとつ奥のドアへと導いた。

やはり不安なのだろうか、これまで以上に硬い表情になっている清佳を先に立たせ、垣内もそのあとに従った。

最近では高級なフレンチレストランはブースで仕切られた半個室仕様のところも多いが、何十年もの伝統があるここは、全体が天井の高いホールフロアになっ

ている。そこに二十脚ほどのテーブルが配置された見通しのよい造りが、また、垣内のねらいでもあった。

案の定、席に案内されるまでの間にも、各テーブルで食事をとる人々が、ちらちらと清佳の方に目を走らせた。格調高く落ち着いたこの店の雰囲気の中で、その赤のミニワンピースは、いやが上にも際だつのだ。

清佳自身も、当然そんな周囲の目に気づいているよ  
うで、これまで以上に緊張した感じで歩を進めていた。

といつても、おどおどした様子はみせず、背筋を伸ばした姿勢を保っている。そのおかげで、へたをすれば場違いにも見えかねないその服装も、けっして品の悪いものには感じさせていなかった。

ホールの中ほどに用意された席のところまで来ると、案内してくれたマネージャー自身が椅子を引き、清佳を促した。

一瞬、清佳は目を泳がせたが、すぐにマネージャー

に軽く会釈し、席に着いた。他の席の女性客を見てすかさず気づいたのだらう。バッグを背もたれと背中の中に置いたのもマナーにかなっていた。

もうひとりのボーイが引いてくれた椅子に垣内が掛けると、清佳はそわそわした感じで、また目だけを泳がせた。ここまではなんとかやり通したものの、店内のどこからもよく見えるこの席が落ち着かないにちがいない。

そのあと清佳は、気づいたように自分の膝あたりを見て、スカートの裾を引きおろす仕草をした。垣内の位置からはテーブルに隠れてよく見えないが、スカートが短くなったぶん、先刻、喫茶店で腰掛けた時以上に気を配っているようだ。

「いらっしやいませ、垣内様」

声にそちらを向くと、なじみのソムリエが立っていた。

「ワインは、いつものものでよろしゅうございますね」  
垣内がうなずくと、そこでソムリエは、清佳の方を  
ちらりと見ながら言葉を継いだ。

「それとも……今夜はまず、シャンパン……でしよ  
うか？」

「ふふ、いいですね。おすすめは？」

「はい。ロデレールのクリスタル・ブリュットなどい  
かがでしよう？」

「うむ、そうしてください」

垣内が言うと、ソムリエは穏やかな表情で笑い返したあと、清佳にも会釈し戻っていった。

ここにも一人、垣内の「下心」を読んでいる男がいた。垣内が連れている「女」の正体にどこまで気がついていっているのか、いつもわからないのだが、彼がシャンパンを勧めるといふことは、まちがいなく清佳がレディとして認定されたということである。

ソムリエと入れ替わりに、マネージャーが垣内の脇に立った。

「コースでよろしゅうございますね」

「今日は、どんなもの？」

「メインディッシュは、魚料理がスズキと伊勢海老、肉料理が和牛とカモでございます」

そこで垣内は、清佳に向かって「苦手なものはありませんか？」と声をかけた。と、清佳はかすかに首を振

った。しかし、垣内の顔に目を向けようとはせず、目の前のテーブルに視線を落としている。

垣内はその表情が気になったが、マネージャーに「じやあ、そうしてください」と答えた。

マネージャーが去った後、垣内は、清佳の気持ちをほぐすつもりで言った。

「まあ、こういう店ですから、マネーには気を使いますが、雰囲気としては、さほど堅苦しくもないでしょ

う」

ところが清佳は、依然うつむいたまま、うなずくでも否定するでもなく黙っている。緊張しているのはたしかだろうが、どうもそれだけではないようだ。

やはり、こちらの手の内を見透かし、腹を立てているのかもしれない。

ここまでついてきた以上、そして、自らも女に見えるように努力しているところを見ても、ここで事を荒

立ててすべて台無しにするとは思えなかつたが、垣内はフオローが必要だろうと感じた。

ところがそこへ、ソムリエがシヤンパンを持って戻つて来た。それ以上立ち入った会話もつづけられず、しかたなく垣内は、その栓が抜かれ、ふたつのグラスに注がれるのを見ていた。

清佳は相変わらず沈んだ顔で、目を合わせてこようとしない。

「では、ごゆつくりお楽しみください」

そんな清佳の表情をソムリエも気にしたようで、どこか取りなすような語調でそう言い、ふたたび奥へと引っ込んだ。

それで垣内は、シャンパングラスをとり、宙に浮かせたまま清佳を待った。

と、清佳も少しだけ顔を上げグラスに手を伸ばした。それは、垣内に合わせるといふより、周りの目を気に

してしぶしぶという感じだった。シャンパンが注がれた以上、乾杯しないわけにはいかないと思ったのだらう。

清佳がこちらをにらむような上目づかいの視線を向けてきたところで、垣内はそのグラスを掲げた。

「それじゃあ……、そうだな……美しいレディの誕生に」

その言葉は、清佳の感情を逆なでしたようだ。清佳

は、さらに不機嫌そうな顔で一瞥をくれたあと、垣内の視線を避けるように、手に持ったシャンパングラスに目を落とした。

しかし、清佳自身ものが渴いていたのだろう。見ていると、細かい泡がはじけるそのシャンパンを、赤いルーージュが塗られた唇に近づけた。

それをひとくち含んだところで、清佳の表情がちよっと和らいだ。シャンパンが思った以上に美味だった

からにちがいない。

そのあと、やはり清佳は、さらにもうひとくちそれを味わい、そこでグラスを置いた。

「ふふ、お気に召しましたか？」

垣内がきくと、清佳は、自分が一瞬おいしそうな顔をしてしまったことを悔やむように、ふたたび鋭い視線を垣内に向けた。そして、周囲を気にするそぶりを見せながら言った。

「……もう、やめませんか、こんな猿芝居」

「猿……芝居？」

「まだとぼけるんですか？　だいいち、あなたはいつたい、なぜこんなことをするんですか？」

テーブルの大きさもあり、若干大きな声を出さなければならぬのだが、それでも清佳は、他の席の客やボーイたちのところまでぎりぎり声が届かないように気をつかっている。

「なぜ？　なぜって……、男が美しい女性とシャンパンを飲みたいと思う。それに理由がいりますか？」

「またそんなことを。垣内さん、あなたって、まるで……」

清佳はそこで、一瞬戸惑った様子を見せたあと、吐き捨てるような口調でつぶけた。

「……詐欺師ですね」

適当な言葉が見つからず、考えた末に言った清孝の表現も、垣内は平然とした顔で受け流していた。

清孝はそれにさらにいらだち、つぶけた。

「ネクタイを忘れてきた：：とか、そんなこともすべて、僕をはめるための芝居ですよ。それどころか、あのバーで最初に声をかけた時から、あなたは、僕にこんなことをさせようと考えていた。そういうことでしょう？」

清孝の詰問に、垣内はちよつと苦笑してみせた——それは明らかに肯定と見てとれた——が、それでもまだ、余裕ある態度は崩さない。

「い、いつたい、何のために……？　なにが目的なんですか？　僕をこんなふうにしらし者に……」

そこまで言ったところで、清孝は口をつぐまざるを得なくなつた。ボーイが最初の料理を持って近づいてきたのだ。今の声を聞かれたのではないか、ことに

「僕」という言葉が耳に入ったのではないかと、清孝はふたたび緊張した。

しかし、二人分の皿を運ぶことに神経を集中していたらしいボーイは、それには気をとめなかったようだ。前菜を配膳し終わると、かしこまって脇に立ち、言った。

「……ポークリエット、小海老とアボガドのパテエ、スモークドサーモンガレット、三種珍味のアミューズ

でございます」

垣内は、それに軽くうなずき返すと、テーブルの上のナプキンをとり、膝に広げた。そのあと、フォークトナイフを取ろうとし、そこで手を止め、清孝に促すような視線を送ってきた。女性より先に手をつけるわけにいかないということだろう。

清孝は一瞬迷ったが、まだボーイがそばに立っていることもあり、自らも膝にナプキンをかけ——そのお

かげでミニスカートからのぞいていた太股が隠れ、いくぶん気の休まる思いはしたのだが――、いちばん外側に並べられたフォークとナイフを取った。

大きな皿の上に三つ並んだ前菜は、それぞれ小振りなもので、そのままでも口に入りそうだったが、今の自分のなりを考えた清孝は、サーモンをさらにナイフで小さく切った。清孝がそれを口に運ぶと、そこで垣内もやっと料理に手をつけ、ボーイもまた、安心した

ように会釈して去っていった。

口の中に広がったソースの香りに、清孝は一瞬気をとられそうになったが、ボーイが離れるの見計らつて先刻の話を続けようとした。

ところが、それより先に垣内が口を開いた。

「女性というのは不思議なものですね」

機先を制された格好で、清孝は垣内を見やった。

「ほら、たとえばデビューしたてのアイドルが、最初

は田舎臭かったのに、数ヶ月もしないうちに驚くほど洗練されてかわいくなっていたりするでしょう」

垣内を指弾しようとしていた清孝の思惑とはまるで次元のちがう、まさにダイナーのための軽い会話という調子で、垣内はつづけた。

「もちろん、スタイリストとかヘアメイクだとか、まわりにいるスタッフたちが彼女を磨き上げていくんですでしょう。でも、おそらくそれだけではないですね。

彼女は、注目され、多くの視線にさらされることで、見る見る変身するのだと思います。女性は、人の視線を集めれば集めるほど、きれいになっていくものです」

「垣内さん、あなた、またそういうどうでもいい話ではぐらかそうとする。僕が言いたいのは……」

また垣内の詐術にはまる危険を感じ、話の流れを押しとどめようとしたのだが、清孝がそれを言い終わらないうちに、垣内は言葉を重ねた。

「今のあなたも、まさにそうです」

「……えっ？」

「そうして食事している姿も、とてもチャーミングだ。オードブルをわざわざ切り分けて口に運ぶところなんて、とても女性らしい。まさにレディです」

「え？ ……いい、いや、それは……」

「ふふ、まわりの視線を気にしてということでしょう。

たしかに、あなたは今、この店にいる人々の注目を集

めています。もちろん露骨に見てくるような人はいないですが、さつきから、他の席の人たちが、ちらちらとあなたの方を見ている。そして、あなたも、それに気がついている。だから、女っぽく振る舞おうとしている」

「だから、それは……」

清孝は垣内に反論しようと思ったが、そのことでのつい声が大きくなりそうになり、言いよどんだ。垣内の

言葉に、あらためて周囲からの視線を意識させられた  
せいでもあった。

「だいじょうぶ。あなたのそんな努力はじゆうぶんに  
報われています。人の視線を浴びて、あなたはますます  
美しく変わっていく。他の人たちがあなたに注目し  
ているのは、なにより、あなたが魅力的な女性だから  
です」

「いや、ですから……」

清孝はまた、反論の最初の部分だけで言葉をとぎれさせた。ボーイが次の料理を持ってくるのに気づいたからではあるが、それだけではなかった。

垣内が話をはぐらかそうとしているのは、よくわかっている。それなのに、そのはぐらかしの言葉自体が、清孝の体を金縛りしてくるような感じなのだ。

垣内が「女っぽい」とか「美しい」とか言うたびに、頬のあたりが火照るのはなぜなんだ……。

清孝が、自分の中の御しきれない感情に戸惑っている、テーブルに近づいたボーイが、前菜の皿をかたづけ、スープ皿を置いた。

「手長海老、帆立貝、ハマグリのカリームスープでございます」

クリーム濃厚さに海の匂いが不思議とマッチしたその香りが鼻に届いた。清孝はとりあえず冷静になろうと思ひ、スプースプーンをとり、音を立てないよう

に気をつけてスープを口に運んだ。

と、そこで、垣内がまた口を開いた。

「どうやら、清佳という名はまちがっていなかっただよ  
うですね」

「……？」

「その名のとおり、あなたの仕草ひとつひとつが上品  
で清楚だ。そのスプーンの持ち方だって」

垣内に言われ、清孝は自分の手元に視線を向けた。

ふたたび皿のスープをすくおうとしたところだったのだが、その銀のスプーンの柄を、清孝は、親指と人差指と中指の先で軽く持っていた。そして、それに添えた小指が立っていた。

えっ：：！?

自分のそんな所作に清孝自身が驚いた。

「指先も細くて美しい。今日は無理でしたが、そのドレスなら、赤いマニキュアもきつと似合うはずです」

ふだんの自分は、こんな持ち方はしないだろう。やはり、知らず知らずのうちにまわりの視線を意識し、反応しているのかもしれない。

「それにしても、そんなセクシーなドレスを、それだけ上品に着こなせるなんて、女性にだってそうはいないでしょう」

清孝があわてて小指を寝かせた時には、垣内はすでに次の話をしていた。

「たとえばその襟からのぞく肩から鎖骨のあたりなんて、スリムなあなたの魅力を際立たせている」

「ま、また、そういう……」

清孝がまたあせって言いかけると、垣内は、ふたたびそれに重ねるようにつづけた。

「いや、僕はほんとうに感心しているんですよ。清潔な色気とでも言うのでしょうか、とてもセクシーなのにけっしていやらしくなっていない。そのドレスは、

まさにあなたのような人が着るためのものなのだなと  
思います」

垣内はその言葉どおり、清孝の首筋あたりに視線を  
注いでいた。

その言葉と視線に、清孝は大きく開いたネックライ  
ンを否応なく意識させられた。その緊張のせいで、体  
が震えたのかもしれない。胸のパットが揺れた。その  
揺れが、体に密着した服の上からもよくわかり、清孝

は思わず、そこを押さえようと左手をテーブルから浮かしていた。

しかしもちろん、人前でそんなところを押さええるのがおかしいことにすぐ気づき、その手の持って行き場に困った結果、今垣内が話題にしたネックラインのあたりの肌にあてていた。

指先に触れたその肌は、ネックレスの真珠の粒の感触とも相まって、なんだかひんやりしていた。ふだん

の服では露出しないところが外気に触れているからだ  
ろう。

「ふふ、そんな仕草もとても女らしいですよ」

また垣内にそう言われ、清孝はあわててそこから手  
を離した。

「ドレスの赤のせいもあるんでしようね。肌が透き通  
るように白く見える。そのネックレスも引き立つとい  
うものです」

さらに重ねられた垣内の賛辞に、今の自分の行動ともあわせ、頬がぽつと上気したのがわかった。

「もちろん、首筋だけの話ではない。セクシーなのに清潔感があるのは、その顔立ちがすつきりしているからですね。ふっくらとしているのに小振りな唇や、すつと鼻筋の通った鼻ももちろんですが、なによりも、その目」

垣内の言葉に清孝はなぜかどきまぎし、そんな心情

を隠そうとして、逆に垣内の顔を見つめていた。

「うむ。そんな目で見つめられると、思わず、僕にできることなら何でもしてあげたくなくなってしまふ」

清孝はさらにうろたえて垣内から視線をそらせ、テーブルのスープに目を落とした。

「静佳ママの化粧の腕もたいしたものだと思うけれど、それにしたって、あなたが元来持っている美しさを、彼女が引き出したということでしょう。おそらくあな

たは、あなたが思っている以上に美しい。たくさんの視線を浴びて、今夜初めて、あなた自身もそれに気がついたというわけです」

「……も、もう、やめてください」

清孝は、そう言うのが精いっぱいだった。

垣内の言葉は齒の浮くようなものだと思つたし、男である自分がそんなことを言われて、ひどく照れているということではある。

しかし、それだけではない「魔力」のようなものが、垣内の言葉にはあった。

だいたい「美しい」などという言葉は——大時代な芝居やドラマならともかく——、ふつうの日常会話では、女性に対してさえ、照れて口にできないものだろう。それを臆面もなく、しかも男である自分に向かつて言えるなんて……。

それに、ふつうの男が使ったらきざったらしく聞こ

えるはずのそんな言葉も、垣内の口から出るとなぜか  
そうならない。この高級なレストランの雰囲気とも相  
まって、違和感がないのだ。

この垣内という男は、常人とは違う「言葉のオーラ」  
を操れるにちがいない。

清孝はそう感じた。

そうとでも思わなければ、垣内の言葉とともに自分  
の中に湧き起こる「ふるえ」のようなものが理解でき

ない気がした。

「美しいあなたをただ眺めているだけで、料理が数倍うまくなる気がします。こんな楽しみのために多少の金や努力を払うことを、僕はけっして惜しいとは思いません」

垣内はそうつぶけた。

それが、先刻の清孝の「なぜ？」という問いに対する答えなのだろう。

こちらの疑問にまともに答えたものではなく、またはぐらかされた感じしかしなかったが、清孝はそれ以上、その結論までの間で語られた垣内の言葉の「魔力」に感応してしまっていた。清孝は、垣内の顔をまともに見ることができなくなり、しかたなく、そのスープを黙々と口に運んだ。

そのせいでスープはすぐにかたづき、次の料理が運ばれてきた。

「ウニ、アワビ、アンキモのフリカッセでございます」  
頬をほんのりと染め、皿の上のあわびをさらに女らしい手つきで切り分ける清佳を見て、垣内はほくそ笑んだ。自分の言葉の力が未だ衰えていないと感じられたからだ。

垣内は、「言葉の力」ということを信じている男だ。かつては画家を志し、それで美大に進んだわけだが、

そこでまわりの学生たちを見て、自分には才能がないことに気づいた。だから、それからは、創作より「美学」や「美術研究」という分野に目標を定め、東西の古美術を見、哲学書を読み、世界の現代美術の潮流にもくまなく目配せしながら学生時代を送った。

そこで人生の課題として与えられた「美とはなにか？」という根元的な問いには、未だ明確な答えを持っていないが、そんな中で、「美」を「言葉」で表現

することには自信をつけた。

大学卒業後、教師になるという選択もあつたが、そんな力を実社会で試してみたくなつて、アートビジネスの世界に飛び込んだ。何社かの美術品商社を経て、三十歳過ぎで「画商」として独立、四十になるころには一等地に自分の画廊を持っていた。この世界では破格の成功と言つてよかつた。その秘密は、なにより垣内の「言葉」にあつた。今のように有名作家の作品

を扱えなかつた当時から、絵を見る客の横で、垣内がその絵がいかに美しいかを語ると、たいていの客はそれを買った。

同業者の中には、そんな垣内を妬み、「口先だけで絵を売っている」などと悪口を言う連中もいる。しかし、「言葉の力」というのは、そんな軽いものではないだろうと垣内は思っている。

たとえば、ゴッホやピカソの絵と名もない画家の絵

に何万倍という値段の差がつくのはなぜか。それは、単に作品の素晴らしさだけではなく、そこに、ゴッホやピカソにまつわる「物語」がつけ加わるからだ。つまり、「言葉」がそれだけの価値をつくりだしているのだ。それなら、名もない作家の作品に「言葉」を付加すること、その価値を何倍にもすることもできるはずだ。自分のやってきたのは、つまりはそういう仕事なのだと思う。

いや、むしろ、「言葉」の方にこそ「美」はあるのだとさえ垣内は考えている。「美」は、それが「言葉」として語られることによって初めて生み出されるのだ。現に、どんな作品も、垣内がその美しさを語った瞬間、輝き出すではないか。

そんなことを考えながら、さらに女らしさを増していく清佳を見てみると、料理はいよいよメインディッシュにさしかかった。

「スズキのパイ包み焼きと伊勢海老のフリカッセ、ブルゴーニュ風エスカルゴ添え、アメリカーナソースで  
ございます」

こんなシチュエーションでは、どう反論しても垣内に  
言いくるめられるとでも思ったのか、清佳は、今は  
大人しくレディを演じているようだ。

垣内は、それはそれで逆に物足りないような気もし  
てきて、先刻から何度も清佳がきいてくる疑問に、少

しはまともに答えようかと思った。

「……まあ、要するに僕は、シンデレラストーリーが好きなんでしようね」

「……？」

突然言った垣内の言葉に、清佳はきよとんとした顔を向けてきた。

「シャルル・ペローの『シンデレラ』ももちろんだけれど、あのパターンの物語って、いくつもあるでしょ。

たとえば……、『マイフェアレディ』だとか『プリティ  
イウーマン』だとか。貧しくて、いいことなんてなに  
ひとつない毎日を送っていた女に、ある日、魔法のよ  
うな幸運が訪れ、彼女は美女に変身して幸せをつかむ。  
僕はなぜか、そんな物語にわくわくするんです」

垣内が言うと、清佳の顔にふたたび警戒心のような  
ものが浮かんだ。

またおかしな話を持ち出し、自分をあらぬ方向に誘

導するのではないかと思っっているにちがいない。

そんな警戒心を解くために、それに、これから自分が語ろうとしていることに若干の照れもあり、垣内は言い訳のようにつづけた。

「いい歳をした男が、なにを言い出すのかと思っっているでしょう。でも、そんなシンデレラストーリーが、僕だけでなく、多くの人に愛されているのは、そこに、日常にはないドラマがあるからでしょう」

清佳は、まだいぶかしげな顔をしていたが、しごくあたりまえのことを言った垣内の言葉に、かすかにうなずいた。

「それまで、その女性が貧しくて自分の美しさに気づいていなかっただからこそ、その変身は劇的なわけです。魔法の物語によつて、誰より彼女自身が、自分が持つていた美しさに気づいて輝き始めるところに、人々は感動する。僕が求めているのも、要するにそんな感動

なのでしようね」

なるほど、そういう話のつながりか……。

先刻、垣内が自分に向かって浴びせかけた齒の浮くような賛辞ともあわせ、清孝には、垣内のねらいがなんとなくわかった気がした。

垣内は、このどう見ても異常なシチュエーションを、そんなロマンチックな物語にすり替えようとしてい

る。

つまり、僕にシンデレラを演じろと言っているわけだ。

清孝がそう思い、探るような目で見返すと、垣内はさらにこうつづけた。

「僕は昔から、そんな変身に立ち合いたいと思ってきました。言うのは照れますが、できればそこで、彼女にその美しさを気づかせ変身させる王子様の役割を果

たしたいなんてね」

たしかに垣内は、その言葉どおり、これまでは見せなかつた照れた表情をしていた。そういう点ではウソではないのだろうが、清孝は、その言葉にも、ごまかし：：と、いうか、大きなすり替えがあるのを感じた。

「でも、それなら：：」

清孝が言いかけると、垣内は、その先を見越したように逆に問いかけてきた。

「それなら、そういう女性を見つければいいとおっしゃりたいわけですね？」

「え、ええ」

「ふふ、それはそうなんですが、考えてもみてください。現実には、そんな変身ストーリーなんて、あるものじゃないです。美しい女性は、もともと美しい。いくら汚れた花売り娘に扮してもオーダーリー・ヘツプバーンはオーダーリー・ヘツプバーンだし、安っぽいフェ

イクフアーとホットパンツを身にまとも、ジュリア・ロバーツはとても街の娼婦に見えない。それが変身物語として成り立つのは、映画というお約束の世界の中だからです」

清孝自身も、その手の映画を見てそんなふうに感じたことはある。だから、垣内の言いたいことの意味はわかるのだが、それがどうしても、男を相手にこんなことをする説明になるのか。その点が理解できず、曖昧

な顔で魚料理を口にした。

と、そんな表情を見て言葉不足だったとでも思ったのか、やはりフオークを運んでいた垣内が重ねてこう言った。

「そんな映画のヒロインは、変身前の姿からして、すでにフィクションなんですよ。客観的に見れば、変身前から彼女たちは並みの女よりずっと美しい。もし、現実に彼女たちのような美人がいたとしたら、まわり

の人間が放っておかないはずで。そんな境遇にあるということ自体が、あり得ないでしょう。でも、観客は、最初からそういうフィクションとして見ている。

だから、変身物語として納得するわけです。それにね  
：：：「

そこで垣内はいったん言葉を句切り、ため息をつく  
ようなそぶりを見せた。

「現実の女性というのは、たいてい、自分がきれいか

どうかということに、貪欲なくらい敏感なものです。美人なのに、自分の美しさに気づいていない女なんて、実際にはまずいない。かわいい女の子は、小さな頃からちやほやさされて、自分がきれいなことをよく知っています。もちろん、その美しさを利用するすべもね。そして、多くの場合、そんな経験が彼女たちを傲慢にしていたりもするわけです。僕は、そんな女性に魅力を感じない」

「そ、それで、男を女装させると……」

清孝には、垣内の思考は、やはり飛躍したものに思えた。

「ええ、異常だと思いですか？　僕自身も、尋常でないのはよくわかっている。でも僕は、人が美しく変わる瞬間が大好きなのです。自分は美しい存在だと気づかされた瞬間、人はさらに美しさを増す。そして僕は、そんな刹那をいちばん美しいと感じる」

「でも……」

まるで「求道者」とでもいうようなことを言いだした垣内に、清孝は、適当な反論の言葉が見つからなかった。

「女性が、化粧やファッションで自らの美しさをむさぼるのに対して、男は、自分が持っている美しさに気づいてさえいない。それはおそらく、これまでの人生で、そんな機会が与えられて来なかったからです。し

かし、だからこそ、男がそれに気づかされた時、女以上に美しく輝く。僕は、そんなふうにいるのですが……」

垣内がそこまで言った時、料理としては最後の皿が運ばれてきた。

「和牛フィレとフォアグラのソテー、薄切りナント産カモのロースト、バルサミコソースでございます」

「あのバーであなたの横に腰掛けた時……」

皿を替えたあと料理を説明するボーイにかまわず、垣内は言葉を継いだ。

「あなたを見て、僕は、なんだかもつたいないなという気がしました」

「(もつたい……ない?)」

まだそばに立ったままのボーイを気にし、清孝は、口の形だけで垣内の言葉を繰り返した。

「ええ。あなたは美しくなる可能性を持った人だと思

った。それなのに、あんなダークなスーツに押し込まれ、そのことで、自分の境遇を嘆いているように見えた」

あの時、垣内はすでに、自分のことを、そんな勝手な思いこみで見ていたのかと、清孝は鼻白む思いがした。しかしあの時——べつに服のせいではないにしても——、清孝がサラリーマンという境遇を嘆いていたのはたしかだった。

「だから僕は、あんなことを言ったのです。いつときだけでも、自分をリセットすることはできると」

そこで垣内は目の前の肉料理に手をつけ、ボーイは去っていった。

そのボーイの後ろ姿を目で追うようにしたあと、垣内は「いや、もつと正直に言いましょう」とつぶけた。

「なにより僕は、あの時、女になったあなたを見てみたいと思ったのです。だから、いわば騙すようにして、

あの店に連れて行つた。そのあとも、へたな芝居までして、あなたを着飾らせた。あなたの言うとおりに、詐欺師のような手を使ったのは申し訳ないと思つています。でも、そうしてでも、僕は、あなたの美しさを見てみたかったので。そしてあなたは、予想どおり：「いや、僕の予想をはるかに超えて美しい女になつた」

垣内はまた、清孝に対して臆面もない賛辞を送つてきた。

清孝はまた、照れて目を伏せた。

それにしても、垣内自身は、そんなことをしてなにが楽しいのだろうか……？

料理を口に運びながら、清孝はそう思った。けっきよくのところ、垣内の言葉に、その答えはなかった気がした。

すると、そんな清孝の思いが伝わったように、垣内  
が言った。

「僕自身にとつても、あなたの今の美しさは大きなよろこびなんです。だってそれは、僕の眼力が正しかつたことの証明なんですから。それに、一般的な意味でも、今僕は、男としての優越感を感じているわけですよ」

「……優越感？」

清孝が顔を上げて聞き返すと、垣内はまた、余裕ある笑顔に戻って言った。

「こんな店で、こんな美女を連れていてというのは、それだけで男のプライドを満足させるものだということ、あなたにもよくわかるでしょ」

「そんな……」

「しかもその上、僕だけが、目の前の美しい娘の秘密を知っているわけですからね」

垣内の言葉に、清孝はふたたび目を伏せた。

その「娘」という表現に、また照れたからだ。

というより、自分が今、「娘」と呼ばれるような存在なのだということにあらためて気づかされ、その瞬間、体の中にまたふるえのようなものが走ったからだ。

と、そこで垣内は、からかうような口調で、こんなことを言った。

「じつはあなた自身だって、この二時間のうち、どこかで、そんな優越感のようなものを感じていたのではないですか？」

「そ、そんなこと……」

あわてて、「そんなことはない」と言おうとしたところ、清孝は言葉に詰まった。

先刻、街を歩いていた時、男たちが無意識のうちに投げかけてくる視線に、そんな感情を抱いたことはたしかだった。

「ほら、あなたも、女になったとたん、自分の美しさをじゅうぶんに意識してるじゃないですか」

今言葉に詰まった、その清孝の表情の変化をすかさずとらえて、垣内はそう言ってきた。

それに、清孝は慚然とした。

まただ……。。

これが、会って以来つづいている垣内の手だった。

あれこれ言葉を弄ろうし、そのあげく、最後は心の中を見透かしたようなことを言って動揺させ、それこそ、こちらの男としてのプライドを少しずつなし崩していく

のだ。自分はずっと、その策略にのせられてきた気がした。そのせいで、こんなとんでもない思いをしているのだ。

清孝がそう思っていると、垣内はまた、清孝の表情を見ながら言った。

「申し訳ない。言い過ぎました。そんなにふくれない  
てくださいよ」

それはまるで、デート中、機嫌を損ねた女をなだめ

るといふ口調だった。

「あなたにとって、この二時間は、そんな優越感どころの話ではなかったでしょうね。なにしろ、生まれて初めての経験ばかりしたのだから。あの最初の店で話した言葉を使うなら、あなたはずっと、自分が何者であるのかさえわからなくなるような不安の中にいた」

そう、そのとおりだ。この男にのせられて、僕は、自分を見失うほどの動揺をしつづけている。

「でもね、そのおかげで、たとえこの瞬間だけだとしても、あなたは、人生をリセットできているんじゃないですか。少なくとも、つまらない毎日を忘れることはできているはずですよ」

垣内にそう言われたことで、清孝は、今日の昼間、会社であったことを思い出した。なんだかそれは、ずっと昔のこと——別世界であったことのような気がした。

「それに、そんな不安の中にいるからこそ、今のあなたは、より美しく見えるんだと思うんですよ。そんな不安の中で、あなた自身が、まわりに対してとても敏感に、つまり、感じやすく繊細になっている。それがあなたを、ういういしく見せている。その美しさが、けっして傲慢なものになっていないわけです。僕にはそれが、たまらない魅力に映るんです」

だからこそ美しいというのは、垣内一流の詐術だと

感じたが、少なくとも今の自分が繊細な感覚を持ち、そのことで、新鮮味のない日常とは全く違う世界にいる気はした。

けつきよくは垣内に誘導されるまま、そんなことを考えているうちに、メインディッシュの皿は、おおかたかたづいていた。

その料理にも、そして垣内の話にも、ある意味の満腹感を感じ、清孝がフォークとナイフをそろえて置く

と、すかさずボーイがデザートを運んできた。

「りんごのムース、すいかと白桃のワインコンフィ、二種ソースでございます」

すいかをワインで煮て冷やしたものであるらしいそのデザートをスプーンですくい、口に運ぶと、ワインの香りとともに、冷やややかな感触が口の中に広がった。それを心地よく感じるのは、最前から、自分の顔がずっと火照っているせいかもしれない。

言を弄した垣内の話術にだまされないようにしよう  
と思いながら、「美しい」などといわれるたびに、頬  
が上気した。それが、照れなのか、恥ずかしさなのか、  
それとも別の感情なのか、清孝にはよくわからなくな  
っていた。

そんな困惑にさえ、もう慣れっこになってしまった  
感じだ。しかし、デザートの途中、それとはまた別の  
困惑が清孝を襲った。

すいかなどを食べたせいだろうか、下腹の張りを感じた。用を足したくなつたのだ。

もうメインディッシュも終わっているのだから、さつさと立ってトイレに行けばいいことだったが、無言のままそうするのはやはりおかしい気がし、かと言って、垣内に対してそれを言い出しにくい感じもあり、デザートを食べながら、清孝はもじもじしていた。

最後のコーヒーが届けられた頃には、それが、もう

限界に達していた。

と、そこで、垣内が口を開いた。

「女性なら、食事のあとの化粧直しも必要でしょう」  
こちらのようすに気づき、気を使ったにちがいなか  
った。

また見透かされたことへのどこか悔しい思いと恥ず  
かしさ、そして、そんな言い方で助け船を出してくれ  
たことへの感心と感謝、そんな気持ちが入り交じる中

で、清孝は「え、ええ」とうなずいた。

膝のナプキンを乱雑にはならないように丸めてテーブルに置き、目の前の垣内に軽く会釈してから、清孝は席を立った。一瞬、椅子の背もたれに立てかけたハンドバッグを忘れそうになり、あわててそれを手に取った。「化粧直し」に行くのに、バッグを置いていてはいけないうら。

化粧室は、あのラタン製のついたての向こうだろう

と目星をつけ、そちらに向かった。その間も、まわりの席で食事する人からの視線を感じた。

先刻このホールに入ってきた時と同様、緊張したが、おどおどしてみつともない感じにならないよう、清孝は、姿勢を保ち、ミニスカートの足を真っ直ぐ前に運んだ。

ついたての裏に回ると、奥に向かう通路があり、思ったとおりその突き当たりにふたつのドアがあった。

ドアには「monsieur」と「mademoiselle」という金のプレートがつけられている。

一瞬迷ったが、もちろんこんな格好で紳士用を使うわけにはいかないだろうと思い、意を決して「mademoiselle」の方のノブに手をかけた。

先に誰か入っているのではないかとびくびくしながら中に入ったのだが、幸い、先客はいなかったようだ。大きな鏡の前にしつらえられた大理石製のふたつのシ

ンクには誰も立っていないなかつたし、やはりふたつある個室も、ドアが開いたままだった。

そのうちのひとつに入り、ドアの鍵を閉めたところで、清孝は大きなため息をついた。

こんな格好をして以来、他の人間の視線を意識しないでいい状態になれたのは、あのレディスショップの試着室と今の二回しかない。その気疲れが、一度に襲ってきた感じだった。

そのせいで清孝は、用を足すのも忘れ、しばらくその場に呆然とたたずんでいた。

しかし、いよいよ緊迫度を増した下腹の張りに、やつとここに来た目的を思い出し、手に持っていたバツグを壁の小棚にのせた。

清孝は、そこでもまた、用を足すまでにいくつも、経験したことのない戸惑いを覚えることになった。

さし迫った用は小さい方だけだったから、立ったま

ましてしまってもかまわない。しかし、誰も見ていないとは言え、こんな姿でそんなことをするのははばかられる気がした。それで、座ってすることにしたのだが、今度は、いつものズボンとは違うワンピースの扱いに戸迷った。どこかどぎまぎしながら——そして一方で、そんな自分に苦笑しながら——スカートをまくり上げ、パンストとショーツを下ろした。座れば座つたで、両膝のあたりにからみついたパンストのせいだ、

いつものように脚を広げられない。前のものを両腿で挟むような形でなんとか落ち着かせ、やっと、膀胱の張りを開放してやることができた。

しかし、そんな体勢で用を足したせいだろう。けっきよくは大腸の方も刺激を受け、清孝は思っていたより長い時間、そこに腰掛けていることになった。

その間、清孝は、食事の間の垣内との会話を思い出していた。

唐突にあれこれの話題を持ち出す垣内のせいで、話があっちへ行ったりこっちへ行ったりしたが——そして、その結果、垣内にうまく丸め込まれてしまった気もするが——、清孝の頭の中には、垣内が何度も使った「美しい」という言葉だけが残っている感じだった。

……そりゃ、あんなことを面と向かって何度も言われれば、いやでもその気になっちゃうわよね。

清孝は、心の中でそう思い、思い出し笑いしていた。

そして次には、そんなふうには思い微笑んでいる自分に愕然とした。

こんなシチュエーションの中で、自分の感覚が、ど  
んどんあらぬ方向へねじ曲がっていつていた。

：：こんなことをしていいのだろうか？ この  
あと、僕はどうなってしまうのだろうか？

今度は、そんな不安を感じながら後始末をし、水を  
流して服を整えた。そして、ドアを開ける時には、そ

の不安が、また形を変えていた。

：：ほんとうに僕は、垣内の言うように「美しい」  
のだろうか？　言葉巧みな垣内にのせられ、自分でも  
そう錯覚しているだけじゃないのだろうか？

これからまた人目のあるところに出て行かなければ  
ならないという不安から、手を洗うためにシンクに近  
づいた清孝は、そんな思いで鏡の中の自分の姿を見つ  
めた。

そこに立っている赤いワンピース姿は、たしかに女に見えた。垣内が先刻言っていた「セクシーなのに清楚」という表現も、当たっているような気がした。

そう感じながらも、手を洗っている間、清孝はずっと鏡に映った自分の顔を観察した。

静佳ママがしてくれた化粧は、全体に、まだそんなに崩れた感じはないのだが、食事したせいで、口紅がずいぶん落ちてきている気がした。

それで、ハンカチを出すためにバッグを開けた清孝は、手を拭いたあと、その中をかきまわすようにした。

渡してくれる時、静佳もそう言っていたし、清孝自身も、貴重品をつめ替えた時に見たのだが、そのバッグには、化粧品の種類が入っていた。

清孝は、垣内が言っていたように「化粧直し」しよ  
うと考えたのだ。

ところが、そこに入っている化粧品のアイテムは思

った以上に多く、どれを使ったらいいものか、清孝はちよつと迷ってしまった。口紅らしいものだけでも三本も入っている。

その三本をバッグから出し、洗面台の大理石の上に並べて、清孝は順にキャップをとって中を調べた。

一本目は、ピンクの口紅だった。これは、あきらかに今つけているものとは違う。

そう思った清孝は、それを元に戻し、二本目を開け

た。オレンジ系の赤。おそらくこれでまちがいないだろう。鏡の中の自分の唇に残った色とそのリップステイックを見くらべ、清孝はそう思った。

そうは思ったが、いちおうもう一本も調べておこうと、三本目も手に取った。キャップをとるとそこから出てきたステイックは、やはり今つけている色とは明確に違っていた。オレンジでもピンクでもない赤で——グロウというのだらうか——表面も艶がある感じ

だ。さらによく観察すると、ステイツクのところどころにきらきら光る小さな粒のようなものが見える。ラメが練り込んであるらしい。

そこで清孝は、二本目と三本目の口紅を両手に持ち、見くらべた。

今の口紅をつけたのは、「ターニング・ポイント」で借りたチャコールグレイのスーツを着ている時だ。

あの服には、たしかに、このオレンジ系が似合ってい

た気がするが、今着ているワンピースなら、この三本目の方がいいのではないか？

そう思ったのだ。

もうしばらく二本の口紅を見ていた清孝は、ちよつとうなずき、バッグの中からポケットティッシュをと取りだすと、そこから二枚ほど抜き取った。そして、まわりのファンデーションを崩さないように気をつけながら、唇に残った口紅をふき取った。

そのあと、その三本目の口紅の下の部分をまわしてステイックの先をもう少し出し、唇に近づけかけたところで、清孝はあることを思い出した。

静佳ママは、口紅を塗る時、筆を使っていたはずだ。そう思い、他の二本の口紅をしまうついでに、バッグの中をのぞき込んで、もう一度かきまわした。

紅筆らしいものはすぐに見つかり、そのキャップをとった清孝は、静佳がやっていたのを思い出しながら、

リップステイクの先にその筆先を滑らせた。

やはりあの時の静佳の手つきを頭の中で再生するようにして、唇を塗る。鏡に顔を近づけ、慎重に筆を動かすのだが、緊張のせいか、手が細かく震えている感じだ。

それでも、唇の左右の輪郭がアンバランスになるようなこともなく、思った以上にうまく塗れた気がした。

そこで清孝は、いったん鏡から顔を離し、あらため

てその出来を確かめた。服と合わせた感じも見たかったからだ。

やはり、清孝の感覚は正しかったようだ。

その口紅は、ワンピースとしっくり合っていた。赤い色のトーンも、表面の光沢も、そしてかすかに光るラメも、ワンピースの生地と呼応していた。

いよいよ、セクシー……ね。

清孝は——もちろん心の中でだが——そうつぶやい

ていた。

そして今は、最前のように、女っぽく考えた自分に違和感さえ覚えていなかった。

清孝は、ふたたび鏡に顔を近づけ、最後の仕上げをした。やはり静佳がやっていたのを思いだし、紅筆の先を両方の口角の間にさし込むようにして、その形を整えたのだ。

と、その時だった。

店からつづくドアのノブがかちやりと鳴り、そこが開いた。

びくりとして、鏡越しに見ていると、入ってきたのは、二十代後半らしい女性だった。やはり清孝と同じように——といっても清孝よりずっと地味なデザインだった。——「お呼ばれ用」という感じのワンピースを着ていた。

その女性は、「化粧直し」のためだけにここに来た

ようで、個室には行かず、すぐにこちらを向いてシンクの前で清孝と並んで立った。

女子トイレの中で本物の女性と隣り合わせていることに、当然ながら清孝は緊張し、まともに視線が合わないよう注意しながらも、その女性の方をうかがった。すると、不思議なことに、その女性からも、なんだか緊張した気配が伝わってきた。

やはり鏡越しに、こちらをちらちら見ている気がす

る。

こちらの正体に感づき、疑惑の視線を向けていると  
いうことだろうか？　こんなところでバレたりした  
ら、それは、最悪の事態を招くだろう……。

そう思ってひやひやししながら、その手つきが女とし  
ておかしく見えないように警戒し、口紅と紅筆にキヤ  
ップをかぶせてバッグにしまった。

と、隣の女性が、まるでなにかを確かめるとでも言

うように、その手元を横目で追った。

……ん？

それに気づいた清孝は、思わず鏡に映った女性の顔に目をやっていた。

それとまったく同じ間合いで女性の方が目を上げた。そのせいで——お互いの意に反し——、鏡を挟んで目と目が合ってしまった。そして、お互い目をそらすタイミングを失し、見つめ合うような感じになった。

相手の女性は、なんだか驚いたようなまなざしでこちらを見てくる。清孝は、それにいやが上にも緊張した。すぐにも目をそらしたいのだが、そんなことをすれば、逆にこちらの弱みをさらしてしまうような気がして、清孝自身も、相手の顔を見つづけた。

たぶんそれは、ほんの一秒か二秒のことだったのだろう。でも、清孝には、それがずいぶん長い時間に感じられた。

と、清孝より先に、相手の女性のほうが、いったん少しだけ目をそらし、ふたたび目を戻した時には、やわらかな表情で笑いかけてきた。

そして、こう言った。

「その口紅、よくお似合いですね」

その言葉には、からかいの調子はもちろん、社交辞令という感じさえなかった。心底から感心していると、いう口調だったのだ。

入ってきた時からこちらをちらちら見ていたのは、  
そういうことだったのか。

もしかすると、こちらの手元を追ったのは、あの口  
紅のブランドを知りたかったということかもしれな  
い。

さつきまでどこかしら感じた敵意のようなものが失  
せ、すべての警戒心を解いたという女性の笑顔から、  
一瞬にしてそう感じ取り、清孝も、ちよつと小首を傾

げるような仕草とともに微笑み返した。

声にこそ出さなかつたが、女性の賛辞に対して「ありがとう」という意味を込めたつもりだった。

と、相手の方も、かすかにうなずき返した。そして、その間も、清孝の顔から目が離せないという感じで見つづけてきた。

やはり男であるぶん、清孝は頭半分ほどその女性より長身だった。そんな位置関係から向けられる女性の

まなざしには、どこか「羨望」といった気持ちが入められていた。

「じゃ、お先に」という感じでもう一度悠然と笑いかけ、その場を離れる時、清孝は、街で男の無意識の視線に感じたのとはまたすこし違う——そして、それよりもずっと明確な——「勝利感」を感じていた。

席でコーヒーを飲みながら、垣内は、珍しく、多少

の不安を抱いていた。

手洗いに立った清佳の戻りが、妙に遅い。

トイレの中で一人になり、我に返った清佳が、このゲームを下りようと考えているのではないか。

そんなことを思ったからだ。

しかし、テーブルの間を戻ってくる清佳の姿を見て、垣内はすぐに、それが杞憂きゆうだったことがわかった。

清佳は、先刻立った時よりずっと、颯爽さつそうとし、しか

も女としての魅力にあふれた歩き方で近づいてきた。

「お待たせしました」

声こそ小さかったが、座りながら言ったその言葉からも、そして表情からも、先刻までのどこか浮かない感じの様子は消えていた。

「ふふ……いいですねえ」

垣内がそう言うと、清佳は首を傾げるような表情を向けてきた。

「なにが……ですか？」

「いや、その口紅」

その垣内の言葉に、清佳の表情が、一瞬パツと輝いた。

垣内がすぐにそれに気づいたことが、うれしかったにちがいない。

しかし、さすがに、そんな表情をしたことに照れたのだろう。肩をすくめるようにして、恥ずかしそうに

うつむいた。

そんな仕草も、先刻までよりさらに女っぽさが加わっている。

化粧を直してきたというだけでなく、トイレでなにかあったのかもしれない。

いずれにしても、垣内がいまいち手をこまねいていたハードルを、清佳はまた、自分の方からひとつ越えたようだ。

さて、ここからどうするか……？

そんな清佳の様子に満足しながら、垣内は頭を巡らせた。

じつは垣内は、自分が女装させた男との「デート」を、ここで切り上げることも多い。

相手の抵抗が強すぎるような時もそうだが、それ以上、相手が思ったほど美しく変身せず、垣内の方から手を引くことも少くないのだ。

しかし、清佳はもちろん、ここで手放すには惜しい存在だった。

：：ふふ、今夜はやはり、フルコースか。

垣内はそう思った。

そして、そう思ったからこそ、あえて言ってみた。

「食事も終わったことだし、じゃあ、そろそろ戻りましょうか？」

Friday

10:30pm

プロムナード「ロマンシングパス」

……この二時間半くらいの中に、この人はいつたい、  
いくらのお金を使ったのだろうか？

マネージャーを呼びカードを渡す垣内を見ながら、

清孝は、「ここもきつと、高いんだろうな」と思った。

と、垣内がこちらに向き直った。

「いかがでしたか？　満足していただけましたか？」

たった今、食事の値段のことを考えていたというのに、清孝は一瞬、その答えを見失った。

「……あつ、え、ええ。とてもおいしかったです。ごちそうさまでした」

すぐに気づき、そう返事したが——そしてそれは、

本心だったのだが——、清孝は、自分がまだ「満足」していかないような気もしていた。

垣内は、さつき、「そろそろ戻りましょうか？」と言った。

つまりそれは、このあと、あの「ターニング・ポイント」という店に帰るといふことだろう。ここからあの店までは——来る時のように寄り道さえしなければ——歩いて十分程度。あと十分で、この奇妙な「デー

ト」も終わるわけだ。

ずっと、こんなことは早くやめたいと思っていたのだから、ほっとする気持ちもあるのだが、でも……。

清孝が、そんな、どこか中途半端な思いにとらわれていると、マネージャーが、清算書を持って戻って来た。手早くそれにサインし、カードを受け取ると、垣内は「じゃ、行きましようか」と言った。

例によって、清孝を先に立たせ、出口に向かうよう

に促す。垣内の示す、そんな「レデイ・ファースト」の態度にもすっかり慣れてしまった。清孝は、ごく自然に「レデイ」としてそれに応えていた。

ホールの中を進む間も、ここに入ってきた時ほどの緊張やおびえはなく、ちらちら見てくる他の客たちの視線を無視して——いや、じつはじゆうぶんに意識しながら、むしろそれを楽しんで——歩いた。

垣内がクロークで例のレデイスシヨップの袋を受け

取っている時も、送りに出たマネージャーに対し、「ごちそうさまでした」という感じの微笑みを返したりした。

「ありがとうございます。またお越しく下さい」

また先に立って入口のドアをくぐりバルコニーに出たところで、清孝はちよつと振り返って垣内を待ち、そこから並んで歩いた。

そのすべてが、なんだか自然なことのように進んだ。

ただ、バルコニーから下りる階段まで来たところで、清孝はちよつと立ち止まり、躊躇ちゆうちよすることになった。ヒールの高いサンダルでそこを下りるのは、注意がいりそうだったからだ。

と、その時、清孝の前に、何気ない感じで肘を曲げた垣内の腕が差し出された。

一瞬迷ったが、そのあまりのタイミングのよさに、清孝はその腕につかまっていた。

そんなふうにして男の腕につかまって階段を下りて  
いる自分に、清孝はどぎまぎした。それだけではなく、  
ヒールが引つかからないように一歩一歩注意を払い、  
しかも、下の歩道を行く人たちを意識してミニスカ―  
トの裾にも気をつけなければならぬのだから、その  
緊張は、これまで以上だった。

しかし、清孝は、なぜかその動揺や緊張を、これま  
でのようにいやなことだとは感じていなかった。

歩道に降り立ち、そこで、垣内の腕にかけた自分の手はずそうかどうしようか迷ったことで、清孝はやつと、そんな自分自身の心境の変化に気がついた。

：：あれ？　僕はなんでこんなこと、平気な顔でしてるんだ？

垣内がその場にたたずんだまま、周囲を見まわしたので、その間、清孝もそのままの格好でちよつと考えた。

答えは、すぐ出た。

それは、あと十分でこの「デート」が終わることがわかっていいるからだ。

ここまで二時間半近く、こんな格好をして恥ずかしさに耐えてきたのだから、あと十分ぐらい平気だ。そう感じているからだろう。

清孝は、自分の変化をそう納得し、心の中でうなずいた。

そして、垣内の腕にかけた手は、そのままにしていようという気になった。

：：十分だけなら、それも面白い。

と、そこで、周囲を見ていた垣内が、通りの反対側の歩道を目顔で示した。

「車を拾うなら、方向から言って、あっちのほうがいいですね」

そう言って歩き出した垣内の腕に引っ張られるよう

に足を進めながら、清孝は「なんだ。タクシーで帰るのか。それなら、十分もかからないじゃないか」と思った。

垣内は、すぐ近くの交差点に向かっていているようだ。

たぶん、あの横断歩道を、反対側に渡るつもりなのだろう。

そう考えていると、案の定、垣内は、その信号待ちの人の群のところまで行き、並んだ。

垣内の腕につかまっただまま、そこに立っていると、やはりたくさんの視線を感じた。この時間になっても、周囲のビルのネオンのせいで昼のように明るいメインストリートの交差点。そんな場所で、この赤のワンピースは、いやが上にも目立つのだ。

先刻歩いた時より、さらに酔客が増えているせいだろうか。その視線は、ちらちら見てくるというだけではなく、露骨なものも多い。

ふと気がつく、今しがた横に並んだ若い男も、こちらの顔をじろじろ見ていた。

横目でうかがっていると、その男は、清孝の体の線に沿っていったん視線を下ろしたあと、ふたたび顔に戻した。

その視線が、あまりに露骨で、かつ間抜けな感じもしたので、清孝はちよつとからかつてやりたいたいような気分になった。それで、そちらを向き、にっこりと微

笑んでみせた。

男は一瞬たじろいだが、その清孝の表情に、自分が  
気があるとでも思ったのか、とたんに相好を崩した。

そこで清孝は、半歩後ろに下がる感じに体の向きを  
ずらした。それまで男の目からは隠れていた自分の手  
が見えるようにしたのだ。

男は、その手が垣内の腕にかけられていることにや  
っと気づいたようで、ちらりと垣内の顔に目を走らせ

たあと、むすつとした顔で、車道に向き直った。

「ちっ」と舌打ちする音も聞こえた。

……ふふふ、色目を使っても無駄よ。あたしには、この人がいるんだから。

清孝は、心の中で、そんなことを思っていた。

信号が変わり、人々が道を渡りだした。

その流れの中を、垣内の腕につかまりながら歩く清孝の心は、なんだか妙に弾んでいた。

夜の街の横断歩道。その白と黒の縞模様の上を行く、赤いドレスの自分。その姿はいやが上にも人目を引くだろう。信号待ちの車のライトの中に入った時には、服の生地が、一瞬パツと輝く。おそらくは、あの車の中からも、そんな姿に、視線が注がれているにちがいない。

ただ歩いているだけで、こんなに人から注目されるなんて、これまでの人生には、一度もなかったことだ。

そんな高揚感の中で、清孝は広い道を渡り終えた。

歩道に立つと、垣内はすぐに車道側に向き直り、タクシーを探し始めた。

そんな垣内を見て、清孝の心に、急にさみしさのよ  
うなものが襲った。今の高揚感が強かっただけに、そ  
の気持ちの落差は大きかった。

タクシーなら、「ターニング・ポイント」までほん  
の二・三分だろう。そこでこの服を脱いで、それで、

この茶番も終わる。そして、この……ときめきも終わるわけだ。

先刻までは早くそうしたいと思っていたにもかかわらず、清孝は、それがなにか虚しいことのように思えてきた。

と、車道に目を走らせていた垣内が、「うーむ、なかなか来ませんねえ」と言った。そして、清孝の方を向いて、こうつぶやいた。

「時間は、まだだいじよぶですか？」

垣内の言葉に、清孝は、頭の中でここから家までの経路を考え、答えた。

「え、ええ。乗換駅から先、電車をあきらめてタクシ―を使うつもりなら、この近くの駅の最終は、一時近くまであるはずですよ」

「そうですか。『ターニング・ポイント』は駅から遠いわけでもないし、着替えの時間を差し引いても、ま

だ、ずいぶんあるわけだ」

腕時計を見ながら独り言のようにそう言ったあと、垣内はふたたび清孝に目を戻し、きいてきた。

「それなら、もう少し、散歩でもしましよるか？」

その言葉に、清孝は、迷うことなくうなずいていた。

清佳はぜったいに「戻りたい」と言わないだろう。

垣内は、そう確信していた。

気づかないそぶりはしていたが、先刻の信号待ちで、清佳が隣の男に向かってどんなことをしたのか、垣内はしっかりと見ていたのだ。

まちがいなく清佳は今、「女であること」を楽しんでいる。

この楽しみを、そんなに簡単に手放すことはないだろう。

ここから先、自分は、それを手助けし、「完成」さ

せてやればよいのだ。

ただ、そこまで行くには、まだ越えなければならぬ  
ハードルがいくつもあるが……。

そんなことを考えながら、垣内は、「さて、じゃあ、  
どうしましょうか？」と言った。

「どこか店に入るにしても、もう満腹だし、酒ももう  
いいでしょう」

そんな垣内の言葉に、清佳は素直にうなずいた。

肘を持つという程度にしろ、未だこちらの腕を離さないところを見ても、ついて行くから任せたということだろう。

そこで、垣内はまた、今思いついたという感じの芝居を打った。

「そうだ。散歩ということなら、この先に、ちよつといい雰囲気の場所がある。そこへ行ってみませんか？」と、そこで清佳は、多少いぶかしげな顔をみせた。

先刻、レディスショップへ連れて行った時と同様のわざとらしい芝居に、さすがに怪しいと感じたのかもしれない。

それでも、けっきよく清佳はうなずいた。

そして、垣内が歩き出すと、やはり腕に手をかけたままにそれに従った。

今の楽しみをつづけるには、垣内に従うしかないと思っただろう。それに、たとえまた騙されたとして

も、決定的にいやな目に遭うようなことはないと考えたのかもしれない。

どうやら、その程度の信頼感は勝ち得たわけだ。

ふたたび街に行く間、清佳は、これまで以上に積極的に、それを楽しんでいるように見えた。

これまでも、女に見えるよううまく身をこなしはいたが、歩調などにどこか緊張した感じがあった。ところが今は、体全体から余分な力が抜け、リラックス

している。ヒールに慣れたせいもあるだろうが、歩き方がずっと自然でやわらかくなっているのだ。

「もう、どこから見ても、女ですね」

半分からかいの意味を込めて言った垣内のそんな言葉にも、平然と、「そうよ」という感じのまなざしを返してきた。

ただ、腕をつかみながらもけっして体を寄せては来ないその距離感が、垣内にはちよつと不満だった。こ

の先のハードルは、まだ高そうだ。

そんなことを思いながら、メインストリートの歩道を歩き、一方通行の細い道を横切った時だった。その道をちよつと入ったところに、まだ灯りの点った生花店があるのが目に入った。飲屋街の近くだから、きつと酔って気の大きくなった客が、なじみのホステスに、花を贈ったりするのだらう。

……こんな時間まで開いている花屋なんて、大都会

だからこそだな。

そんなことを思いながら数歩行ったところで、垣内は立ち止まった。

効果があるかどうかはわからないが、この距離感をちぢめるために、清佳に花を贈るのもいいかもしれない。

そう思ったのだ。

「すぐ戻ります。ちよつと、ここで待っててください」

垣内は、そう言った。

いきなりなにかを思いついたように、通り過ぎたばかりの路地に消えた垣内を見送りながら、清孝は首を傾げた。

たばこでも買いに行ったんだらうか？　会ってから一度も、たばこは吸ってなかったと思うけど……。

先刻、レディスショップに連れて行かれた時も、突

然思いついたというふうを装っていた。さつきもまた、同じような感じで歩き出したから、たぶん、これからの行き先も、もともと垣内が思い描いていた——というか、こんなことをする時いつも使う——場所なのだろうと思った。でも、今のは、これまでの様子とはちよつとちがっていた。芝居がかつたそぶりはなかつたのだ。おそらくは、ほんとうに、今なにか思いついたのだろう。

……でも、いつたい、なにを？

清孝は、垣内のあとを追って、その路地をのぞきに行こうかと思った。

こんなところにひとり取り残されて、また、ひどく不安になったからだ。

先刻から、女になって歩くことを面白いと感じるようになっていた。でもそれは、垣内がそばにいたからこそだ。こちらの正体を知っていて、なおかつガード

してくれる存在がいたから、安心してそれを楽しめたわけだ。

でも、こんな夜の街に、女として一人で立っているのは、男の時には想像できないほど心細い。まだ寒いという季節ではないのに、ネックラインやミニスカ―トから露出した肌が、急に冷たくなつた気がした。さつきまでは面白がっていた道行く人からの視線も、また、怖いと感じるようになった。

そんな不安の中で、垣内の消えた路地をふたたび見  
やった時だった。

「カクノジヨっ！」

清孝がたたずむ歩道の脇にスポーツタイプの車が停  
まり、そこから声が聞こえた。

声につられてそちらを見ると、その車の窓から、な  
んだかけばけばしい感じのTシャツを着た男が、身を  
乗り出していた。

「仕事帰り？　よかつたら送ってくよ」

ブリーチしたらしい髪と、薄汚い感じでまばらに生えた髭のその男は、清孝の実年齢より十歳近くは若いだろうか。清孝の全身を舐めるように見て、ミニスカートの脚に目をとめると、さらに顔をにやつかせた。

清孝は、無視した方がいいと思ひ、あわてて体ごと向きを変えた。

「なんだよお、そんなふうにしなくたっていいだろ」

男はそうに言いながら、なんと車を降りて近づいてきた。

一瞬、逃げ出そうかと思つたが、そうすれば逆に、男が追つてきそうな気もして、その場に立ちすくんだ。

「彼女、いくつよ？ 二十四くらい？ いくらなんでも、二十歳前つてことはないよな」

男は、清孝の前にまわりこみ、顔を突き出すようにしてにじり寄つてきた。

「そんな服着てるところを見ると、この近くのお店に勤めてんだろ。キャバクラ？ ソープ？ こんな時間に帰りだとすると、まだ新人さんってことかな？ すれない感じだしさ」

清孝は、男の顔を避けるように、たびたび向きを変えるのだが、そのたびに、男は前にまわりこんでくる。

「なんだよう、こっちがやさしくお話ししてるのに、シカトかよ」

清孝の態度に業を煮やしたらしい男は、そう言いながら、腕に手をかけてきた。

声を出すわけにもいかない清孝は、無言でそれを振り払うようにした。

と、男は、それに腹を立てた。

「すかしてんじやねえ、このスケ！」

あたりをはばからない大声で恫喝どっかつしてきた。

その声に、清孝は、思わず身震いした。

どう見てもただのチンピラ。しかも一人だけだ。男の時ならどうとでもしようはあると思つたが、肌の露出したこんな服を着ていると、それだけで、不思議と自分は無防備だという感覚に陥つた。頭ではなく、体そのものが恐怖を感じているのだ。

「いいから、乗れよッ！」

立ちすくむ清孝の腕に、男はふたたび手を伸ばした。

と、その時――

その男の腕をはじき飛ばすように、頑丈そうな体が割って入った。

「君、なにかね？」

垣内だった。

路地を出てきたところで清孝の窮状に気づき、駆け寄ったにちがいない。

清孝は、思わずその体に寄り添い、さらに後ろに隠れるようにした。

垣内はべつに身構えていたわけでもないのだが、その顔を見上げた男は、すぐになわないと悟ったらしい。目をそらしながらつぶやいた。

「なんだ、連れがいたのか。そんならそうと、早く言えよ」

その言葉とともに早々に車に戻った男は、いまいましげにドアを閉め、すぐに車を発進させた。

そこまで見届けたところで、張りつめていた垣内の

全身の筋肉から、すっと力が抜けた。そして、清孝にそれがわかったのは、垣内の背中にしがみつくように手を掛けていたからだだった。

そんな自分の行為に気づき、どぎまぎして一歩退いたところで、垣内が振り返った。

目を上げると、垣内は、男に向けていたはずの目つきから一転して、心配そうな表情を向けていた。

「だいじょうぶ？」

垣内にきかれ、こつくりとうなずきながら、清孝はさらにその顔を見上げていた。

それが、すがるような甘えるようなまなざしになっているのは、清孝自身にもよくわかっていた。でも、最前の、体そのものが感じた恐怖の残響が、清孝の顔つきを、どうしてもそんなものにしてしまうのだ。

「すまない」

そんな清孝のまなざしに、垣内は、まずそう言っ

詫びた。

「ちよつと驚かそうと思つて、君を一人にしたのがま  
ずかった」

清孝を呼ぶ垣内の言葉が、さつきまでの「あなた」  
から「君」に変わっていた。清孝はそれに気づいたが、  
なんだかそう呼ばれる方が自然な感じがし、そのこと  
には抵抗を感じなかった。それよりも、今垣内が言っ  
た別の言葉の方が気になった。

「驚かす……？」

「あつ、ああ、これを……買って来たんです」

垣内は、そう言つて、サイドバッグと紙袋を持つのは反対の手に持っていたものを、清孝の目の前に差し出した。

透明なセロファンできれいに包まれたそれは、三十本ほどのバラの花束だった。

「プレゼントのつもりが、とんだお詫びの印になつて

しまったみたいですね」

「そんな……」

清孝は、そう言いながら、その花束を受け取った。

「さつきは、思わずこの花束で、あの男を殴りつけそうになって、すんでのところどころでこらえたんです」

笑いながら言った垣内の言葉を聞きながら、清孝は、花束を両手で抱くようにかかえていた。

なんだか、妙にうれしかった。

最前まで残っていた恐怖感も、どこかに吹き飛んだ感じだ。

日頃、女性が花を贈られて喜ぶのを見て、その心理がよくわからないと思っていた清孝だが、今、実感としてそれがわかった気がした。

自分が花をもらうのにふさわしい人間だという、そのこと自体に、心が浮き立つ。その花と自分が一体化したような、そんな気持ちになった。

実際、その花の色は、今、清孝が着ている服と同じ色だった。

「ありがとう」

清孝は、弾んだ声で言っていた。

そして、ふたたび、垣内の腕に自分の腕をまわした。

花束を抱えているせいもあつたが、その腕の組み方は、さつきまでの浅いものとは違い、抱くような、すがるようなものになっていた。

垣内がふたたび歩き出すと、清佳は、ぴったりと寄り添ってついてきた。

そして、歩きながら、たびたび胸に抱いたバラに目をやった。

本来男である清佳が、花を贈られ、ここまでうれしそうにするとは、垣内にも予想外のことだった。

それはおそらく——やはり予想外だった——さつき

の出来事が影響しているのだろう。

今夜は、なんだかラッキーなことが重なる日だな。

：：いや、いちばんのラッキーは、この清佳と出合えたことか。

そんなことを考えているうちに、いよいよ次の目的地が近づいてきた。

メインストリート沿いのビルの狭間に、けっこう丈の高い樹が植えられた場所が見える。もう少し近づけ

ば、二本の樹が門柱よろしく立っていて、その間に、奥に向かう道がつづいているのがわかるはずだ。

その道に敷かれた敷石が見えかけたところで、垣内は「あそこです」と指さしてみせた。

と、清佳が、そこにあつた案内看板に目をとめ、それを読んだ。

「『浪漫の小径』……?」

「ええ、そんなしやれた名前がついているようですね」

いかにも、ここが造られた一九七〇年当時、地方自治体が考えそうなネーミングだとは思ったが、そんなことを言っつけてせつかくの雰囲気を壊すのも馬鹿馬鹿しいと思います、垣内はそれだけにとどめた。

「：：へえ、こんな街の真ん中に、こんな場所があったんですね。全然知りませんでした」

その道の奥行きが見えたところで、清佳が驚いたように言った。

途中、何カ所か緩やかにカーブしているので最終地点までは見えないのだが、幅二メートルほどの敷石の道が、ビルの谷間に延々とつづいている。そして、その道にアーチを架けるように、入口の樹と同じような高さの樹がずらりと並び、まるで森の中の小径という風情なのだ。もともと、道を挟んだ両側の植え込みに一重に植えられているだけだから、その樹の間から、すぐ近くまで迫るビルの裏口が見えたりはするのだ

が。

「うわあ、すごい」

垣内に寄り添ってその道に足を踏み入れながら、清佳が声をあげた。

本人は気づいているのかいないのか、その言葉の抑揚が、まるで若い娘のようになっていた。この場のムードが、そうさせたのだらう。

区の公園施設だからとところどころに街路灯が設置さ

れ、また枝の間から外の明かりも漏れ入ってくる。だから、けっして暗いわけではないのだが、人影の見えない樹のトンネルを、こんな服を着て——しかも、男の腕をとって——歩いているというシチュエーションが、清佳の人格をさらに変えていっていた。

「ここはね、僕が高校生の頃まで、路面電車の線路だったんですよ」

垣内が言うと、清佳はすぐそばからこちらの顔を見

上げ、繰り返した。

「……路面電車？」

「ええ。順にバスや地下鉄に代わっていきましたけど、その頃まで、まだ街の幹線道路には、けっこう走ってました」

清佳の実年齢から考えても、生まれるか生まれなにかという頃だ。そんな風景の記憶などないだろうなと思いつつ、垣内は答えた。

と、清佳は、ちよつと不思議そうな顔で道の前後を見やった。

「……でも、こんなところに？」

街の区画の中を横切って、ビルの裏手しか見えないこんな場所に、なぜそんなものが通っていたのかと思つたようだ。

「もちろん、客が乗る正式な路線は、さっきまで歩いてたメインストリートを走ってたんです。でも、この

先三百メートルほどの場所に大きな車庫と操車場があつてね。そことの間をつなぐ引込み線が敷かれていた」

「あ、じゃあ、ここは、空っぽの電車が往き来してた……？」

「そういうことです。で、こここの路線が廃止になった時、その跡地を区が遊歩道にしたというわけ。だから、その時に植えられた樹が、今は、こんな高さになつて

るんです」

垣内の説明にうなずいたあと、清佳は道の両側の樹を見上げるようにして、「静かですね」と言った。

「ちよつと入って来ただけで、車の音も聞こえなくなつたし……」

「うん。昼間は子供が自転車で遊んだりするんだけど、夜は、独特の雰囲気があるでしょう」

そんな会話をつづけながら、垣内は、ちよつとあせ

り始めていた。

こんなことばかり話しては、次に進めない。

大きな街区の一区画を斜めに横切つているとはいえ、この散策路がそんなに長いわけでもないのだ。もう三分の一くらいは来てしまっただろうか。この道を通り抜ける間に、清佳に、次のハードルを越えさせなければならぬ。そのためには、もつとムードのある会話をしなければ……。

そう思っていると、さっきの垣内の言葉を受けるように、清佳がつぶやいた。

「ほんとに、不思議な感じのところですな」

そして、こうつぶけた。

「なんだか：：お伽話にでも出てきそうな」

「えっ、お伽話？」

清佳の口から妙にかわいらしい——まるで女の子のような——単語が出たことに期待感もあり、垣内が聞

き返すと、清佳は、道の前方を透かして見るような目をして、さらにつづけた。

「たとえば、この道を抜けると、シンデレラのお城があるとか……そんな感じ」

その言葉に、垣内は、思わず声を立てて笑っていた。

そこにあつた、ある「符合」がおかしかったのだ。

……この道の向こうに……シンデレラの城は……たしかに、ある。

ところが、その垣内の笑いを、清佳はまったくべつの意味にとった。

「……あつ、なんか僕、ものすごく変なこと口走ってますね」

その言葉に、垣内が急いで笑いを引っ込めて見やると、清佳は、赤い顔をして目を泳がせていた。

「こんな格好して花なんか持つてるから、なんだか、発想までおかしくなつてく……」

その声のトーンが、元に戻っている。

そして、今気づいたというように、垣内の腕から手を離した。

：：しまった！

垣内はあせった。

せっかくいい方向に行きかけていたものを——それを——それ  
も、清佳自身がそうしていたものを——、自分の方か  
ら台無しにしてしまったようだ。

清孝はうろたえていた。

さっきのレストランを出たあたりから、女装していることが面白くなっていた。それまでの抵抗感もなくなり、文字通り、「女」としての体験を楽しんでいた。

あのチンピラにからまれた時はちよつとひやひやしたが、そこで垣内に助けてもらったり、そのあと花を贈られたりしたことで、気分としても「女であること」

を味わえた気がした。それはなんだか、わくわくすることだった。

でも、そのせいで、自分の思考まで完全に狂ってしまったようだ。

この道を歩き始めた時など、すっかり「女の子」になっ  
ていた気がする。こんな道を、男と腕を組んで歩  
くことで、なんだかロマンチックな気分になったりし  
て……。

周囲の人の目がなくなつたことで、客観的な目を失い、恥ずかしさをすっかり忘れていたようだ。

まったく、三十過ぎのいい歳の男が、なんて馬鹿なことやってるんだ。こんな、花なんか抱いたりして：  
：。

まるで夢から醒めたような感覚で、清孝はそのバラの花束をいまいましがげに見やった。

と、そこで、横を歩く垣内がちよつとあせつたよう

に言った。

「ちつともおかしいことなんて、ありませんよ」

「……？」

未だ恥ずかしい思いで、うかがうように見ると、垣内は、真顔でこちらを見つめてきた。

「いや、僕は、あなたの言ったことに笑ったわけじゃありません。誤解されたなら、あやまります。ちよつとあることを思い出して、それで……。失礼しました」

「で、でも、僕が今、変なことを口走っていたのは事実だし……」

「ですから、それは、ちつともおかしいことじゃないと言ってるんです」

清孝が、その顔をあらためて見ると、垣内はつづけた。

「さっきのあなたは、とても自然でした」

「自然……？」

「ええ。あなたの言った感想は、その赤い服にもバラにも、よく似合っていた」

「いや、ですから、こんな服のせいで僕は……」

「そうですね。その服装のせいで、あなたは女の子っぽい発想をしたのでしょう」

垣内の口から「女の子っぽい」などといわれ、清孝は、また恥ずかしさが募る思いがした。

「でも、それを恥ずかしがる必要なんてないんじゃないかな

いですか？　だつて、それが目的でもあつたんだから」

「えっ？　……目的？」

「ええ。もちろん最初はいやがつていたにしても、さつきからあなたは、女装していることを楽しむ気になつていたんでしょ」

「え？　……ええ、まあ」

素直に認めるのはしやくな気もしたが、いまさら反論してみても、もはや見え透いていると感じ、清孝は

うなずいた。

「ただ女の服を着るだけなら、そんなのは仮装行列と変わらない。あなたが楽しもうとしていたのは、女性の気分を味わうということでしょう。その中には、当然、自分の気持ちということも含まれるんじゃないですか？　女になった自分の気持ちを知りたい。女になった自分は、どんなふうに感じ、どんなふうに考えるのか？　女の服を着ること自体が目的なんじゃないか？」

て、むしろ、目的はそっちだと思っんですよ」

「……」

垣内一流の理屈だと思った。でも、たしかに自分が楽しんでいたのはそういうことなのだとも感じ、清孝は黙って聞いていた。

「だとしたら、それを恥ずかしがる必要なんてどこにもないでしょ。それをふくめて楽しめばいいんです。さっきのあなたは、ほんとうに自然でした。ここまで

あなたに女装を勧めてきた僕が、それを笑うと思いま  
すか？」

それはそうかもしれない。垣内が笑ったのは、垣内  
自身が言うように、やはり違う理由だったのだろう。

「それに、そのあとのあなたの反応だって、ある意味、  
とても女らしかった」

「……えっ、どういうことですか？」

「だってそうでしょ。ちよつと笑っただけの僕の声に

対してさえ、あなたは敏感に反応した。おそらくその服のせい、あなたは今、とても感じやすく、傷つきやすくなっているわけです。それも、ふだんのあなたにはない感覚でしょ」

「なんだか、またすり替えられた感じはしたが、ふだんの人間関係の中で、相手の言葉ひとつひとつにこんなに心が揺れることがないのも事実だった。」

「いずれにしても……」

垣内はそこで、腕時計に目をやりながら、語調を変えた。

「あなたの終電の時間を考えても、楽しめるのは、せいぜい十二時くらいまででしょ。あと一時間と少し。

その間は、恥ずかしがったりせず、そんな女の子の気持ちを満喫してもいいんじゃないでしょうか？」

そのあと垣内は、ふたたび清孝の顔を見つめて、こう言った。

「僕のためにも、あともう少しの間、女をやっつけてください」

清孝は、それにうなずいていた。

垣内の言ったことは屁理屈のような気もしたし、そうすることが、どうして「垣内のため」になるのかもよくわからない。それになにより、まだ照れも残っていた。

でも、「あと一時間」という言葉に、先刻、レスト

ランを出た時感じたのと同じような気持ちになったのだ。

あと一時間なら……、いや、あと一時間しかないのだから……。

そう思い、清孝は、ふたたび目の前に差し出された垣内の肘に手をかけた。

……それにしても、「十二時まで」なんて、それこそシンデレラだ。

清孝はそう感じ、ひとり苦笑した。

そんなふうにしばらく歩いたところで、垣内が、二の腕を清孝のパッドでふくらんだ胸に押しつけてきたのがわかった。先刻のように、もつと腕をからめろと  
いうことだろう。

その「胸」は清孝自身のものではないにもかかわらず、そこに感じた弾力は、清孝の体に「せつなさ」の  
ようなものを伝えていた。

それでも清孝は、すぐにはそれに従えなかった。

どうしても、まだ照れが残っている。

一度醒めてしまった夢想は、そう簡単には甦らない。

そのためには、もっと「言葉」が必要だ……と清孝は思った。さつきは、垣内の重ねた言葉にのせられ、やつとあんな気分になれたのだ。

それで清孝は、こんなふうに言ってみた。

「……僕は今、シンデレラになってますか？」

と、垣内は、期待したとおりの言葉を返してくれた。「ええ。あなたは、その花のように美しい……女です」清孝は、ふたたび垣内の腕に体をあずけ、甘えるようにした。

すでに遊歩道の出口が見えていた。

寄り添って歩く清佳をそつと見やりながら、垣内は頭を巡らせた。

さつきは、自分の失敗から、思わぬまわり道をしてしまった。まあ、最後は、清佳自身も「共犯者」のようになり、ムードをつくるのに協力してくれたから、決定的に予定が狂うことはなかった。しかし、無駄な時間を使ったぶん、次のハードルを越えさせるには、まだ条件が整っていない気がする。

ここまでに越えてきたのが自意識や社会通念から来る抵抗感だとすれば、ここから先越えなければならな

いのは、肉体の抵抗感だ。そこを越えさせるには、言葉やふつうの女装体験だけではなく、もつと鮮烈な、女としての「体感」が必要となる。

本来なら、この道のどこかで、清佳を抱きしめ、くちづけ、そんな「体感」を経験させてやらなければならなかったのだ。それでこそ、次の場所へ誘いざなうこともできる。

でも、もう、それは望めないだろう。なにか他の手



「さつきあの店で、もう一着買ったドレスです。これ  
を着たあなたも、ぜひ見てみたいな、なんて思いまし  
て」

「……えっ!？」

「この服も、あなたに似合うと思いますよ。今の服も  
女らしくて美しいけれど、こっちはきつと、かわい  
いあなたになれるはずです」

「で、でも……」

垣内の言葉に、清佳は、困惑の表情を浮かべていた。そして、その困惑は、「着てみたい」という気持ちだが、少なからずあるからに他ならなかった。

「今夜は、せつかくこんな体験をしているのです。あと一時間、あなた自身も、そんなあなたを見てみたいでしょ？」

「だけど……どこで？　着替える場所なんて、ないでしょ」

「いや、そんなこともないですよ。たとえば……」  
ちようどそこで、遊歩道のはずれに達し、目の前に  
また、車の行き交う道路が現れた。

「……あそこか」

そう言いながら垣内は、その道路の向かい側の、か  
つては路面電車の車庫だった場所を指さした。

そこに建っているのは……ヨーロッパの城郭風に外装  
を飾った……ホテルだった。

Friday

11:00pm

ホテル 「プレシヤスタイム」

「信号が変わります。急ぎましょう」

組んだ腕を引っ張るように横断歩道を渡る垣内に戸惑いながら、清孝は目の前の建物を見やった。

あれは、やっぱり……、どう見てもホテルだろう。  
ふつうのビルとはあきらかに違う、ちよつとごてご  
てした感じのその外観から、最初、清孝はラブホテル  
なのかと思った。

しかし、道を渡る途中、建物の一階にロビーやフロ  
ントが見えたことで、そうでないことはわかった。規  
模から見ても、それなりにはちゃんとしたシティホテ  
ルなのにちがいない。

ただ、歓楽街の裏手という立地から考えても、このデザインから見ても、おそらくその手の利用も多いはずだ。

「あの……、ここは……」

道を渡り終わったところで、清孝は足を止めた。

さらに先に行こうとしていた垣内が、それに引き止められ、組んだ腕を支点として、自然に振り向く形になった。

「……ん？　どうかしましたか？」

「ここに、入るんですか？」

「ええ」

垣内は、当然のことという感じでうなずいたあと、清孝の浮かない表情に初めて気づいたとでもいうように、つづけた。

「……あっ、変な誤解はしないでください。僕は、あなたがこのドレスを着たところを見たいだけです」

ホテルに誘う男のそんな言葉を、百パーセント信じ  
るほど、清孝は子供ではないし、それにだいいち……  
女ではない。

「いえ、でも、ホテルは……」

いやだと言いかけて、清孝はそこで口をつぐんだ。  
すぐそばを人が通り過ぎたからだ。

先刻のメインストリートほど通行人がいるわけでは  
ないが、ここも繁華街の一角ではある。この時間でも、

それなりに人が行き交っていた。

「何を心配してるんですか。だいいち、さつき言ったように、時間もそんなにないのだし。あなたが着替えで、この服を着たところを見て、それで終わりです」

垣内は、自分の言っていることに説得力がないことなど、百も承知の上で言っているように見えた。それは、ゲームを楽しむ、大人の男の余裕ということなのだろうか。

「それに、あなただって、大人なんだし、だいいち、あなたは……」

垣内は、そこまで言って含んだ感じの笑いを向けてきた。先刻、清孝が考えたのと同じことを、逆の意味で言いたいわけだ。

「その上、年だって、僕よりずっと若い。万が一にかがあつたとしても、僕なんて、どうとでもできるでしょう」

垣内の鍛えた体つきから考えてそれは無理な気もしたが、今の言葉に、清孝は、まるで若い娘のようにおびえている自分が奇妙にも思えてきた。たしかに、いざとなったら、逃げ出すことくらいできる気はする。

と、垣内は、そんな清孝の顔をのぞき込むようにして言った。

「あなただって、このドレスを着てみたいと思ってるんでしょ？」

もちろん、それに素直にうなづくことなどしたくはないが……。

先刻、垣内にドレスのことを持ち出されて以来、心が騒いでいる。

ふだんの自分からは考えられないそんな気持ちに、清孝がさらにうろたえていると、垣内は、組んでいた腕を抱えるようにして引つ張った。

「さあ、時間もないことだし……」

「でも……」

それに対して、清孝はやはり抵抗を試み、その腕を振りほどいた。

と、その時、清孝のすぐ目の前を、サラリーマンふうの中年男が通り過ぎた。男は、清孝の顔を、面白そうに、からかうような視線で見えていった。今、垣内の手を振りはずした時、その勢いで、清孝の体が、まるで「いやいや」をするような格好になっていたからだ

ろう。

：：今の男の目に、僕は、ホテルの前でゴネている女に映ったのだ。

無性に、恥ずかしさが募った。

と、そこで、垣内が「さあ」と言い、今度は清孝の肩に手をまわしてきた。

「こんなところでこんなことをしていると、もっと恥ずかしいことになりますよ」

そこにまた別の通行人が通りかかり、清孝は、その目を避けるようにして、垣内に抱かれたまま歩き出していた。

けつきよく清孝は、まるで絵に描いたように、「ホテルに連れ込まれる女」を演じていた。

：：脅したりすかしたり、なんだかみつともないやり口になってしまったな。

清佳の肩を抱いてホテルの自動ドアをくぐりながら、垣内は苦笑した。

本来なら、ここに来るまでに清佳自身を「その気」にさせ、もつとスマートに合意を取りつけるはずだったのに……。

ロビーに足を踏み入れた垣内は、そのままフロントに近づいていった。

垣内の腕の中で、清佳の体が緊張しているのがわか

った。その緊張は、黒服を着たフロント係の男が顔を上げこちらを向いた時には、さらに高まった。そつと見やると、清佳は、その男と目が合わないように、うつむいていた。

「いらっしやいませ。お泊まりですか？」

フロントの前まで行ったところで、男が声をかけてきた。

「ええ、まあ……」

女を抱いたまま応対するのはさすがにおかしいと思  
い、垣内は清佳の肩から手を離した。

「早々に帰るかもしれませんか、朝食はいりません  
が」

垣内の腕から解放された清佳は、それでも、その場  
から逃げ出すようなことはなく、男の目を避けるよう  
に、垣内の斜め後ろに寄り添った。

「ツインとダブル、どちらがおよろしいですか？」

そんなこちら二人の様子から、そして今の垣内の言葉から、フロントの男は、シングル二部屋とは思わなかったようだ。

「じゃ、ダブルで」

垣内がそう答えると、後ろの清佳から、また緊張する気配が伝わった。

「それでは、こちらに……」

男はそう言って、カウンターの上にレジストカード

を差し出した。

垣内がそれに書き込んでいると、フロント係は、カウターの下に目をやり、そこからキーをとり出した。その間も清佳は、身動きもせずそこにいた。書きながら、ちらりと目をやると、胸に抱いたバラを見ているようだった。

「七階の七〇六号室でございます。あちらのエレベーターでお上がりください」

キーを受け取り、振り向くと、清佳はちらりと目を上げ、すぐまたバラの花に目を落とした。

「さあ……」

垣内がふたたびその肩に手をまわしても、フロントの男の目を気にしてか、抵抗するようなそぶりは見せなかつた。

ロビーを進む間も、エレベーターを待つ間も、なにかを考えているようではあつたが、素直に従っていた。

エレベーターのドアが開き、乗り込んで、肩を抱いたまま向きを変えた時、垣内は、その顔をそつとうかがった。

青ざめているのではないかと思ったのだが、その頬は、逆に紅潮していた。

おびえてはいても、どこかに、これから起こることに期待する気持ちがあるからにちがいない。

垣内はそう感じた。

七階に着き、エレベーターのドアがチンと鳴った。

その音に、清佳の体がびくりと震えた。

エレベーターを降り、そのけっして明るくはない間  
接照明の廊下を進んでいく間、心臓の鼓動が次第に高  
鳴っていくのがわかった。

その鼓動が、肩を抱く垣内に伝わるのではないかと、  
清孝は気にした。

まさか自分が、男に抱かれ、こんなところを歩くな  
んて、思ってもいなかっただことだ。当然それは、身も  
世もないほど恥ずかしいことだった。だから、さつき  
は抵抗した。

でも……。

このホテルを見た瞬間から、けっきよく自分はここ  
に入るだろうと思っていた気もする。今日という不思  
議な日の締めくくりに、それにふさわしいクライマツ

クスを、心のどこかで期待していたようにも思うのだ。ロビーに立っている時から、清孝はそんなふうを感じ、いわば、覚悟を決めていた。

「706」と表示されたドアの前まで来て、垣内がキーをさし込むのを見ながら、清孝は、その覚悟を固めるとでもいうように、うなずいた。

このドアの向こうでどんなことが起こるのか。それはだいたい想像がつくし、だからこそ、こんなに動揺

もしている。でも、さっきの遊歩道で垣内が言っていたように、今僕は、そんな心の動揺も含めて「女であること」を楽しもうとしているのだ。そしてそれは、やはり垣内が何度も言っていた「自分が何者であるのかさえわからなくなるような不安」を楽しむというところででもあるのだろう。そんなぎりぎりのところで楽しむ「ゲーム」をきっちりクリアするためにも、この最終ステージへ進むことは、やはり必要なのだ。

それに、これも垣内が言い、そして僕自身も思つたように、こんな「ゲーム」を楽しむことができるのは、僕がじつは、「大人の男」だからこそだろう。それこそ、ぎりぎりのところで、自分を見失うことはないはずだ。

そんなふうになりながら、清孝は、ドアを開けた垣内に押されるように部屋に入った。

しかし次の瞬間、清孝のその覚悟は、脆くも揺らぐ

ことになった。

ドアを入ってすぐ横の壁に全身を映すミラーがあり、そこに、自分の姿が映っていた。そして、オートロックががちゃりと閉まる音とともに、垣内がその横に並んだ。

その鏡の中では――

グレイのブレザー・ジャケットの男の腕の中で、赤いドレスの女が、頼りなげに立っていた。服の生地がぴ

つたりと張りついたそのウエストは、男の体の幅の半分ほどにも見えた。ミニスカートから伸びた白いサンダルの足は、知らず知らず内向きになり、細いアンクルストラップが幅を余して浮いていた。女が抱くバラの花束のセロファンが、首筋のパールに触れ、かすかに震えていた。

そして女の目は、そんな自分を見て、心細げに揺れていた。

それは、まさしく、今、男とともにホテルの部屋に入ってきた「女」——けっして「大人の男」などではなく——だった。

清孝は、そんな自分の姿に動揺した。

その姿は、これから起こることに抗あうには、あまりにもか細く、かつ弱く見えた。そして一方で、そんなか細さや弱さが、逆に、男の気持ちをそそってしまった。うものであることは、清孝には、痛いほどわかった。

……このまま、逃げ出したい。

そんな気持ち募った。しかし、そんな気持ちに反して、垣内が抱いた肩を押した。

その力の強さが、清孝の体に、さらにおびえのようなもの走らせ、けつきよく、その力のままに、清孝は、バスルームとクローゼットが向き合う通路を抜け、部屋の中へと導かれていた。

そこは、どこにでもありそうなホテルのダブルル―

ムだった。

通路から入った部屋の左側ほぼいっぱいに、絹の刺しゅうのカバーでベッドメイクされたダブルベッドがある。正面の窓を挟んで、右手奥の壁にはチェストや背の低い冷蔵庫を収めた造りつけの収納ボードがあり、その手前側は、そのまま、壁に付けられた鏡とともに化粧台になっている。冷蔵庫やチェストの上には、ポットと茶のセット、そしてテレビが置かれている。

そのテレビの正面が向く、部屋の右手中央部に、一人掛けのソファが二つ対面して置かれ、その間にテーブルが据えられていた。

「うむ、シンプルだけど、落ち着いた部屋ですね」

垣内が言った。

まるでこのホテルに初めて来たように言うその言葉を、清孝は疑っていた。

おそらく、今日起こったことのほとんどが、垣内の

計画どおりだったのだろう。次々に引きまわされた場所も、垣内の頭の中でコースができていたのだ。あのレディスショップへ連れて行かれたあたりからずっと疑ってはいたが、先刻、このホテルを見た時点で、それを確信した。垣内は、その先にこのホテルがあることをよく知っていて、それで、あの遊歩道に誘ったわけだ。

だとすると当然、垣内はこれまでに、このホテルを

使ったことがあるはずだ。たぶん何度も。自分が女装させた男といっしよに。

清孝が、けつきよくはこのホテルに入る覚悟を決めたのは、そんな垣内の「ゲームのシナリオ」が読めたと思っただからでもあった。「シナリオ」がわかっていれば、ぎりぎりまでつき合って、逃げ出すこともできる気がしたのだ。

でも今は、その確信が揺らいでいた。垣内の次の「シ

ナリオ」が読めなくなっていた。自分が、あまりにも「女」になっているのを見たことで……。

「さて……」

垣内が言ったその言葉に、自分の肩がまた、びくりと震えたのがわかった。

しかし垣内は、そんな清孝のおびえなど気にもとめないように、抱いていた手を離した。

そして、持っていたサイドバッグと部屋のキーを、

ソファのひとつにポンと投げ出した。そのあと、レディスショップの紙袋は持ったまま、今入ってきた通路の方へ戻り、そこにあるクローゼットの扉を開けた。

その場に立ったまま見ていると、垣内は、クローゼットの床に紙袋を置き、それから、ブレザーを脱いで中のハンガーに掛けた。さらに、先刻買ったブルーのネクタイもほどいて首から抜き、やはりそのハンガーに吊した。

「ふーっ」

クローゼットの扉を閉めると、垣内は、ちよつとおどけたような顔でため息をついた。そして、そのままの顔を向けながら清孝の脇を通り、サイドバッグとキーを投げ出した方のソファまで行った。

清孝は、他にどうするわけにもいかず、やはり立つたまま、そんな垣内を目で追っていた。

ソファにかけた垣内は、その背もたれに体をあずけ、

清孝の顔を見上げた。

「……ん？　なにしてるんです？」

垣内は、穏やかな笑顔でそう言った。

その言葉に、清孝は、あらためて、今の自分の姿を認識することになった。

短いスカートの赤いワンピースでバラの花束を抱き、部屋の真ん中に突っ立っている自分。それは、なんだか、ひどく間の抜けた姿に思えた。

「……え、ええ」

清孝は一瞬うろたえたが、とりあえず、花束をテーブルの上に置き、垣内と対面するソファに腰掛けた。ソファに腰を落としたとたん、太腿の上をスカートが滑り、ずり上がったのがわかった。それが気になつた清孝は、そこを引き下ろすようにしたあと、真正面の垣内からスカートの中が見えないようにと思ひ、膝をぎつゆと閉じて、その上にハンドバッグを置

いた。それでもまだ心配な気がして、さらに体全体を  
はすにするように座り直した。座位の低いソファにそ  
んなふうに座ったことで、自然に、脚を斜めに傾けた  
腰掛け方になった。

清孝のそんな一連の動作を、どうやら垣内は、ずつ  
と見ていたようだ。

いったん垣内の方を見た清孝は、その視線に気づき、  
あわててテーブルの上に目を落とした。

「そんなにたいした距離じゃなかったとはいえ、あれだけ歩くと、やっぱりちよつと疲れますね」

垣内はのんびりした口調でそんなことを言い、さらに、こうつけ加えた。

「特にあなたは、慣れない靴で大変だったでしょう」  
「……え、ええ」

清孝はそう返事したが、それ以上会話を継ぐこともできず、垣内の次の言葉を待った。

ところが垣内は、それ以上なにも言つてこない。

その沈黙が、なんだか耐えられない気がして、もう一度ちらりと目を上げると、垣内は、例の穏やかな笑顔で、ただこちらを見ていた。

一瞬目が合い、ふたたび目を落としたが、それでも垣内はなにも言おうとしなかった。きつと視線だけは、ずっとこちらに向けているにちがいない。

こんなホテルの部屋で対座し、こんな姿を見られて

いることに、清孝は、落ち着かなさを募らせていった。

今日、やはりこんなふうには垣内とテーブルを挟んで座っていた喫茶店やレストランでは、周囲の目があり、それが清孝の動揺の理由になっていたわけだが、どうしたわけか、それがなくなつた今の方が、ずっと心が粒だつ。

：：：いったい、この人はなにを考えているんだ？

清孝はそう思った。

さつきまでは、口八丁手八丁という感じだったのに、  
なんで何も言わないんだ？。

ここに誘う時は、さかんに「時間がない」なんて言  
っていたくせに、部屋に入ったとたん、妙に落ち着い  
てしまおうし……。

だいいち、ここに入る理由にしていた、あのドレス  
さえ、クローゼットにしまったままじゃないか……。

垣内が何も言い出さず、何もしてこないことが、逆

に、清孝を不安にしていた。

そんなふうには、しばらくテーブルのバラの花を見つめていた清孝は、ふたたび目を上げて垣内をうかがおうとした。しかし、目が合うことが怖いような気がして、けっきよくは、視線を床に這わせ、さらに壁のボードに沿って動かした。と、そこで、ポットに目がとまった。

「……あ、あの……お茶、煎れましょうか？」

「ええ、お願いします」

垣内の返事は、昂ぶったところのまるでない、あくまでもふつうのトーンだった。

：：やはり、清佳自身がその気になるまで、待ってみよう。

間が持てないという感じでソファを立ち、茶を煎れ始めた清佳を見やりながら、垣内はそう思っていた。

ポットと茶のセットは、ちょうど垣内の座るソファの真横あたりの壁に置かれていた。だから、清佳は今、垣内のすぐ横で背中を向けている。けっして広くはないホテルの部屋のこと。赤いワンピースのヒップライントそこから伸びた太腿が、肘掛けにのせた垣内の手を、ほんの少し伸ばせば届く位置にあった。

でも、そんな、若い男のような力づくは、垣内の趣味ではない。

さつきまで目の前で不安げに目を泳がせていた清佳の仕草やその姿態は、これまで垣内が相手をしてきたどの女装者よりも女らしい。それは、本物の女にも負けるものではないだろう。いや、本物の女には、あれほど感じやすく、しかも儂はかなげな美しさは醸し出せない。

それを思うと、気持ちにはやるのだが、清佳を「女」として「完成」させ、今日の「ゲーム」を美しくクリ

アするためには、タイムリミットぎりぎりまで我慢してみたい。垣内は、そんなふう感じていた。

それに、なぜか垣内には、清佳は必ず自分の方から身を預けてくるだろうという確信があった。

と、ティーバッグの湯を切るようにしていた清佳が、ふたつの湯呑みを盆にのせ、向きを変えた。テーブルの上のバラの花束を脇へよけるようにしたあと、垣内の前と自分の席の前にそれを置く。そのあと、またい

つたん背を向け、盆を戻してから、清佳はソファに戻った。

「ありがとう」

湯呑みを手にとりながら垣内が言うと、さつきと同じようにスカート裾を直していた清佳は、すこし目を上げ、会釈する感じですぐに目を伏せた。

茶をすすりながら観察していると、清佳はまたしばらく落ちつきなく目を泳がせていたが、自らも湯呑み

に手を伸ばした。

その湯呑みを両手で包むように持って、口に運ぶ。

きっとふだんは、こんな茶の飲み方はしないにちがいない。

おそらく、こうでもしないと、手の持って行き場がなかったのだらう。そして、それ以上に、この不安定な状況が、清佳を、いよいよ「女」というカテゴリーに追い込んでいくということだ。

垣内が、湯呑みの中の茶をすっかり飲み終わり、それをテーブルに戻したあとも、さらに黙って見ていると、清佳の方も湯呑みを置き、また所在なげに目を泳がせた。そして、そこに置かれた花束に目をとめると、もう沈黙が耐えきれないというように「このバラ……」と言った。

「……こんなふうにしておいて、枯れないかしら？」  
そう口にしてから一拍置いて、清佳は、ハツとした

顔をした。今自分の言った言葉の語尾が、おかしなものになっていたことに気づいたのだろう。

このシチュエーションが、そして花のことなどを話題にしたことが、清佳の人格を、また少しシフトさせていた。

そのことにおたおたする清佳を見て、垣内は思わず笑い出しそうになったが、それをぐっところえ、平然とした声で返事した。

「水を滲しましたスポンジを入れておいたから、明日の朝くらいまではもつと、花屋は言っていましたよ」

まるでその言葉が届いていないかのように、清佳はさらに落ち着かなそうに目を泳がせ、その途中、一瞬、垣内の方に恨めしげな視線を送ってきた。

むしろ、今の言葉づかいのおかしさを、垣内が指摘してくれた方がよかったのに……ということだろう。

もはやおろおろするという感じで、膝の上のバッグ

をいじりはじめた清佳を、それでも垣内は、放っておいた。

と、清佳は、そのバッグの持ち手を握りしめるようにして、「あの……」と言った。

そして、うつむいたまま、つぶやいた。

「……着てみましようか、あの服？」

「ええ、そうしてください」

垣内の返事に、清佳は、まるで弾かれたようにソフ

アを立った。

そして、手にしていたバッグを持ったまま、小走りに通路のクローゼットまで行った。そこから紙袋を取り出す清佳を見ながら、垣内は思った。

：：ふふ、「彼女」は、まちがいなく抱かれる気になっっている。

クローゼットの扉を閉め、向き直ると、バスルーム

のドアはすぐ目の前にあった。

清孝は、そのドアノブに手をかけ、中に入った。

トイレと洗面台とバスタブがセットになった、やはりどこのホテルにでもありそうなそのバスルームは、しかし、ダブルの部屋らしく、ドアの内側から鍵がかかるようになっていた。ドアを閉めたあと、清孝は、その鍵のつまみをひねった。もちろん、着替えている姿を垣内に見られたくなかったからだ。

洗面台の鏡に向き直り、そこにハンドバッグを置いたあと、清孝はひとつ大きなため息をついた。

なんだかひどく疲れた気がした。動揺したり緊張したりすることばかりだった今夜の出来事の中で、この部屋に入ってからの十分ほどの時間が、最も長く感じられた。

いわばそこから逃げてきたわけだが、垣内に追い込まれたという感じも強い。

部屋に入った当初は、垣内に押し倒されるのではないかというおびえを抱いていたが、どうやら垣内は、そんな暴力的なことをしてくるつもりはないらしい。しかし、そのぶん、清孝の想像を超えた戦法を繰り出してきていた。

けつきよく僕は、今夜、あの人の操るままに動いてるってことか……。

清孝はそう思い、ふたたび大きなため息をつくと、

ぶら下げていたレデイスシヨップの紙袋を、便器のふたの上に置いた。

：：そして今度は、お望みどおり、この服を着ようとしてゐるわけだ。

そんな自分を心の中で呪いながら、清孝は、袋の中からそのピンクのキャミソールドレスをとり出し、両方のストラップを持って吊してみた。

しかし、そのフリルで飾られたドレスをふたたたび目

にして、清孝は、それがけっして垣内の「望み」ばかりではないことを、認めざるを得なかった。

これを着たら、今度は、どんなふうになるのか……？  
そのドレスは、あのレディスショップで見た時以上に、清孝に着られることを待っているような気がした。

清孝は、ドレスを見ながらひとつうなずき、いったんそれを、紙袋の上に掛けるようにして置いた。

あの時、試着室で気づいたように、この服を着るに

は、その前にやらなければいけないことがいくつかあった。先にそれをしようと思ったのだ。

もちろん、まずは、今着ているワンピースを脱がなければならぬ。清孝は、スカートの裾に手をかけ、それを体の線に沿ってたくし上げた。バストのあたりまで上げたところで、七分袖から両腕を抜き、さらにウイッグを引っかけないよう注意しながら、ネックラインを頭から抜いた。

脱いだワンピースを簡単にたたみ、洗面台の上に置くと、その鏡に、ブラジャーとショーツ姿の自分が映っていた。

そんな姿を見ても、もうさほどの動揺もない自分にちよつとあきれながら、清孝は、背中に手をまわし、苦勞しながらブラのホックをはずした。

ブラが緩んだとたん、カップの中のシリコーンパッドがずり落ちそうになった。あわててアンダーバスト

に片腕をあてがって押さえ、もう一方の手で二つのパッドを順に抜き取る。それを洗面台の上に並べてから、やつとストラップから腕を抜くことができた。

そこで清孝は、手にしたそのブラに顔を近づけ、もう一度よく観察した。

やはりあの試着室で考えたとおり、ストラップをはずすことができるようだ。カップの内側にあるのと同じ留め具が、背中側にもついている。そこで清孝は、

四か所の留め具をはずし、二本のストラップを取り除いた。

そのあと清孝は、ストラップレスになったブラをふたたび体に巻きつけた。

背中のホックは、はずすのも大変だったのだからと思ひ、体の前側でとめておいて、ブラの端を引っ張りながら、ぐるっとまわすようにした。そして、洗面台の上からふたつのパッドを取り、ふたたびカップの中

におさめた。

ところが、ストラップがなくなつたぶん、なんだか安定が悪い。しかも、パッドの重みで、ブラがずり落ちていくような感じもした。そこで清孝は、ホックがもう一段内側にもついていたのを思い出し、そちらにはめ直してもつときつく締めようと考えた。それでけつきよくは、鏡の前で体をひねり、苦勞して背中の中のホックをはめ直すことになつた。

なんとかその作業も終え、ブラの締めがきつくなつたことで——まだ多少心もとない感じは残ったが——パッドも落ち着き、清孝は最後に、そのふたつのふくらみを両手でもって、「位置」を調整した。

もちろん、そんなことをしている自分の姿を鏡で見ているのは恥ずかしいものだったし、また、どこか妙な興奮をするものでもあった。しかし清孝は、それらの作業を、できるだけ「作業」なのだと思うようにし

て、つづけた。

「さて……」

そんなふうにして「バスト」ができあがったところで、清孝はちよつと考え込んだ。次の「作業」をするには、ある種の決心が必要だった。

腋毛を剃らなければいけないのだ。

おそらくあのドレス姿を見られるのは垣内にだけなのだから、そのままでもいい気もしたが、だからこそ

——なぜだか——きれいにしておきたいという気になつた。

鏡に向かつてうなずいた清孝は、洗面台の上のシェーバーをとつた。

着替えだけなら、もう出てきてもいい頃だ。

腕時計に目をやりながら、ソファの垣内はそう思つた。

垣内が当初から考えていた——そして、清佳を導く口実に何度か使った「終電」への——タイムリミットは、十二時。残り時間は、あと四十分ほどだ。

当然、あせる気持ちもあったが、今は待っているしかない。

そう考えながら、あのドレスを着た清佳の姿を思い描いたところで、垣内は気がついた。

：：：そうか、清佳は、腋毛の処理をしているのかも

しれない。

そして、「それならば……」と考えた。

……さつき思ったことは、まずまちがいないだろう。

そこで垣内は、脇に置いていたサイドバッグを手に取り、中を確かめた。そこにある物が入っているのを確認し、ふたたびファスナーを閉じる。

それから、それを持ってソファを立ち、ベッドサイドまで行った。

ラジオやアラーム、空調のコンソールが組み込まれたそのベッドのヘッドボードには、ティッシュを据えた棚もある。垣内は、「その時」のために、そこにサイドバッグを置いた。

さらに、やはり「その時」邪魔になるだろうと考え、ベッドカバーをはずし、肌布団もたたんでおいた。

髭でさえ四日に一度剃ればすむという、もともと体

毛の薄い質の清孝だ。腋毛が生えていると言っても、さほど多いわけではないし、毛自体も太くない。その作業は、意外と簡単に終わった。

両手を頭の上のにのせ、何もなくなつた両腋を鏡で確認しながら、そこで清孝は、もう一度、ほんとうにこんなことをしてしまつてよかつたのだろうかと思つた。はたして、日常生活に支障はないだろうか？

：：仕事中はずっと背広姿なのだから、腋の下を露

出すことはまずないだろう。定期検診も先月終わつたばかりだ。もう夏は過ぎ、これからは涼しい季節になるのだから、休みの日にタンクトップを着るようなこともない。着替えや入浴の時にさえ気をつけていれば、ふたたび生えそろうまでの間、妻に目撃されることもないはずだ。あと問題があるとすれば、妻との交わりの時だが、それもこの頃ではたまにしかないし、だいいち、その時妻は——自分の欲望を満たすことだ

けに夢中で——清孝の腋の下になど関心を持たない気がする。

そう思つてうなずいた清孝は、そこでいよいよ、ピンのドレスを取り上げた。

今日ここまでに着た服以上に経験のないその服の形を、どういう手順で身につけていけばいいのか。清孝は、まず頭の中でシミュレーションしてから、それにとりかかった。

筒状になつた服の生地を輪の形に両手でまとめ、前後に気をつけながら、頭からかぶる。それが肩のあたりに引っかかつたところで、片腕ずつ通し、ストラップを肩にかける。今度はバストの上で引っかかつていた生地を——パッドとブラの位置がずれないように気をつけながら——そつとかぶせるように引っ張り下ろしていく。先刻まで着ていたワンピースよりさらに短いその裾が、太腿のところまで下りたところで、生地全

体のねじれを直す。

服の構造どおり意外と簡単だったその作業を終え、  
そこで清孝は、鏡を見た。

そして、目を見張り、息をのんだ。

その服は、あの赤のワンピースとはまた、まったく  
違う魅力を清孝に与えていた。

さつき垣内が言っていたように、その姿は「かわい  
い」のだ。

薄いなで肩に、今にも落ちそうな感じでかかったピ  
ンクのストラップ。

そのストラップに吊られた何段もの細かいフリル  
が、バスのふたつのふくらみをやわらかく包んでい  
る。

やはり生地ストレッチがかかっているのだろう。

そのバストの下からは体のラインに密着し、細いウエ  
ストが強調される。

腰骨のあたりからは、今度は三段ほどの大きなフリルが施され、ヒップをぐるりととりまく。

そんな十代の女の子のようなデザインが、不思議なことに、清孝が着ていると少しもおかしくならない。

もちろん十代には見えないまでも、たとえば、ちよつとおしゃれなガーデンパーティーに招かれた二十歳そこそこのかわいい娘という感じなのだ。

それはやはり、この薄い肩のおかげだろうと、清孝

は感じた。ふだんは隠されているその肩の線が強調されたことで、清孝は、性別を超えたばかりか、年齢をも十歳以上さかのぼってしまったらしい。

鏡に映ったその姿をしばらく呆然と見ていた清孝は、そこで、あのレストランの化粧室で化粧直しした時のことを思い出した。

あの時、バッグの中に見つけたもう一本の……ピンクの口紅。この服には、あの口紅の方が似合うだろう。

そう思った清孝は、ハンドバッグを開け、その口紅を探し出した。

ホテル備えつけのティッシュで今の口紅を拭い、さらに、バッグの中からまた紅筆をとり出し、やはりその毛先に残っていた口紅をきれいにふき取ってから、そのピンクの口紅を塗り直した。

そのあと清孝は、妻が出先で化粧直ししていたところを思い出し、油紙を取り出してファンデーションを

押さえ、コンパクトを出してパウダーをはたき、さらにそのせいで薄くなってしまったチークをつけなおした。

さすがにアイメイクに手を入れることはできなかつたが、その口紅はまちがいに服に合い、清佳の顔をさらにキュートなものに変えていた。

すべての作業の最後に、清佳は、ヘアブラシをとり髪を整えた。ウイッグなのだから、もちろんそんなに

イメージが変わるわけではないのだが、サイドの髪を耳の後ろに架けてみると、そのことで額に垂れた前髪が強調され、さらに、パールのイヤリングとネックレスの印象がはっきりと前に出て、かわいらしさが増したような気がした。

化粧台の上に散らかった化粧品をバツクに戻し、ただんだワンピースを紙袋にしまったところで、もう一度鏡を見た清孝は、そこで、一步後ろに下がるように

した。その鏡には、腰のあたりまでしか映っていない。スカートから出た脚まで含め、もつと全身が見てみただけだ。思ったのだ。

しかし、ドアのまぎわまで後退しても、その鏡には脚は映らなかつた。

そこで清孝は、この部屋に入ってくる時見た壁の姿を見を思い出した。あの鏡なら、まちがいに全身が見られる。

そう思った清孝は、ドアの鍵を、音がしないように気をつけながら開けた。いずれは見られるにしても、この姿をいきなり垣内の前にさらすのが恥ずかしい気がしたからだ。

垣内の座る位置からだ、クローゼット側の壁は見えても、こちら側は見えないはずだ。このバスルームのドアを薄めに開けてすり抜ければ、気がつかれずに、あの鏡の前までたどり着けそうだ。そう考えたのだ。

そつとドアを開け、通路に出てみると、やはり垣内が気づいた気配はなかった。それで、そのまま壁に張りつくように入口のドアのそばまで行き、清孝は、その姿見に目をやった。

そこに映っていたのは、バスルームの鏡で見た以上にキュートな「女の子」だった。

それは、さっきの肩の印象に、脚の印象が加わったからだろう。

ひざ上三十センチ近いそのスカートから出た太腿は、ちよつと薄暗い通路で、なんだかそれ自体が輝いているように見えた。そこから微妙な曲線でつづく形  
のよい膝、さらにすらりと伸びたすね。その先のアンクルストラップのサンダルは、さっきの服より、むしろこのドレスに似合つたかわいらしさだ。

そこからふたたび上半身へと目を戻した清孝は、さつき剃つた腋の下がこのキャミソールドレスにどんな

ふうに映るのか、それが見てみたくなって、両手の手首あたりが頭の上で交差するような形で腕を上げてみた。

ピンクのドレスのトップラインから真っ直ぐ上に伸びた、胴から二の腕の内側へとつづく肌は、その白さをさえぎるものが何もなく、さっきの太腿以上に輝いて、かわいらしく見えた。

それが、なんだかうれいことのように感じた清孝

は、そのまま、首を少しだけ傾げ、腰のあたりをひねって、ポーズをとっていた。さらに、サンダルの立ち位置をずらしてみたり、両手を頭の後ろで組み首や肩を左右に振ってみたりして、自分がよりかわいらしく見える姿勢を探った。

と、その時だった――。

「かわいい……ですね」

その声にそちらを向くと、思わぬ近さに垣内が立つ

ていた。

ポーズをとることに夢中になり、垣内が近づいたことに気づかなかったようだ。

自分がそんなことをしているところを見られたことにまずひどく照れ、そして、こんな服を着た姿を凝視されていることに恥ずかしさが募り、清孝はあわてて頭の手を下ろそうとした。

と、そこで、垣内が「そのままです！」と言った。

その声の強さに、清孝の体は、文字通りポーズした。  
「ほんとうに、信じられないくらいかわいらしいですよ」

そう言いながら、垣内は近づいてきた。

「しかも、無垢の美しさに輝いている」

さらに間近に迫った垣内を、そんな、露出した肌や胸のふくらみを強調してしまう姿勢で見上げ、清孝は、このまま自分が搔き抱かれるのでないかというおびえ

に、思わず体を固くした。

しかし垣内は、清孝の体に触れようとせず、清孝の背中側にまわりこむように移動した。そして、清孝と後ろの壁の狭い空間に、体を入れてきた。清孝のすぐ後ろに、自らも鏡に向かって立ったのだ。

「……顔も、腕も、それに脚も、すべてが、まるで美術品のように美しい」

垣内は、鏡の中の清孝の体にゆっくりと視線を這わ

せ、そう言った。

その言葉に、清孝はいったん鏡の中の自分の顔に目を戻したあと、すぐに目を伏せた。

と、その視野に、鏡に映る垣内の両腕が入った。ライトグレーのカッターシャツの袖を通して筋肉の所在がわかるほど、その腕は逞しい。

清孝は、その腕が、すぐに自分の体の前へまわされ、力強く引き寄せられるのではないかと感じた。

しかし、その腕は両脇に垂れ下がったまま、相変わらず清孝の体に触れてこない。

「……ことに、この肩。こんなドレスが、よく似合う」  
清孝は、緊張しながらも垣内の言葉につられ、また鏡に映った自分の姿に見入っていた。

と、垣内は、その視線を、鏡ではなく清孝の肩に直接落とし、つづけた。

「これは……男を知らない、少女の肩です」

垣内が下を向いてしゃべったせいで、その息が清孝の裸の背中を走った。

：：あ：：ツ：：！

清孝は思わず頭の後ろで組んでいた手を離し、肩をすくめ、体を震わせた。

そんな清孝の表情をすかさずとらえ、垣内が言った。

「ふふ：：、清佳はやっぱり、背中が感じやすいんですね」

その垣内の言葉に、清孝は、背中に感じたしびれが全身に広がり、駆けめぐらるのを感じた。

いや、そのしびれは、その前に垣内が言った「少女」という言葉のせいだったかもしれない。

：：：そう、僕は：：：あたしは：：：、なにも知らない  
：：：少女。

だから：：：。

清孝は、その垣内の太い腕で、抱きすくめられるの

ではないかと、おびえた。

垣内の手が、いつ自分の腰や胸にまわされるのかと、それを……恐れた。

垣内の唇が、いつ自分の肩や首筋に触れ、そこを這うのかと、それを……、……待った。

垣内が、言った。

「さあ……、おいで」

その言葉に、清孝の体は、くだけるように半回転し、

垣内の体に向かつて倒れ込んだ。

そこで初めて差し出された腕に受けとめられ、その力強さの中から清孝が見上げると、垣内の顔が近づいてきた。

清孝は、自ら求めるように、その唇に応えていた。

垣内の舌が唇を割って入ってきた時には、自らも、垣内の厚い胸板に裸の腕をまわしていた。

ふと気がつくとき、自分の白いサンダルの足が宙に浮

いて、通路の中を移動していた。

垣内に横抱きに抱えられた清孝は、そのダブルベツドの上へと、運ばれていた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

## 完全版を入手する

# フォー・アンド・ア・ハーフ・アワーズ

Four And A Half Hours

<公開版>

CopyRight 2003 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500